⑶ 引（ひき）　桜（ざくら）　遺　跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 179

Ⅱ．調査の方法と経過 …… 179

Ⅲ．出土遺物 …… 181

イ．土器 …… 181
ロ．石製品 …… 182
ハ．不明鉄製品 …… 182
ニ．キセル …… 183
ホ．古銭 …… 183

Ⅳ．ま　と　め …… 183

調 査 要 項

遺跡所在地：白石市福岡深谷字引桜
遺 跡 記 号：MT（宮城県遺跡地名表登載番号 02069）
調 査 期 間：昭和 46 年 6 月 21 日～7 月 10 日
調 査 面 積：約 1,700m^2
発 掘 面 積：450m^2
調　査　員：宮城県教育庁文化財保護課
　　志間　泰治、白鳥　良一
　　岩渕　康治、佐藤　庄一

Ⅰ．遺跡の位置と環境

引桜遺跡は白石市福岡深谷字引桜に所在し、白石市役所から北北東約5km、蔵王町宮の中心部より西方約1kmの所に位置している。

本遺跡が位置している白石市を中心とした宮城県南部の地形を概観すると、東側に阿武隈山系の北端である東部丘陵帯、西側に白石市の大部分を占める西部山地（奥羽山脈と蔵王火山群）とがあり、その間に、南南西－北北東にかけて幅約4km、長さ約20kmの細長い低地（白石盆地）が広がっている。その低地間を小原方面から北流し、戸沢川、青沢、斉が川、高田川などの支流をあつめた白石川が流れている。白石川は蔵本付近で北東に流路をかえ、さらに小下倉で八宮方面から流出してくる児拾川を、宮で遠刈田方面から流下してくる松川を合わせ、大河原方面に流れこんでいる。これら河川の流域には白石盆地、大河原盆地などの扇状地性の低地がみられるが、白石川、松川を境に西側にある青麻山、蔵王山の東麓が白石川、松川と面する原、長袋、深谷、宮、鉄砲町、曲竹などには段丘の発達がみられ、現在、第1段丘（原段丘）、第2段丘（永野段丘）、第3段丘、（長袋段丘）、第4段丘、（新期段丘）の四つの段丘が知られている。（田山：1933）四段は階段状に並んでおり、引桜遺跡は長袋部落や蔵本部落、児捨川の北方の八宮などと同じ面である第3段丘（長袋段丘）上に位置している。標高は約45mで、南にゆるやかに傾斜している。現状は大部分が畑地で、一部が墓地となっている。

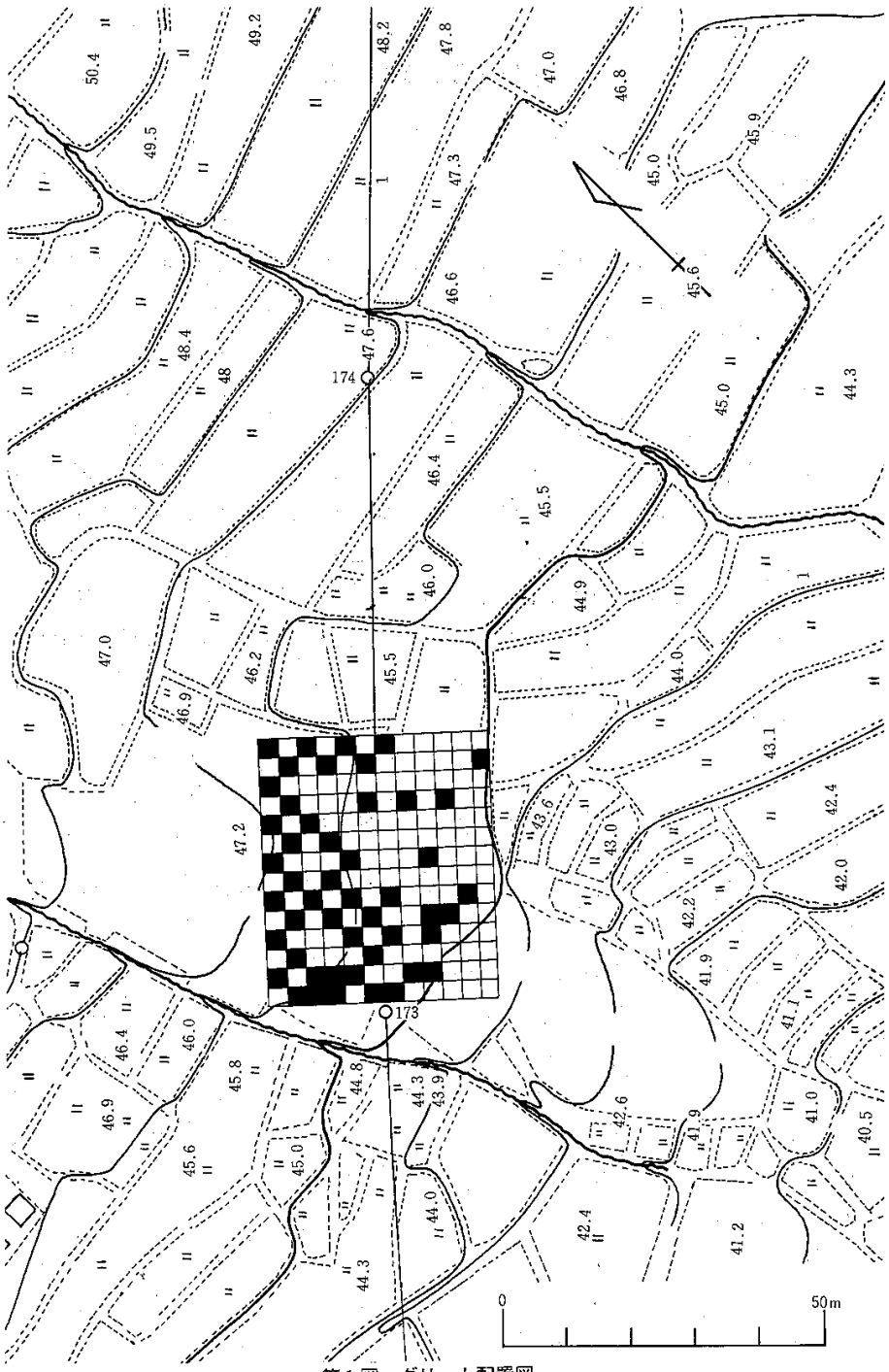
（なお、遺跡の位置と周辺の遺跡については「青木脇・後遺跡第Ⅰ章を参照されたい。」

Ⅱ．調査の方法と経過

調査は昭和46年6月21日から開始された。調査は包含層や遺構の有無、および、その性格の把握を目的として行なわれた。

地区設定にあたっては、畑地の部分に自動車道の中心線を軸として東西36m、南北48mのグリットを設定した。グリット名は南北方向をアルファベット、東西方向をアラビア数字であらわした。発掘は3×3mのグリットを単位として3mおきに、西側グリットから順に行なったその結果、約30cmの厚さを持つ耕土の下は、すぐ地山のロームで、層は一層しか認められなかった。遺構は検出されず、しかも、出土した土器などの遺物も小破片の上調査面積に比して出土数が少なく、遺跡はすでに耕作等により大部分が撹乱をうけていることが判明した。

遺物は、縄文土器が数片、土師器、須恵器が平箱手箱、赤焼土器数片、不定形石器が1点、不明鉄製品1点、キセルの雁首1点、古銭1枚が発見されたにすぎず、まとまりのある遺構や遺物は発見されなかった。発掘面積は450m^{2}である。調査は7月10日に終了した。



第１図　グリット配置図

Ⅲ．出土遺物

調査グリット堆積土中より縄文土器数点、土師器、須恵器平箱手箱、赤焼土器数片、不定形石器1点・不明鉄製品1点、キセルの雁首1点、古銭1枚が出土している。

イ．土器

縄文土器（第2図1～3）

すべて小被片であり、全体の器形等については不明である。地文に縄文が施文されている。胎土に繊維を含むものと含まないものとがある。前者は原体が0段多条である。時期は、早期末～前期初頭と思われる。後者原体はＲＬである。時期は不明である。

土師器

坏　6点出土している。ほとんどが小破片であり、全体の器形を窺えるものは少ない。

すべて製作に際し、ロクロを使用しており、平底である。底部切り離し技法は回転糸切りで再調整が施されている。再調整には手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリとがある。

手持ちヘラケズリの再調整が行われているもの（第3図4～6）は、体部は丸みを持って立ち上がり、口縁部外傾または外反ぎみになる。内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。外面ヘラミガキのものもある。（第2図6）再調整は、底部周縁と体部下半の底部近くとに行われているもの（第2図6）と、体部下半のみに行なわれているもの（第2図4、5）とがある。

回転ヘラケズリの再調整の行われているもの（第2図7）は底部小破片のため器形は不明である。内面ヘラミガキ、黒色処理が施されている。回転ヘラケズリは、底部周縁と体部下半の底部近くとに行なわれている。いずれも表杉ノ入期のものと思われる。

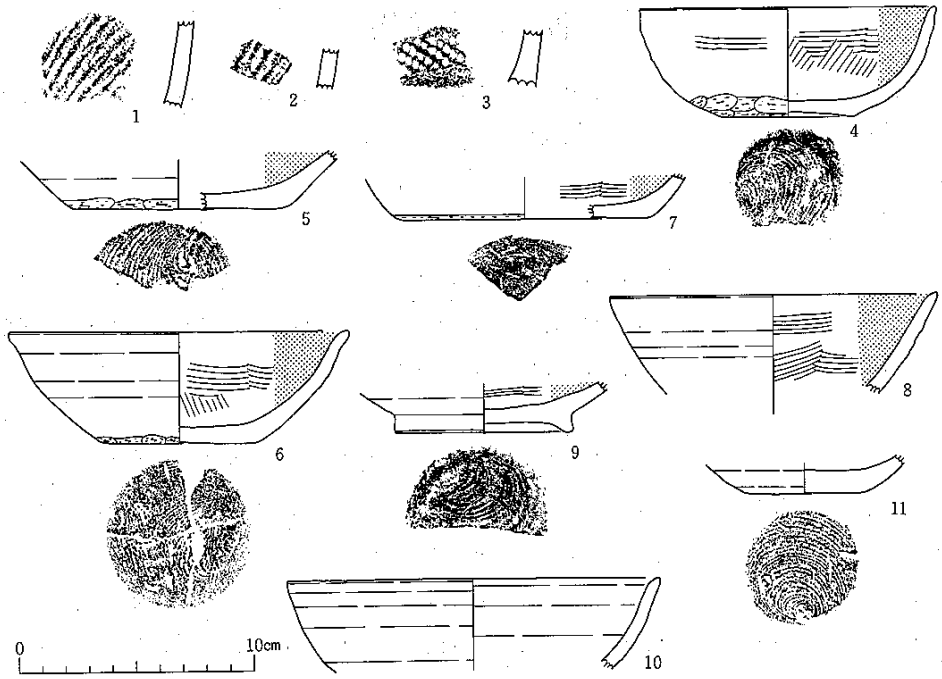
高台付坏（第2図9）底部の小破片である。製作に際しロクロを使用している。器面調整は内面ヘミガキ、黒色処理が施工されている。底部切り離し技法は回転糸切りで、坏部と高台部の接合の際に、ナデの再調整が加えられている。時期は表杉ノ入期と思われる。

嚢　すべて小破片のため全体の器形については不明である。製作に際しロクロを使用しているものと、不使用のものとがある。器面調整は内外面とも口縁部が横ナデ、体部は刷毛目のものが多いが、外面ケズリ、内面ナデのものなどもある。ロクロ使用しているものは、表杉ノ入期のものと思われる。

須恵器

坏　すべて小破片であり、全体の器形は不明である。このことは以下同じである。第3図10は口縁部破片であるが、体部わずかに丸みをもち、口縁部外傾する。内外面ともロクロ調整である。

図示以外に底部破片が6点程出土しているが、いずれも回転糸切りで再調整は施されていな



第２図　出土遺物

い。

甕　外面平行タタキ目のものが多く、内面は平行、青海波がみられる。その他、外面ケズリ内面刷毛目またはナデ、外面ナデ内面青海波またはナデなどの器面調整が行なわれているものなどがある。

壺　1点出土している。体部上半部の多くを欠くため、全体の器形は不明である。内外面ともロクロ調整が行われている。

赤焼土器

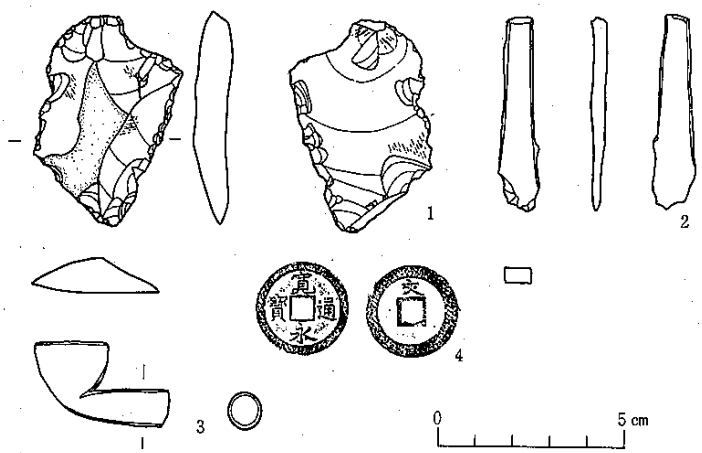
坏（第2図11）赤焼土器の破片が出土している。

ロ．石製品（第3図1）

不定形石器1点出土している。縦長の剥片である。背面を三辺調整しており、腹面も二辺調整が行なわれている。平面形は長方形に近い。縄文時代のものと思われる。

ハ．不明鉄製品（第3図2）

残存長約5.2cm・幅約0.7～1cmの細長い鉄製品である。両端欠損している。一方の端の幅が



第３図　出土遺物

広く、厚さは薄くなっている。用途は不明である。

ニ．キセル（第3図3）

雁首の部分のみが出土している。雁首の長きは約3.7cmで羅字との接続部直径は約8mm、火皿は直径約2cmである。

ホ．古銭(第3図4)

寛永通宝が一枚出土している。

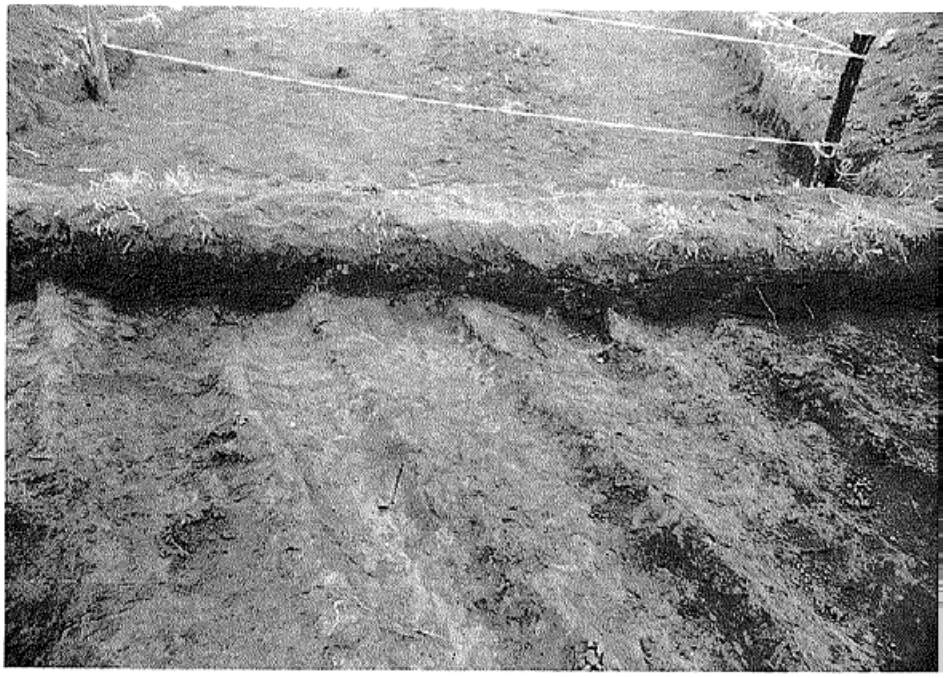
Ⅳ．ま と め

1．引桜遺跡は標高45m前後の白石川左岸流域に発達した、河岸段丘上に立地している。

2．今回の調査では遺構はまったく発見されず、遺物も若干の縄文土器片や不定形石器、平安時代のものとみられる土師器、須恵器の破片、赤焼土器、近世のものと思われる不明鉄製品キセルの雁首、古銭が出土したにすぎない。

種別	器形	部位	器面調整 外面—内面	第1a層 C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	T	不明	第1b層 F	G	H	J	L	M	N	不明	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ(黒色)—ミガキ(黒色)				1								1												2
			ロクロ—ミガキ(〃)		1	1	1	4	6	4	5	4	2	3	6	7	1	15				2		1			63
			〃—ロクロ			1				3		2	3	3	6	7	1	21									47
		体部	ミガキ(黒色)—ミガキ(〃)												1			1									2
			ロクロ—ミガキ(〃)	1	4	1	2	3	7	4	18	9	23	15	39	36		101				2					255
			〃—ナデ							1	4	1			1	4		6			1						18
			〃—ミガキ				1	2	2	1	5	4	5	9	4	8		30									71
			〃—ヘラナデ							1			2	1	2	1		1									8
			〃—不明	2			6	5	7	9	5	5	8	10	9	17		83									166
		底部	糸切			1	1	3	2		5	3	4	5	9	10		4		1		2					50
			不明								1	2	1	2			1										7
			台付								1				1												2
	甕	口縁部	横ナデ—横ナデ				1		2				1			2				2							8
		体部	刷毛目—刷毛目		1		1	2	1		7	4	2		1	2		2		1	1						25
			〃—ナデ						1				1	1				2									5
			〃—ミガキ						7					1				1									9
			ケズリ—刷毛目													1		1									2
			〃—ナデ						2	1	1	1	1		3		1					1	1				12
			〃—不明						1						1	2											4
			〃—ロクロ							1			1														2
			ナデ—刷毛目								1																1
			〃—ナデ																		2	1		2			5
			ヘラナデ—不明								1																1
			ミガキ—不明	1	2	1	2	4	3		9	2	7	6	10	8		9									64
			ロクロ—ロクロ						2	1		2	1		1	2		2									11
			〃—ナデ						2	1			1		1	1											6
			〃—ヘラナデ									1	2			2											5
			〃—刷毛目					1	1																		2
			不明—刷毛目																	1							1
			〃—不明			1		1	2		1	3	1		1	1		3	3	2	1	3			1	2	26
		底部	糸切									1			1												2
			不明								2				2	2											6
須恵器		底部	糸切		1		2			1	1									1							6
			不明										1														1
	甕	体部	平行—平行									1	2	1		1								1			6
			〃—青海波					1	3	4	1			1				1									17
			〃—ナデ			1					1				1	3											6
			〃—オサエ	1	1		2	1		5	2	1	3	6	8	8	1	3				1		1			44
			〃—不明		1		1	1					1	2	1	2	1										10
			ケズリ—刷毛目				1									1											2
			〃—ナデ						1			1	1														3
			〃—不明									1	1			1		1									4
			ナデ—青海波						1																		1
			〃—ナデ							1	1	1		2	4	1											10
			〃—不明						1		1																2
			ロクロ—ロクロ			1	3	1	1	1	4	1	2	3	8	6		3		1							35
			〃—刷毛目								1																1
			不明—ナデ													1											1
			〃—不明		1		1	1	1		2		1	2	4	6	1	1									21
			計	5	12	8	26	30	56	39	80	50	78	73	126	143	7	291	3	9	5	12	1	5	1	2	1,062

1．遺跡遠景（発掘調査実施前）



2．トレンチの状況

⑷ 明神脇遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 189

Ⅱ．調査の方法と経過 189

Ⅲ．発見された遺構と遺物 191

1．竪穴住居跡とその出土遺物 191
2．土壙とその出土遺物 194
3．表土出土遺物 206

Ⅳ．遺構と遺物について 209

1．出土土器について 209
2．その他の遺物について 214
3．墨書文字について 214
4．住居跡の年代について 215
5．土壙の性格と年代について 215

Ⅴ．ま　と　め 217

調査要項

遺跡所在地：宮城県志白石市福岡深谷字明神脇

遺 跡 記 号：MW（宮城県遺跡地名表登載番号：02072）

調 査 面 積：約 2000m^2

発 掘 面 積：405m^2

調　査　員：文化財保護室

志間泰治、氏家和典、藤沼邦彦、白鳥良一、岩渕康治、佐藤庄一

調査補助員：斎藤吉弘、七戸貞子

Ⅰ．遺跡の位置と環境

明神脇遺跡は、白石市内を南北に走る国道4号線を市役所から約5km北上したところの深谷地区内にあり、白石市福岡深谷字明神脇に所在する。

本遺跡は、高館丘陵の南方にあり、白石川によって、形成された白石低地の河岸段丘上に立地し、東側に舌状に発達する台地の東部に位置する。遺跡付近の微地形をみると、台地全体は東側に傾斜し、北端・東端部は南流する源氏川によって開析されているため急斜面を形成する。台地の頂上部は南に向かってなだらかに傾斜している。遺跡付近は、標高47～48mで、沖積地との比高は、約16mある。遺跡の範囲は、周囲の地形および遺物の散布状況から、台地の北部東西50×南北40mと推定される。現状は、宅地、水田、畑地である。

なお、東北自動車道路線敷予定地は、本遺跡の所在する舌状台地の北側を北東に通過するため、調査は、台地の北側を対象とした。（遺跡の位置と周辺の遺跡の詳細については「青木脇・後遺跡第Ⅰ章」を参照されたい。）

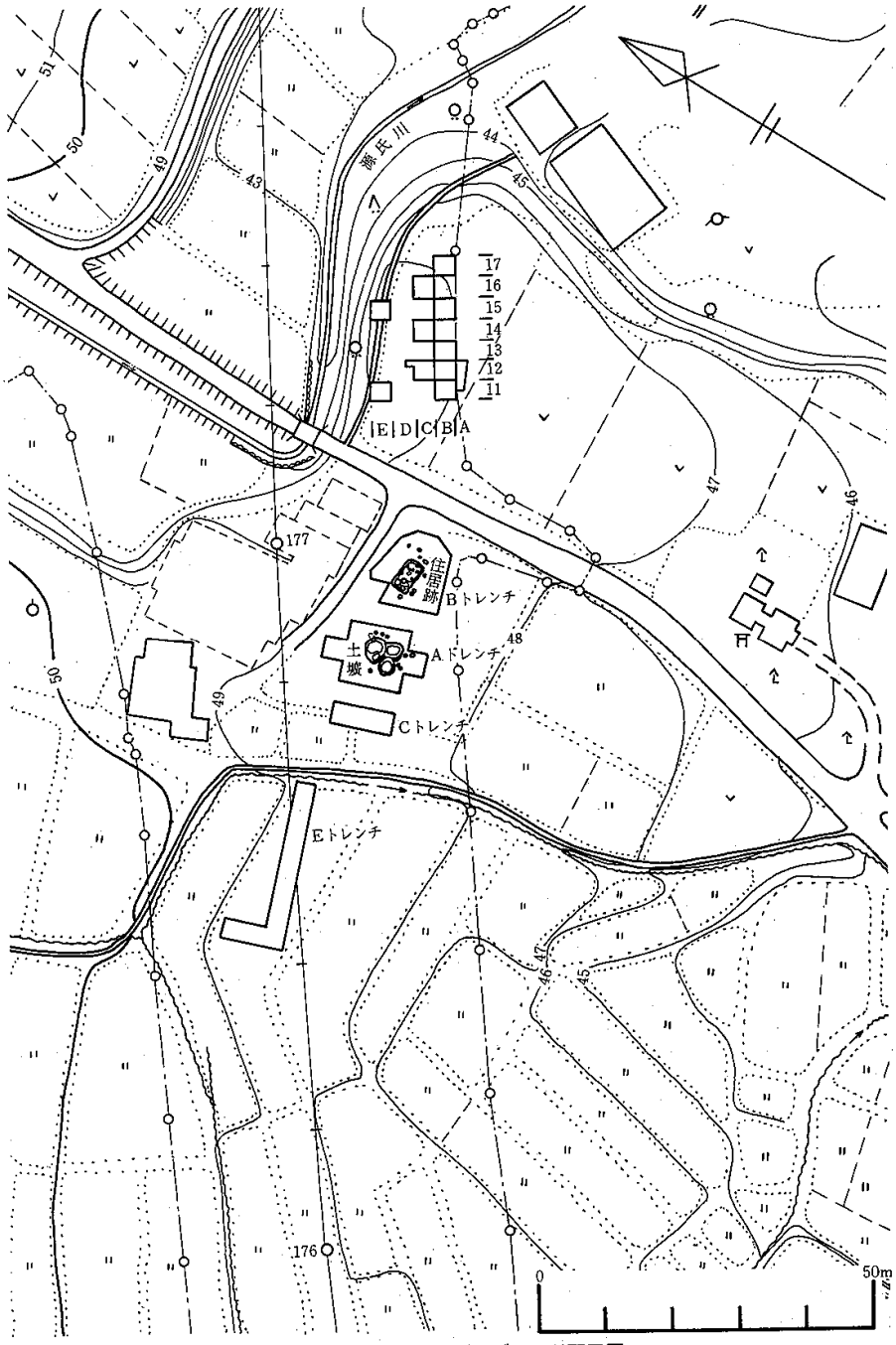
Ⅱ．調査の方法と経過

調査は、6月7日から開始した。台地を横断する農道の西側では、トレンチを地形に合わせて設定し調査を進めることにした。はじめに、Ａトレンチを調査したところ、耕作土下の地山面で黒色を呈した落ち込みが確認された。そこで、この落ち込みの上面を調査したところ、土師器、須恵器の破片が多量に出土する部分があり、何んらかの遺構の存在が予想された。さらに、調査を進めたところ、3基の土壙の切り合いを確認した。

つぎに、Ａトレンチの両側にＢトレンチ、Ｃトレンチを設定し、周囲の遺構検出に努めたところ、Ｂトレンチの耕作土下地山面で竪穴住居跡を1軒検出した。Ｃトレンチでは、遺構は検出されなかった。さらに、西側における遺跡の延びを調べるためＥトレンチを設定し、調査したが遺構は検出されなかった。

一方、農道の東側では、東側における遺跡の延びを調べるため、3×3mを単位としたグリッドを組んで調査を進めることにした。調査の結果、Ｂ－15・17を除く各地区で少量の遺物が出土しただけで、遺構は検出されなかった。

その後の調査は、土壙3基と竪穴住居跡1軒の精査につとめ、調査は、9月10日に終了した。調査対象面積は、約2000m^{2}で、そのうち発掘面積は405m^{2}である。



第１図　周辺の地形、グリッド配置図

Ⅲ．発見された遺構と遺物

1．竪穴住居跡とその出土遺物

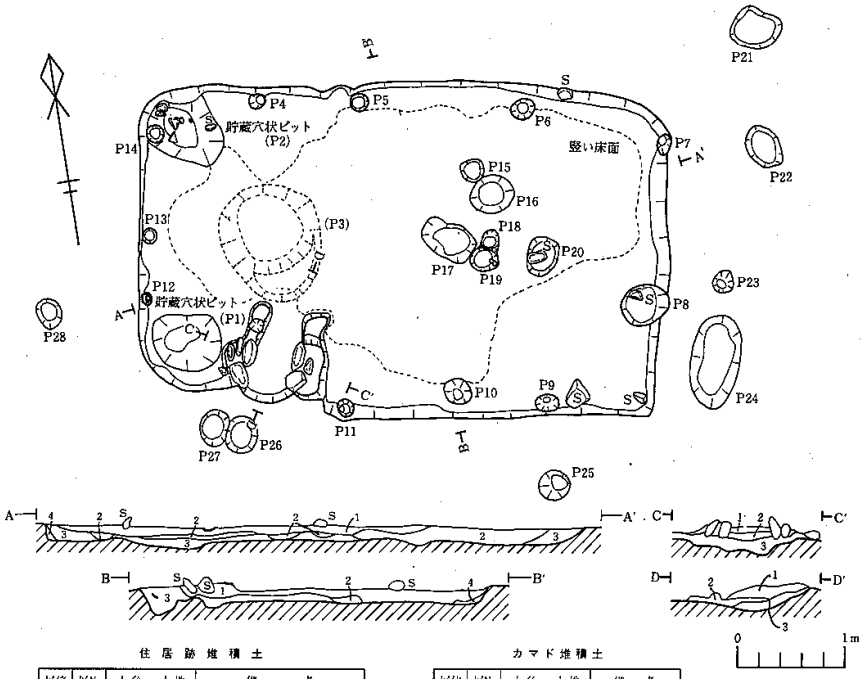
〔重複〕住居跡内の西側中央部で約1.1×0.9mの平面形が楕円形で、深さ31cmの掘り込みを検出しているが、住居跡との切り合いは不明である。遺物は出土せず、その性格および住居跡との関係は不明である。

〔遺構の確認〕地山面である。

〔平面形、規模〕平面形は、長軸4.8m、短軸3.0mの長方形を呈している。

〔竪穴層位〕堆積土は、4層確認された。第1層は、住居跡西側から中央よりやや東側に広く分布して堆積している。第2層は、住居跡東側を中心に分布し、床面まで達している。また、住居跡中央から西側にかけては、部分的に認められた。第3層は、住居跡西側を中心に、あるいは壁沿いに認められ、床面上に堆積している。第4層は、西壁沿いのみに認められた。

〔壁〕地山を壁としている。東壁では、ゆるやかな傾斜をもって立ちあがるが、その他の壁では、急角度に立ちあがる。現存する壁の高さは、各壁とも10～15cmである。



住居跡堆積土

層位	層No	土色・土性	備考
1層	1	黒褐色・砂質土	細かい焼土、木炭を若干含む
2層	2	暗褐色・粘質土	焼土、木炭をブロック状に含む
3層	3	黒褐色・砂質土	
4層	4	暗褐色・粘質土	

カマド堆積土

層位	層No	土色・土性	備考
1層	1	黄色・粘土	焼土を混じえる
2層	2	焼土	
3層	3	黒褐色・粘質土	掘方埋土

第2図　竪穴住居跡

〔床〕地山を床としている。中央部では、非常にかたくしまっているが、壁周辺では、あまりかたくない。ほぼ平坦である。掘り方は、認められない。

〔柱穴〕17個のピットが床面で検出された。そのうち、P_4～P_{14}の11個は、壁に添って配置され、それらの中には、ほぼ対称の位置にあるものもある。しかし、柱痕跡が検出されず、配置に規則性のみられないことから、その性格は不明である。他の6個は、住居跡の中央部やや東寄りに集中しているが、その性格は不明である。

〔周溝〕認められない。

〔カマド〕南壁中央よりやや西寄りに認められる。煙道部は、検出されていない。燃焼部両側壁は、数個の切石で補強した粘土の積み上げによって構築されている。燃焼部底面の幅は約40cmで、奥壁は緩やかに立ち上がる。カマド内の堆積層は、大別して2層認められる。層の状況から、第1層、第2層、とも廃絶後のものと考えられる。燃焼部に掘り方が認められる。

〔貯蔵穴状ピット〕カマドの西脇(住居跡南西隅)と住居跡北西隅に認められ、ともに約0.7×0.5mの不整楕円形で、深さは床面から10～20cmある。堆積土から、土師器が出土している。

〔出土遺物〕床面、堆積土から土師器、須恵器、石皿が出土している。

〈床面〉

土師器

坏(第3図1～3)　製作に際し、ロクロを使用している。器形は、体部でふくらみながら口縁部が直線的に外傾するもの(1・3)、口縁端部が外傾するもの(2)がある。

底部の切り離しは、回転糸切り技法によるもの(1・2)と切り離し後再調整が加えられているため切り離しの不明なもの(3)がある。

前者は、再調整として体部下端(1)に、体部下端から底部周縁(2)に手持ちヘラケズリが認められる。

後者は、体部下端から底部全面に手持ちヘラケズリが認められる（3）。

両者とも、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

なお、1・2とも墨書文字が認められ、1は体部下端から口縁部にかけてあり「二万」と読めるが、2は欠損のため判読できない。

〈堆積土〉

土師器

坏(第3図4～6)製作に際し、いずれもロクロを使用している。4は口縁部、6は底部を欠損している。器形は、底部から体部下半にかけてふくらみをもち、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。

底部の切り離しは、回転糸切り技法によるもの（4）と再調整が加えられているため切り離

し技法が不明なもの(5)がある。

前者は、体部下端に手持ちヘラケズリが認められる。後者は、底部全面に手持ちヘラケズリが認められる。両名とも、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

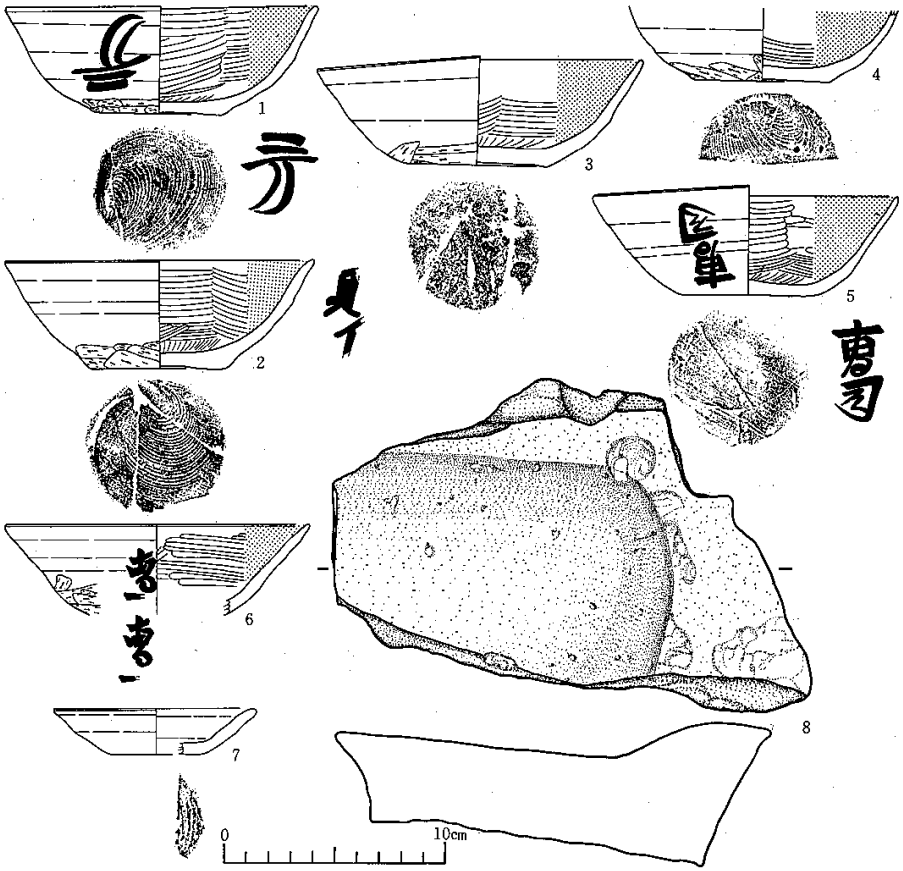
なお、5・6に墨書文字が認められ、5は体部下端から口縁部にかけてあり「曹司」と読め、6は体部下半から体部上半にかけてあり「曹?」と初めの文字だけが読める。二文字目は、欠損のため一部しかはっきりしないが「司」にあたるのかもしれない。

赤焼土器

坏　(第3図7) 低平な器形で、体部から口縁部にかけて、直線的に外傾し、さらに口縁端部でやや外傾する小形の坏である。

石器

石皿　(第3図9) 欠損しているため全体の形態は不明である。上面の中央部は使用されたため、皿状の凹みが認められるが、周縁部に自然面を残している。



第３図　竪穴住居跡出土遺物

2. 土壙とその出土遺物

竪穴住居跡西側約9m離れたところで土壙3基が検出された。3基の土壙は、互いに切り合っている。その新旧関係は、平面形および堆積土の観察から2号土壙が古く、1号土壙、3号土壙がそれよりも新しいことが確認できる。

なお、出土遺物の大部分は堆積土から出土している。底面からも出土しているが、明確にしえなかったので、ここでは一括して堆積土出土遺物として扱う。また、土壙の確認に際し、1基と考えて遺物を取り上げたものがある。これらの遺物は、いずれの土壙に伴うものか明確にできないものなので、以上の遺物とは区別し、1号土壙～3号土壙出土遺物として取り扱う。

1号土壙

地山面で確認された。平面形は、不整楕円形を呈し、3.3×2.5mの規模である。深さは、最深部で50cmある。底面西側に深いクボミがみられ、また、北東部には底面を約15cm程掘り下げ、さらに北東方向に奥行60cm程掘り込んだトンネル状の張り出しがある。この張り出し前面には、円形ピットが掘り込まれている。壁面の立ち上がりは、北側は比較的ゆるやかであるが、南側はほぼ垂直である。底面は多少凹凸が認められるがほぼ平坦である。

堆積土は、3層に分けられいずれも中央部に向かって傾斜している。とくに第1層、第2層中には灰や木炭の混じった焼土がブロック状に各所にみられた。

〔出土遺物〕堆積土(特に第1層、第2層にかけて)から、多量の土師器、須恵器が出土している。他に縄文土器、石器が出土している。

土師器

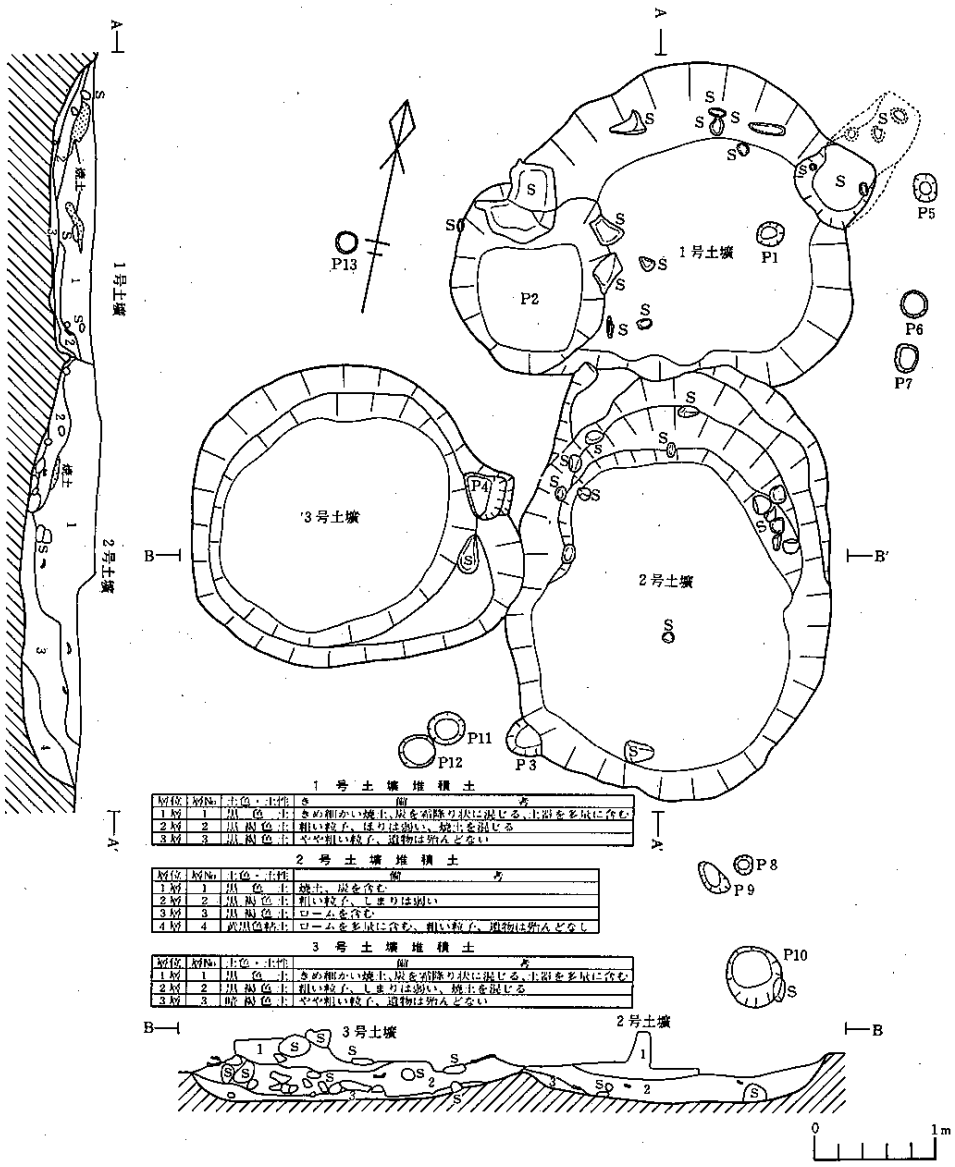
坏　(第5図1～6)製作に際し、いずれもロクロを使用している。1・2は口縁部が欠損している。器形は体部から口縁部まで直線的に外傾するが再調整が加えられているため、体部下端が丸味を帯びるもの(1・2・5・6)と、体部下端で直線的に立ち上がり、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの(4)がある。

底部の切り離しは、回転ヘラ切り技法によるもの(1・5)、回転糸切り技法によるもの(2～4)、再調整が加えられているため不明なもの(4)がある。

回転ヘラ切り技法によるものは、再調整として体部下端および底部周縁に手持ちヘラケズリ(1)が、体部下半および底部全面に回転ヘラケズリ(5)が施されている。

回転糸切り技法によるものは、2は再調整として体部下半に手持ちヘラケズリが施されているが、3・4は再調整が認められない。

底部の切り離しが不明なものは、再調整として体部下端および底部全面に手持ちヘラケズリが施されている（6）。



1 号 土 壙 堆 積 土

層位	層No.	土色・土性	備考
1層	1	黒 色 土	きめ細かい焼土、炭を帯状に混じる、土器を多量に含む
2層	2	黒 褐 色 土	粗い粒子、ほりは弱い、焼土を混じる
3層	3	黒 褐 色 土	やや粗い粒子、遺物は殆んどない

2 号 土 壙 堆 積 土

層位	層No.	土色・土性	備考
1層	1	黒 色 土	焼土、炭を含む
2層	2	黒 褐 色 土	粗い粒子、しまりは弱い
3層	3	黒 褐 色 土	ロームを含む
4層	4	暗黒色粘土	ロームを多量に含む、粗い粒子、遺物は殆んどなし

3 号 土 壙 堆 積 土

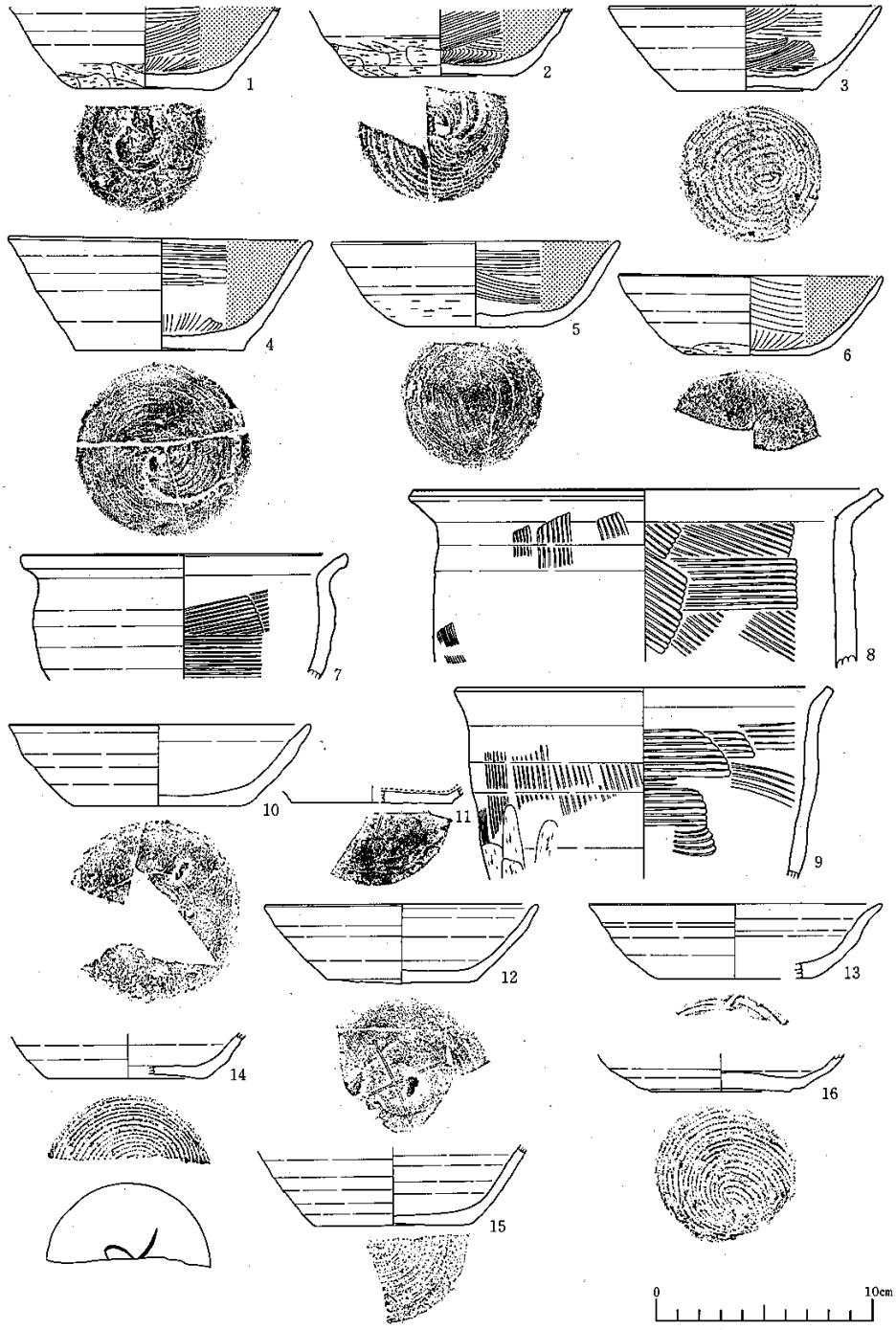
層位	層No.	土色・土性	備考
1層	1	黒 色 土	きめ細かい焼土、炭を帯状に混じる、土器を多量に含む
2層	2	黒 褐 色 土	粗い粒子、しまりは弱い、焼土を混じる
3層	3	暗 褐 色 土	やや粗い粒子、遺物は殆んどない

第4図　土　　壙

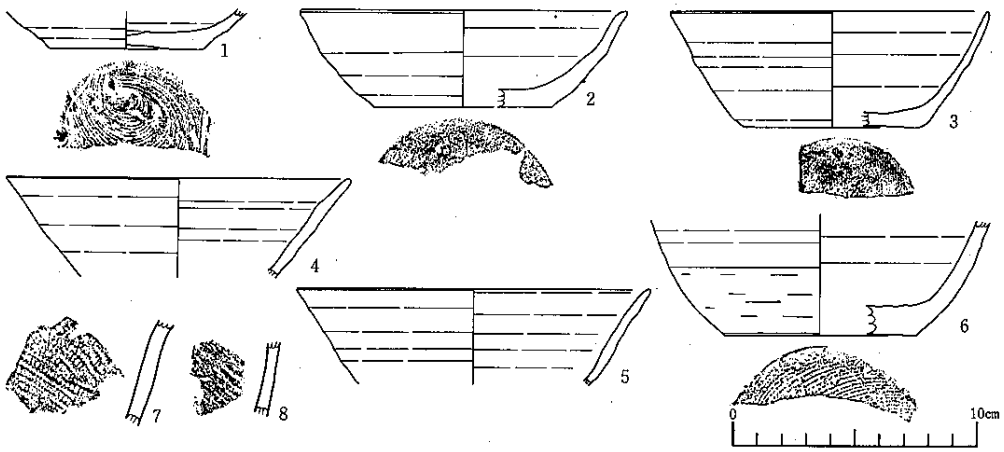
三者とも、外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されているが、3 は再酸化されたと思われ黒色が脱色している。

甕　(第5図7～9)　製作に際し、いずれもロクロを使用している。体部下半から底部が欠損しているため、全体の器形は不明であるが、口縁部の外反するものである。

外面は、体部から口縁部にかけてロクロ調整(7)、体部上半から口縁部にかけてロクロ調整(8・9)、体部下半にヘラケズリ(9)が認められる。8、9はロクロ調整の前段階として頚



第5図　1号土壙出土遺物



第６図　１号土壙出土遺物

部から体部上半に刷毛目が施されている。内面はいずれも刷毛目である。

なお、底部破片でその外面に、体部破片でその内面に籾の圧痕が認められるものが各1点ずつ出土している（図版5－9・10）。

須恵器

坏　（第5図10～15、第6図1～5）　器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの(10～12、3)、体部で外傾し口縁部がやや外反するもの(13、2)以外は、欠損のため不明である。

底部の切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの(10～12)、回転糸切り技法によるもの(13～16、1)、再調整が加えられているため不明なもの(2・3)がある。

回転ヘラ切り技法によるものには、再調整として底部に手持ちヘラケズリの認められるもの(10、11)、再調整の認められないもの(12)がある。

回転糸切り技法によるものは、再調整が施されていない(13～16、1)。

底部の切り離し技法の不明なものには、再調整として底部に回転ヘラケズリの認められるもの(2)、手持ちヘラケズリの認められるもの(3)がある。

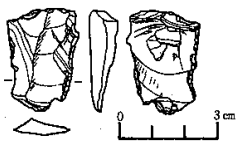
なお、14の底面に墨書文字が認められるが、欠損のため判読できない。

壺　（第6図6）　底部の切り離しが回転糸切り技法によるものである。体部上半から口縁部まで欠損しているため、全体の器形は不明であるが体部下端から体部下半にかけてややふくみをもちながら外傾する。体部下端に再調整として回転ヘラケズリが加えられている。

縄文土器　（第6図7・8）　体部破片である。7は単節斜行縄文ＬＲを横位に施文している。8は撚糸文Ｌを横位に施文している。内面は丁寧にミガキが施されている。

石器

不定形石器　（第7図）縦長の剥片を利用したものである。b面にポジティブバルブが残されている。a・b両面の右側辺に調整剥離が施されている。横断面形は三角形を呈している。



第7図　1号土壙出土遺物

2号土壙

地山面で確認された。1号土壙と切り合っているがそれより古い。平面形は、長楕円形を呈し、3.6×2.7mの規模である。深さは最深部で約60cmある。壁面の立ち上がりは、北側は比較的ゆるやかであるが、南側はほぼ垂直である。底面はほぼ平坦で北側から南側にかけてゆるやかに傾斜している。

堆積土は4層に大別できる。第1層はほぼ全域に分布し、2～4層は西側から東側に傾斜して堆積している。また、第1層から第2層にかけては焼土や木炭がブロック状に入っているが、とくに第2層中には、焼土が多量に含まれていた。さらに、各層には大小の河原石や切石が多数含まれていた。

〔出土遺物〕堆積土(特に第1層、第2層にかけて)から、土師器、須恵器、赤焼土器、縄文土器、棒状鉄器(注)が出土している。

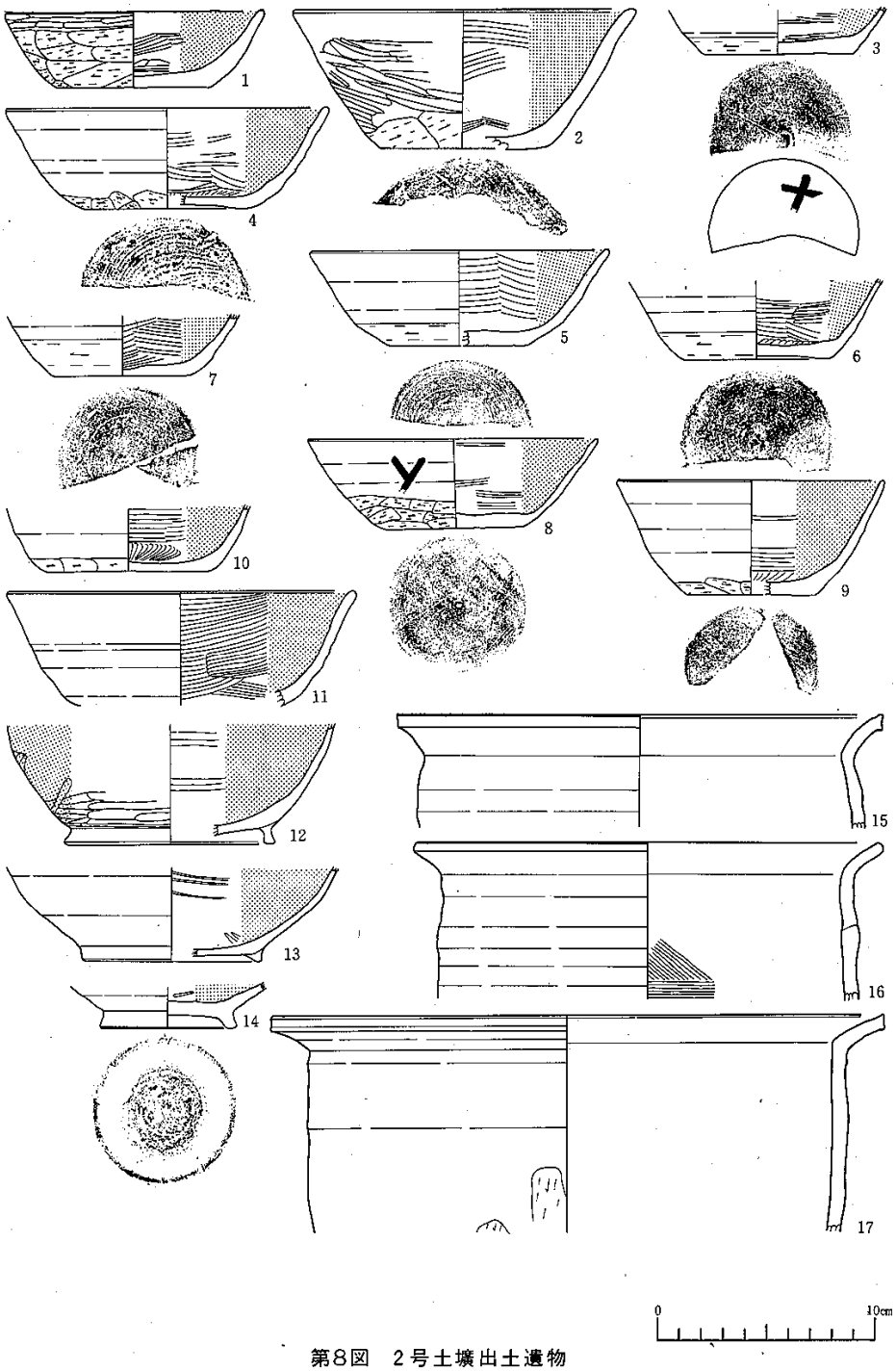
土師器

坏　（第8図1～11）　製作に際し、ロクロを使用しないもの(1・2)とロクロを使用しているもの(3～11)がある。

前者は、器形は体部にややふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部で外傾するもの(1)、体部下半でややふくらみをもち、口縁部が外傾するもの(2)がある。1は口縁部外面にヘラミガキが、体部外面および底部外面にヘラケズリが施されている。2は体部下端から底部全面にヘラケズリが、体部下端から口縁部まではヘラミガキが認められている。両者とも内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

後者は、底部の切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの(3)、回転糸切り技法によるもの(4)、再調整が加えられているため切り離しが不明なもの(5～9)がある。器形は、体部下半でややふくらみをもち口縁部が外傾するもの(4・5・9)、体部から口縁部まで直線的に外傾するもの(8)があり、その他は口縁部あるいは底部が欠損しているため全体の器形は不明である。回転ヘラ切り技法によるものは、再調整として体部下端および底部全面に回転ヘラケズリが施されている(3)。

注　東北自動車道関係遺跡発掘調査概報(宮城県文化財調査報告書第25集)－明神脇遺跡－に記載されている。発掘調査時に作成した平面図に出土地点が記入されているが、実物は紛失した。



第8図　2号土壙出土遺物

回転糸切り技法によるものは、再調整として体部下端に手持ちヘラケズリが認められる(4)。

底部の切り離しが不明なものには、再調整として体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリが認められるもの(5〜7)、手持ちヘラケズリが認められるもの(8〜10)がある。

三者とも、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。

なお、3の底部、8の体部および底部にそれぞれ墨書文字が認められる。3は「十」と読めそうであるが文字付近は黒褐色を呈しているためそれ以上の判読は難しい。8は墨書文字の痕跡が不明瞭なため判読できない。

高台付坏　(第9図12〜14)　製作に際し、いずれもロクロを使用している。底部の切り離しは、すべて回転糸切り技法によるものである。器形は口縁部を欠くため不明である。12は坏部全体にヘラミガキ・黒色処理が、13・14の両者はロクロ調整のみ認められる。内面はいずれもヘラミガキ・黒色処理であるが、12・14の両者はヘラミガキの前段階としてヘラナデが認められる。台部は短く、台部の端部は角ばったり丸くおさまったりしている。

甕　(第8図15〜17、第9図1〜4)　製作に際し、いずれもロクロを使用している。器形は口径に対し器高が大きく長胴形を呈し、口縁部は強く外反するもの(15〜17・1)と弱く外反するもの(2)がある。

口縁部の強く外反するものには、口縁端部が上方に立ち上がるもの(15)、角ばっておさまるもの(16〜17・1)がある。口縁部内外ともロクロ調整であるが、体部内外面に差違が見い出される。すなわち、体部外面がロクロ調整のもの(15・16)、ロクロ調整、手持ちヘラケズリのもの(17・1)、体部内面はロクロ調整のもの(15・17)、ナデのもの(16)、ロクロ調整、ヘラナデのもの(1)がある。

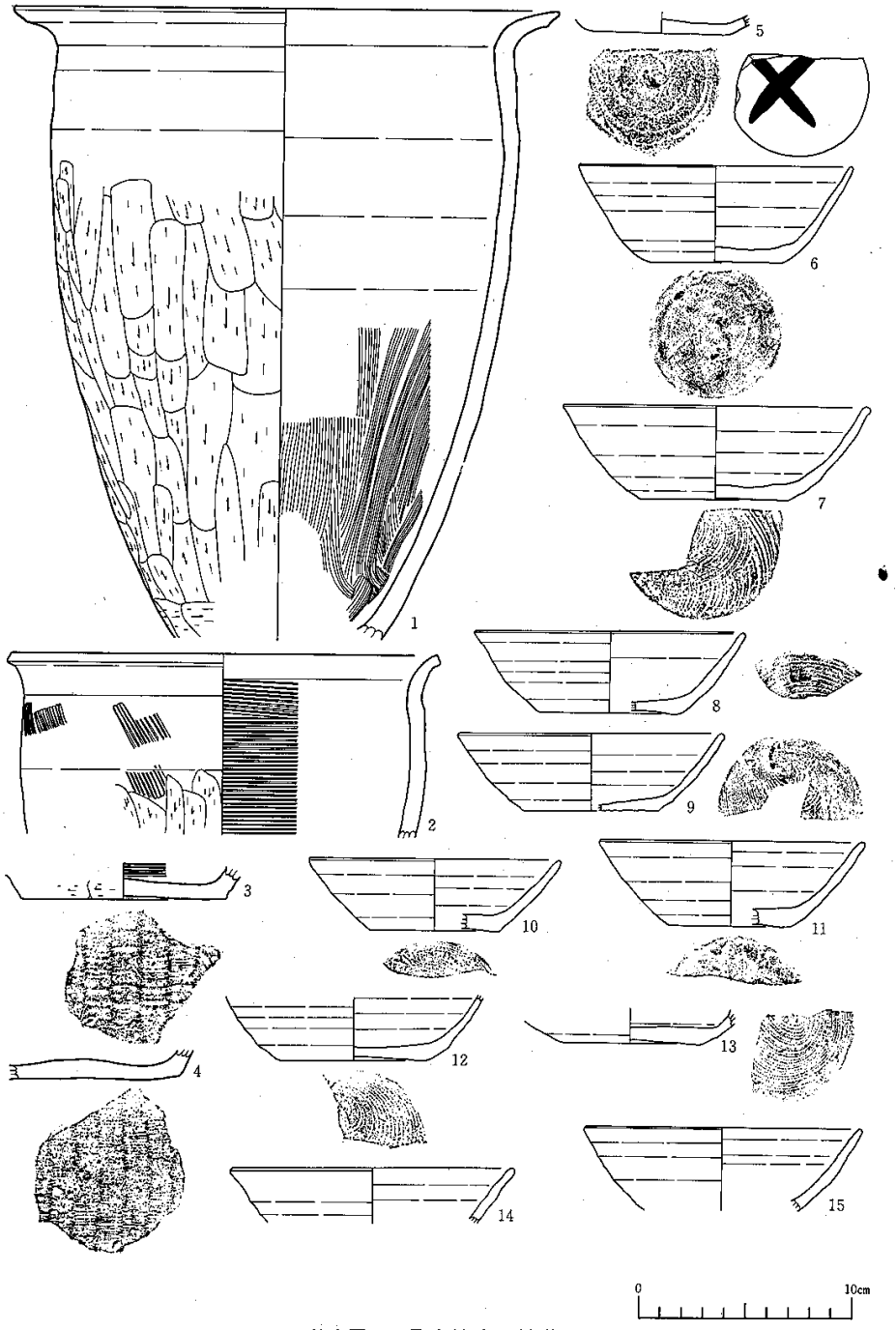
口縁部の弱く外反するものは、口縁端部が角ばっておさまる(2)。体部外面はロクロ調整、手持ちヘラケズリで、さらに前段階の調整として刷毛目が認められる。体部内面は刷毛目である。

なお、底部に蓆状圧痕の認められるもの(3・4)があるが、ロクロを使用しているかどうかはっきりしない。3は底部外面に籾の圧痕が認められる。

須恵器

坏　(第9図5〜15)　底部の切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの（5・6）、回転糸切り技法によるもの(7〜13)がある。器形はいずれも、体部下半にふくらみをもち、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。

前者は、底部の切り離し後、底部周縁に手持ちヘラケズリを施すもの(5)と再調整の認められないもの(6)に分けられる。5の底面には、一部欠損しているため不明瞭であるが墨書で「×」印を記している。

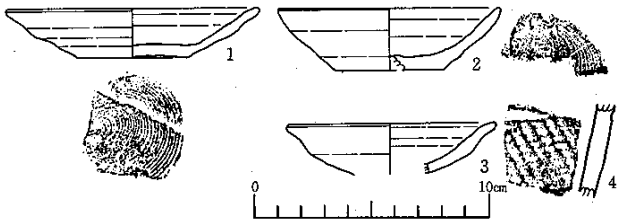


第9図　2号土壙出土遺物

後者はいずれも、底部の切り離し後、再調整は加えられない。

赤焼土器

坏　(第10図～3)　いずれも、器形は低く体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁部がそのまま直線的になるもの（2）、外反ぎみのもの（1・3）がある。



第10図　２号土壙出土遺物

縄文土器　(第10図4)　体部破片である。一条の沈線下に縦位に単節斜行縄文ＬＲを施している。内面は丁寧にミガキが施されている。

3号土壙

地山面で確認された。2号土壙と切り合っているが、それよりも新しい。平面形は径2.4～2.6ｍのほぼ円形を呈しているが、南東部の壁が舌状に張り出しているため壁上端での平面形は卵形に近い。深さは最深部で64cmある。東壁の上部に浅い三角形状のピット（P_4）がある。

底面は、ほぼ平坦で壁の立ち上がりは、東側は比較的ゆるやかであるが西側は急である。堆積土は、3層に大別され、いずれも底面にほぼ水平に堆積している。第1層から第2層にかけて非常に多くの礫が含まれており、ほぼ礫で埋まっているような状態である。また、第2層中には焼土や木炭のブロックがみられる。

〔出土遺物〕1号、2号両土壙に比べて、遺物の出土量は少ないが、堆積土から土師器、須恵器、鉄鏃が出土している。

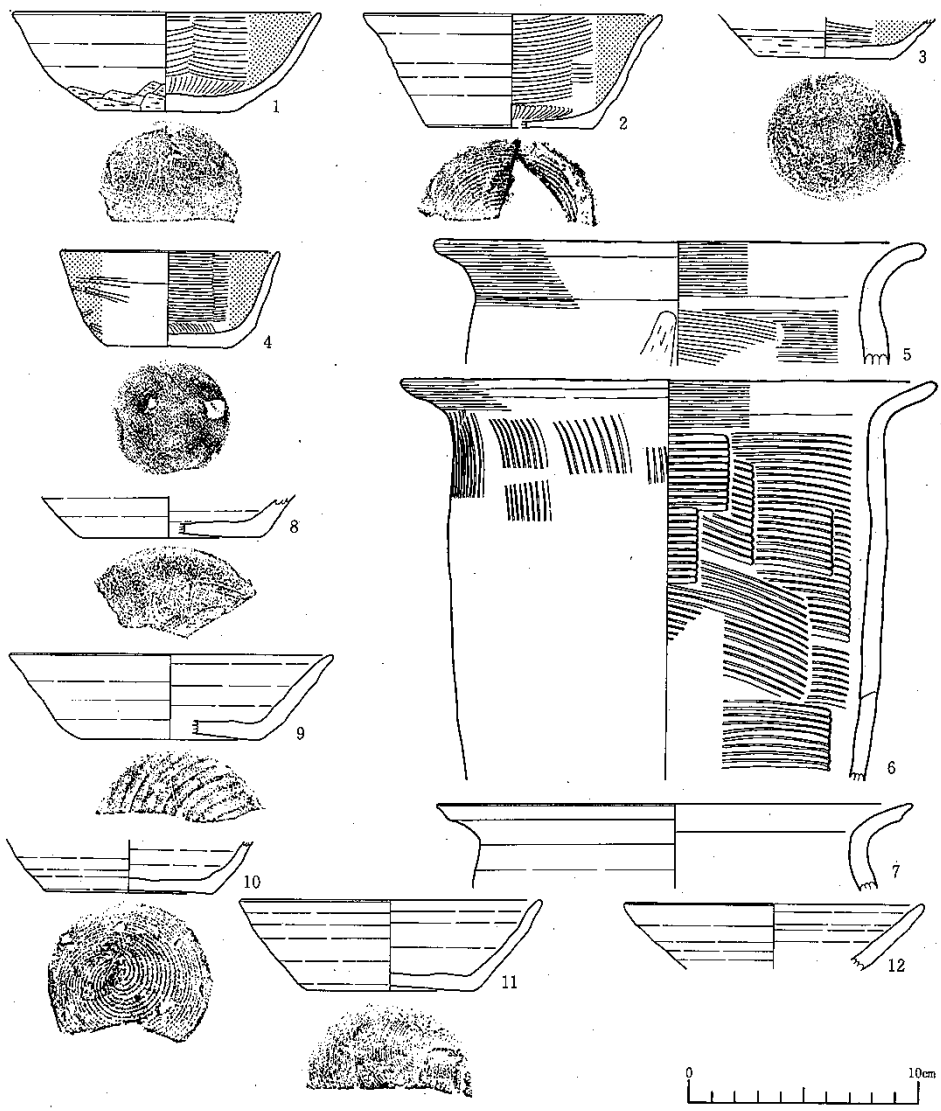
土師器

坏　(第11図1～4)　製作に際し、いずれもロクロを使用している。器形は体部にふくらみをもって外傾し、口縁端部で幾分外傾するもの(1)、体部が直線的に立ち上がり口縁端部が外傾するもの(2)、体部下半に稜をもち体部から口縁部にかけて垂直ぎみに立ち上がるもの(4)がある。3は口縁部を欠くため全体の器形は不明である。

底部の切り離しは、回転糸切り技法によるもの(1・2)と再調整が加えられているため切り離しの不明なもの(3・4)がある。

前者は、再調整として体部下端および底部全面に手持ちヘラケズリが加えられているもの(1)と再調整が加えられていないもの(2)に分けられる。ともに外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

後者は、再調整として体部下端および底部に回転ヘラケズリが加えられている(3・4)。3



第11図　3号土壙出土遺物

は外面にロクロ調整、内面にヘラミガキ・黒色処理が、4は内外面ともにヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕　(第11図5～7)　製作に際し、ロクロを使用していないもの(5・6)とロクロを使用しているもの(7)がある。いずれも体部下半から底部にかけて欠損している。器形は口径に対して器高が大きく、長胴形を呈し口縁部で強く外反する。

前者は、口縁端部が丸くおさまる。口縁部内外面に横ナデが認められる。5は体部外面上半

にヘラケズリが、体部内面にナデが施されている。6は体部内外面とも刷毛目が施されている。

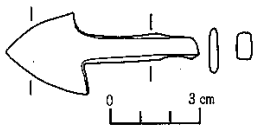
後者は、口縁端部がやや上方に立ちあがる。口縁部内外面ともロクロ調整が認められる。

須恵器

坏　(第11図8～12)　底部の切り離しが、回転ヘラ切り技法によるもの(8)、回転糸切り技法によるもの(9～11)がある、器形は9・11とも体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部でやや外傾する。10・12は口縁部あるいは底部が欠損しているため、全体の器形は不明である。

前者は、底部下端に再調整として手持ちヘラケズリを施すもの(9)と再調整の加えられないもの(10・11)とに分けられる。

なお、9は体部下端が磨滅しているため、ケズリの単位は不明である。



第12図　3号土壙出土遺物

鉄器

鉄鏃　(第12図)　中子の基部と両側のかえりの先端部が一部欠損している平根の鉄鏃である。中子の横断面は、長方形を呈している。現長6.3cm、現存最大幅2.7cm、厚さは先端部で0.1cm、中子で0.5cmである。

1号土壙～3号土壙出土遺物

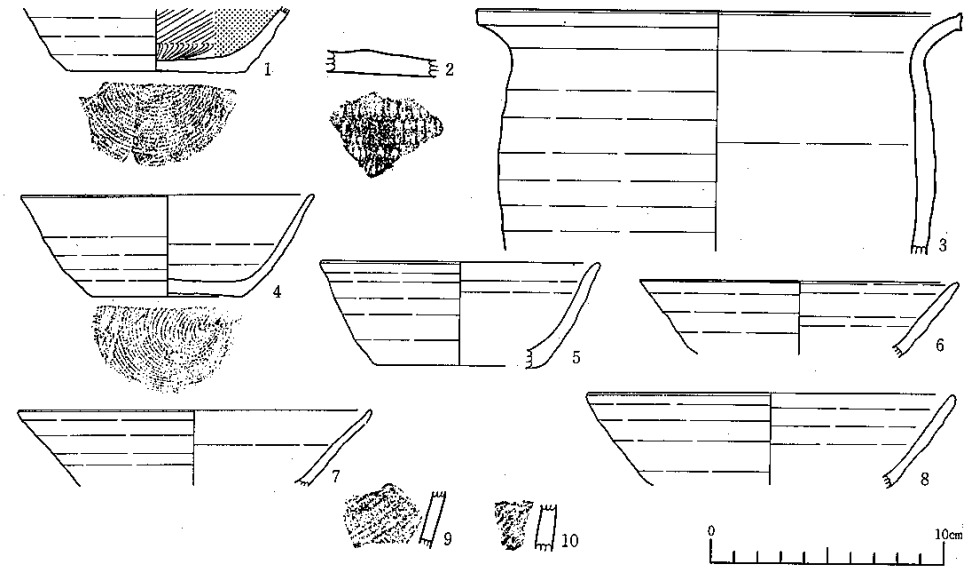
すでに述べたように、3基の土壙は土壙確認時に1基の土壙であると予想された。しかし、次第に堆積土を掘り進めていくうちに、3基の土壙が1ヶ所に、しかも互いに切り合っていることが分かった。したがって、ここで取り扱う遺物は3基の土壙であることを確認する以前に取り上げた遺物を対象としている。

出土遺物には土師器、須恵器、縄文土器、鉄器、石器などがある。

土師器

坏　(第13図1)　口縁部を欠く坏である。底部の切り離しが回転糸切り技法によるもので再調整は認められない。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理である。

甕　(第13図2・3)　2は底部破片である。底面に蓆状圧痕が認められるが、ロクロを使用しているかどうか不明である。3は、製作の際ロクロを使用している。口径に対して器高が大きく長胴形をなすもので、器形は、体部でふくらみをもちながら立ち上がり、口縁部が強く外反する。口縁端部は、僅かに上方に立つ。体部から口縁部にかけて内外面ともロクロ調整が認められる。



第13図　１号～３号土壙出土遺物

須恵器

坏　(第13図4～8)　4は、回転糸切り技法によって底部が切り離されているもので、再調整は加えられていない。器形は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。

縄文土器(第13図9・10)

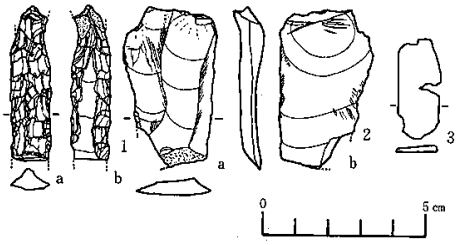
いずれも体部破片である。9は、単節斜行縄文ＬＲを横位に施文している。10は、無節斜行縄文Ｌを横位に施文している。内面の調整は、9はミガキ、10はナデである。

石器　(第14図1・2)

1は、上端、下半を欠損しているため、全体の形態が不明な剥片石器である。ａ面は全面に、b面は周縁に調整剥離を施し、横断面形が三角形を呈している。2は、一部欠損している縦長の剥片である。ａ面下端に自然面を残し、b面にポジティブバルブが認められる。

鉄器　(第14図3)

欠損しているため、全体の形態は不明で板状を呈している。



第14図　１号～３号土壙出土遺物

3. 表土出土遺物

表土出土遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器、青磁、縄文土器、石器、土錘、鉄器がある。

土師器

坏　（第15図1）　製作の際、ロクロを使用している。再調整が加えられているため底部の切り離し不明な坏である。器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。再調整として、体部下端および底部全面に回転ヘラケズリが施されている。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキ・黒色処理である。

なお、内面に籾の圧痕が認められる体部破片が1点出土している（図版5－11）。

須恵器

坏　（第15図2・3）　底部の切り離しが、回転ヘラ切り技法によるもの(2)、回転糸切り技法によるもの(3)がある。

前者は、器形は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部で内傾気味のものである。底部周縁に再調整として手持ちヘラケズリが加えられている。

後者は、器形は底部端部で僅かに外側に張り出し、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。再調整は加えられていない。

赤焼土器

坏　（第15図4～6）　器厚に差異が見い出され、厚手のもの(4)と薄手のもの(5・6)がある。器形は、4は体部でふくらみをもち、口縁部が外傾する。5は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。6は、底部のみのため全体の器形は不明である。

なお、6の体部下半に籾の圧痕が一箇所認められる。

青磁　（第15図7）

碗　底部を欠き、口縁部から体部にかけて一部を残す破片である。体部から口縁部にかけてゆるやかに丸味をもって立ち上がり、口縁端部は玉縁風にふくらむものである。胎土は灰白色で釉は青みがかっている。明代の製品と思われる。

縄文土器　（第15図8～16）

口縁部破片(8～10)、体部破片（11～16）のため全体の器形はいずれも不明である。

前老は、口縁部が外傾し、口縁部に一条の沈線を横走させるもの(8・9)、口縁部が無文帯のもの(10)がある。8は、沈線下に撚糸文Ｌを、9は、沈線下に単節斜行縄文ＬＲを、10は、単節斜行縄文ＬＲを横位に施文している。内面は、8・9がミガキで10はナデである。

後者は、沈線を施すもの(11・12)と縄文のみのもの(13～16)がある。11は、単節斜行縄文ＬＲを横位に施文したのち、二本の曲線状の沈線を描いている。沈線は調整されていない。12は、施文順序は不明であるが、縦位に3本の沈線を、縦位に単節斜行縄文ＬＲを施文している。沈

線は、調整されているかどうか不明である。13・14は単節斜行縄文ＬＲを、15は単節斜行縄文ＬＲを、16は無節斜行縄文Ｒを横位に施文している。内面は、11は不明、12～14・16はミガキ、15はナデである。

箆状石器　（第16図1）

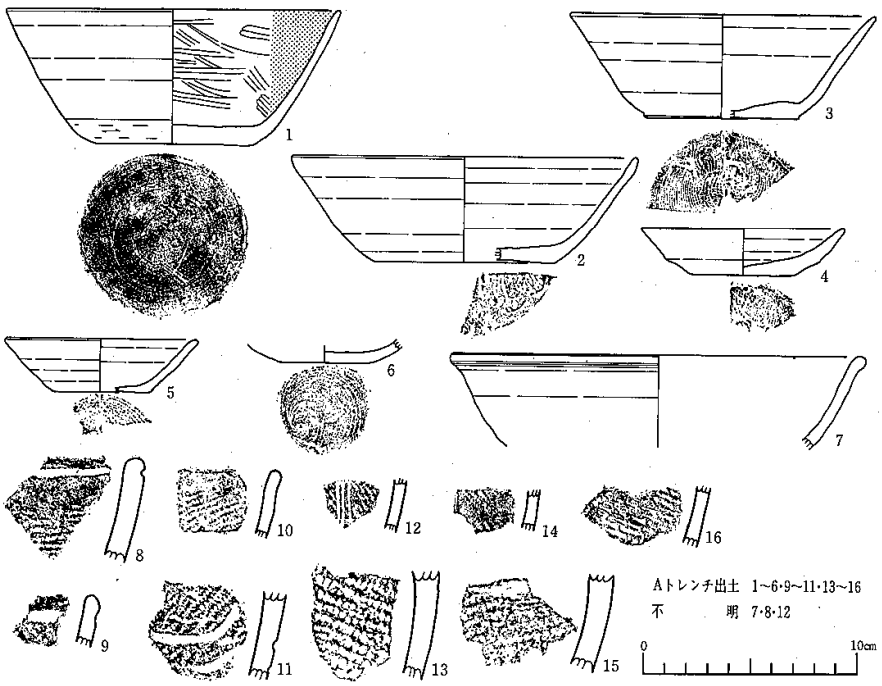
完形である。 a 両全面、b面周縁に調整剥離を加えている。横断面形は凸レンズ状を呈する。

土錘　（第16図2）

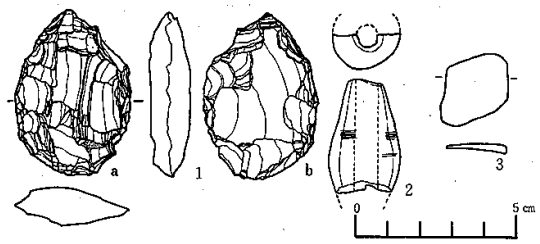
欠損している。紡錘形をした管状の土錘である。貫通孔は、半欠のため明確ではないが、断面楕円形もしくは円形と思われる。外面はナデ調整である。

鉄器　（第16図3）

板状をした破片である。種類は判明しない。



第15図　表 土 出 土 遺 物



第16図　表 土 出 土 遺 物

第1表 石器観察表

図版番号	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石材	出土地点
第3図8	218	152	64.5		石英安山岩質凝灰岩	住居跡堆積土
第7図	31.8	21.7	9.5	4.7	珪質頁岩	1号土壙堆積土
第14図1	46.8	12.2	6.8	3.6	珪質頁岩	1号～3号土壙堆積土
第14図2	48.9	28.4	8.6	8.4	珪質頁岩	1号～3号土壙堆積土
第16図1	51.5	35.8	11.7	21.8	珪化凝灰岩	Aトレンチ表土

第2表 図示遺物分類表

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	口径	底径	器高	図版番号	出土地点	種別	器形	分類	口径	底径	器高
第3図1	住床	土師器	坏	BⅡ(ia)	14.1	5.8	5.0	第8図8	2号土壙堆	土師器	坏	BⅢ(a)	13.4	6.4	4.1
2	住カマド脇	土師器	坏	BⅡ(ia)	14.0	6.2	4.9	9	堆	土師器	坏	BⅢ(a)	12.2	6.0	5.3
3	住カマド	土師器	坏	BⅢ(a)	14.6	6.6	5.0	10	堆	土師器	坏	BⅢ(a)		7.5	
4	住堆	土師器	坏	BⅡ(ia)		6.1		11	堆	土師器	坏		18.1		
5	住堆	土師器	坏	BⅢ(a)	13.9	6.0	5.0	12	堆	土師器	高台付坏	Ⅰ		9.7	
6	住堆	土師器	坏		6.9			13	堆	土師器	高台付坏	Ⅱ		8.2	
7	住ピットI9堆	赤焼土器	坏		9.2	4.2	2.1	14	堆	土師器	高台付坏	Ⅱ		6.2	
第5図1	1号土壙堆	土師器	坏	BⅠ(a)		6.4		15	堆	土師器	甕	B	22.4		
2	堆	土師器	坏	BⅡ(ia)		7.2		16	堆	土師器	甕	B			
3	堆	土師器	坏	BⅡ(ii)	12.6	6.4	3.9	17	堆	土師器	甕	B	27.2		
4	堆	土師器	坏	BⅡ(ii)	14.2	8.0	5.2	第9図1	堆	土師器	甕	B	25.6		
5	堆	土師器	坏	BⅢ(b)	13.4	6.4	4.0	2	堆	土師器	甕	B	20.0		
6	堆	土師器	坏	BⅢ(a)	12.3	5.6	3.7	3	堆	土師器	甕			9.6	
7	堆	土師器	甕	B	15.2			4	堆	土師器	甕				
8	堆	土師器	甕	B	21.4			5	堆	須恵器	坏	AⅠ(a)		6.6	
9	堆	土師器	甕	B	17.6			6	堆	須恵器	坏	AⅡ	12.8	6.2	4.6
10	堆	須恵器	坏	AⅠ(a)	14.0	7.8	3.8	7	堆	須恵器	坏	BⅡ	14.4	7.2	4.4
11	堆	須恵器	坏	AⅡ		7.3		8	堆	須恵器	坏	BⅡ	12.8	6.6	3.9
12	堆	須恵器	坏	AⅡ	12.6	7.0	3.7	9	堆	須恵器	坏	BⅡ	12.4	6.4	3.6
13	堆	須恵器	坏	BⅡ	13.4	7.2	3.5	10	堆	須恵器	坏	BⅡ	11.8	6.2	3.4
14	堆	須恵器	坏	BⅡ		7.2		11	堆	須恵器	坏	BⅡ	12.4	5.8	4.0
15	堆	須恵器	坏	BⅡ		7.2		12	堆	須恵器	坏	BⅡ		6.8	
16	堆	須恵器	坏	BⅡ		6.6		13	堆	須恵器	坏	BⅡ		6.4	
第6図1	堆	須恵器	坏	BⅡ		6.4		14	堆	須恵器	坏		13.4		
2	堆	須恵器	坏	CⅠ(b)	13.4	7.4	4.0	15	堆	須恵器	坏		12.8	4.8	2.1
3	堆	須恵器	坏	CⅠ(a)	12.2	7.2	4.8	第10図1	堆	赤焼土器	坏		10.8	4.6	2.7
4	堆	須恵器	坏		14.2			2	堆	赤焼土器	坏		9.5		
5	堆	須恵器	坏		14.5			3	堆	赤焼土器	坏		8.8		
6	堆	須恵器	壺			3.9		第11図1	3号土壙堆	土師器	坏	BⅡ(ia)	13.4	6.0	4.4
第8図1	2号土壙堆	土師器	坏	A	11.8	7.2	3.5	2	堆	土師器	坏	BⅡ(ii)	13.0	7.4	5.0
2	堆	土師器	坏	A	15.6	7.6	6.4	3	堆	土師器	坏	BⅢ(b)		6.0	
3	堆	土師器	坏	BⅠ(b)		6.4		4	堆	土師器	坏	BⅢ(b)	9.4	5.4	4.2
4	堆	土師器	坏	BⅡ(ia)	14.9	7.6	4.7	5	堆	土師器	甕	A	21.4		
5	堆	土師器	坏	BⅢ(b)	13.7	6.2	4.4	6	堆	土師器	甕	B	20.8		
6	堆	土師器	坏	BⅢ(b)	6.6			7	堆	土師器	甕	B	23.6		
7	堆	土師器	坏	BⅢ(b)		6.4		8	堆	須恵器	坏	AⅠ(a)		7.2	

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	口径	底径	器高	図版番号	出土地点	種別	器形	分類	口径	底径	器高
第11図9	3号土壙堆	須恵器	坏	BⅡ	14.0	7.8	3.8	第13図7	1号～3号土壙堆	須恵器	坏		15.2		
10	堆	須恵器	坏	BⅡ		7.2		8	堆	須恵器	坏		15.8		
11	堆	須恵器	坏	BⅡ	13.2	7.2	4.0	第15図1	Aトレンチ表土	土師器	坏	BⅢ(b)	15.6	7.2	6.3
12	堆	須恵器	坏		13.2			2	表土	須恵器	坏	AⅠ(a)	15.2	8.4	5.0
第13図1	1号～3号土壙堆	土師器	坏	BⅡ(ii)		7.8		3	表土	須恵器	坏	BⅡ	14.4	7.2	5.0
2	堆	土師器	甕					4	表土	赤焼土器	坏		9.6	4.8	2.2
3	堆	土師器	甕	A	20.8			5	表土	赤焼土器	坏		4.5	2.2	2.5
4	堆	須恵器	坏	BⅡ	12.6	6.4	4.4	6	表土	赤焼土器	坏			4.2	
5	堆	須恵器	坏	BⅡ	12.0	7.2	4.5	7	不明	青磁	碗		19.4		
6	堆	須恵器	坏		13.8										

Ⅳ．遺構と遺物について

発見された遺構には竪穴住居跡1軒、土壙3基があり、それらの遺構および遺構外(表土および堆積土)から、縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器、青磁、石器、土錘、鉄器が出土している。

1．出土土器について

竪穴住居跡および土壙から多数の土師器、須恵器が出土している。その他に、赤焼土器、青磁、縄文土器、石器、土錘、鉄鏃などが出土している。ここでは、出土数が多くしかも図示可能なものが多かった土師器、須恵器については分類を行ない、他の遺物については、その性格や所属時期を検討していきたい。

(縄文土器)

表土および2号土壙から出土している。出土数は少をく、しかも、口縁部、体部破片のみである。これらのうち、装飾文様をもつ土器の所属時期は、装飾文様、文様表出技法、縄文原体および施文方向、胎土に繊維を含んでいないこと等からおおまかに純文時代中期～後期に属すると思われる。

なお、縄文のみ施された土器は、いずれも小破片であり、これらの所属時期は確定できない。

(土師器)

坏、高台付坏、甕が出土している。

坏　製作に際し、ロクロを使用しているものと、使用していないものがある。後者は、底部の切り離し技法により3類に分類される。

A類　ロクロを使用しないもの。

ＢⅠ類　ロクロを使用しており、底部の切り離しが回転ヘラ切り技法によるもの。

ＢⅡ類　ロクロを使用しており、底部め早り離しが回転糸切り技法によるもの。

ＥⅢ類　ロクロを使用しており、底部に再調整が加えられて切り離し技法の不明なもの。

〈坏Ａ類〉　製作に際し、ロクロを使用しないもので、2例認められる。器形は、体部から口縁部にかけて丸味を帯びながら外傾するもの、体部下半にふくらみをもち、体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、口縁端部が外傾するものがある。底部は平底である。外面は、体部下端から体部上半あるいは体部下端にのみヘラケズリが、口縁部あるいは口縁部から体部にかけてヘラミガキが施されている。内面は、ヘラミガキ・黒色処理が施されている。

〈坏ＢⅠ類〉　製作に際し、ロクロを使用しているものである。底部の切り離し技法が回転ヘラ切りによるもので2例認められ、再調整が加えられている。口縁部が欠損しているので、全体の器形は不明である。再調整として、手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリが施されているものがある。前者は、体部下端から底部周縁に、後者は、底部全面に施されている。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。

〈坏ＢⅡ類〉　製作に際し、ロクロを使用しているものである。底部の切り離し技法が回転糸切りによるもので、9例認められる。再調整の加えられているもの（ⅰ）、再調整の加えられていないもの（ⅱ）とに分けられる。

ＢⅡ（ⅰ）類　体部下端および体部下端から底部周縁・底部全面にかけて手持ちヘラケズリが加えられ、前者が多い。体部から口縁部にかけてやや丸味を帯び、口縁端部がやや外反する器形である。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、底部から体部下端にかけて放射状で、体部から口縁部にかけて横方向である。

ＢⅡ（ⅱ）類　再調整の加えられないものである。体部から口縁部にかけて、直線的に外傾する器形で、口縁端部がやや外反するものもある。外面はロクロ調整、内面はヘラミガキされ、黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、底部が放射状で、体部から口縁部にかけて横方向のものが多い。

〈坏ＢⅢ類〉　製作の際、ロクロを使用しているものである。再調整が加えられているため、底部の切り離し技法の不明なもので、12例認められる。再調整として、手持ちヘラケズリと回転ヘラケズリが施されているものがある。

前者は、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものが多いが、口縁端部でやや外反する器形もある。再調整として、体部下端から底部全面にかけて手持ちヘラケズリを加えているものが多い。内面は、ヘラミガキ・黒色処理である。

後者は、体部から口縁部にかけてやや丸味を帯びて外傾し、口縁端部でやや外反するものが多いが、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものもある。再調整として体部下端および

底部全面に回転ヘラケズリが加えられている。外面はロクロ調整のものが多いが、体部から口縁部にかけてヘラミガキされ、黒色処理が施されているものもある。内面は、ヘラミガキされ、黒色処理が施されている。

第3表　土師器坏分類表

	分類基準			
A ロクロ不使用				
B ロクロ使用	底部の切り離し技法	再調整の有無	再調整の種類	再調整のある部位
	Ⅰ．回転ヘラ切り	再調整あり	(a)手持ちヘラケズリ (b)回転ヘラケズリ	・体部下端～底部周縁
	Ⅱ．回転糸切り	(i)再調整あり (ii)再調整なし	(a)手持ちヘラケズリ	・体部下端 ・体部下端～底部周縁 ・体部下端～底部全面
	Ⅲ．不　明	再調整あり	(a)手持ちヘラケズリ (b)回転ヘラケズリ	・体部下端～底部全面 ・底部全面 ・体部下端～底部全面

高台付坏　3例出土している。製作に際し、ロクロを使用しているものである。口縁部が欠損しているため、全体の器形は不明である。坏部内外面の器面調整の違いから、坏部内外面ともヘラミガキされ、黒色処理が施されているものと、坏部外面はロクロ調整で、内面がヘラミガキされ、黒色処理が施されるものがある。いずれも、底部の切り離しは、回転糸切り技法によるものである。

なお、以上の中に、坏部の内面にヘラミガキの前段階として、ヘラナデを施しているものもある。

甕　製作に際し、ロクロを使用していないもの（A類）と使用しているもの（B類）とがある。

〈甕A類〉　ロクロを使用していないもので、2例認められる。両者とも、体部（体部下半）から底部まで欠損している。器形は、体部にふくらみをもち、口縁部は外傾するものと外反するものがある。前者は、口縁部内外面とも横ナデ、体部内外面とも刷毛目が、後者は、口縁部内外面とも横ナデ、体部外面にヘラケズリ、体部内面にナデが施されている。

〈甕B類〉　ロクロを使用しているもので、10例認められる。体部下半から底部を欠損しているものが多い。器形は、長胴形で体部にややふくらみをもつ。口縁部は、外傾あるいは外反しており、口縁端部が上方を向いて角ばっているもの、丸くおさまるものなどがある。外面は、体部上半から口縁部までロクロ調整、体部はロクロ調整後、縦方向のヘラケズリが施され、内面は、体部上半から口縁部までロクロ調整が施されるもの、体部に刷毛目を施すもの、体部下端から体部上半までヘラナデを施すものなどがある。また、ロクロ回転を利用して刷毛目を施すものもある。

（須恵器）

坏、壺がある。ここでは、坏が大半を占めるので坏についてのみ分類してみる。

坏　器形は、いずれも体部から口縁部へかけて直線的あるいはやや丸味を帯びて外傾するもので、底部の切り離し技法、再調整の有無等により次のように分類することができる。

〈坏A類〉回転ヘラ切り技法によって切り離されたもので、6例認められる。底部の切り離し後、再調整の加えられているものをＡⅠ類、再調整のみられないものをＡⅡ類とする。ＡⅠ類が多い。ＡⅡ類は、再調整として底部周縁に手持ちヘラケズリが加えられている。

〈坏B類〉　回転糸切り技法によって切り離されたもので、17例認められる。再調整の加えられているもの（ＢⅠ類）と再調整のみられないもの（ＢⅡ類）があり、ＢⅡ類が大半を占める。

ＢⅠ類は、体部下端に手持ちヘラケズリが加えられている。

〈坏C類〉再調整が加えられているため、切り離し技法の不明なもので、2例認められる。再調整として底部全面に回転ヘラケズリされるものと、手持ちヘラケズリされるものとがある。

第4表　須恵器坏分類表

分類基準			
底部切り離し技法	底部切り離し後の再調整の有無	再調整の種類	再調整のある部位
A．回転ヘラ切り	Ⅰ．再調整あり Ⅱ．再調整なし	(a)手持ちヘラケズリ	底部周縁
B．回転糸切り	Ⅰ．再調整あり Ⅱ．再調整なし	(a)手持ちヘラケズリ	体部下端
C．不明	Ⅰ．再調整あり	(a)手持ちヘラケズリ (b)回転ヘラケズリ	底部全面 底部全面

壺　1例出土している。体部上半から口縁部にかけて欠損しているため全体の器形は不明である。底部の切り離しが回転糸切り技法によるもので、再調整として、体部下半に回転ヘラケズリが施されている。

（赤焼土器）

坏のみ出土している。

坏　体部にややふくらみをもち、口縁端部が外反するもの、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するものなどがある。いずれも、低平な器形である。

第5表　図示土器集計表

土師器										須恵器						赤焼土器
遺構・地区	坏					高台付坏		甕		坏					壺	坏
	A	BⅠ	BⅡ(i)	BⅡ(ii)	BⅢ	Ⅰ	Ⅱ	A	B	AⅠ	AⅡ	BⅠ	BⅡ	CⅠ		
住居			1(2)		2(1)											1
1号土壙		1	1	2	2				3	1	1		5	2	1	
2号土壙	1	1	1		8	1	2		4	1	1		7			3
3号土壙			1					2	1	1		1	2	1		
1号～3号土壙			1						1				1			1
Aトレンチ										1			1			1

（ ）内は遺構に伴うものである。

（出土土器の年代）

出土土器のうち縄文土器についてはすでに述べた。そこで、ここでは土師器・須恵器・赤焼土器について検討する。これらの分類された土器について、共伴関係をみると、第5表のようになる。第5表から分かるように、共伴関係が明らかなものは土師器坏の一部に限られる。そこで、製作技法における共通点や他遺跡での類例拾よびこれまでの研究成果を踏まえながら、出土土器の年代について検討していきたい。

土師器坏は、製作技法の違いから二つに大別できた。すなわち、ロクロを使用していないもの（A類）とロクロを使用しているもの（B類）に分けられる。前者は、①器形は、体部から口縁部にかけて丸味を帯びながら外傾する。②平底、③口縁部外面はヘラミガキ、体部外面から底部全面にかけて手持ちヘラケズリが施されている。④内黒などの特徴をもつ。このような特徴をもつ土器は、糠塚遺跡（小井川、手塚：1978）に類例があり、国分寺下層式に比定されている。後者は、一製作に際し、ロクロを使用していることから、表杉ノ入式（氏家：1957）に比定され、底部の切り離し技法が回転ヘラ切りによるもの（ＢⅠ類）、回転糸切りによるもの（ＢⅠ類）、再調整が加えられているため不明なもの（ＢⅢ類）がある。

なお、表杉ノ入式に比定される土器については、これまでの研究成果（桑原：1969、小笠原：1976、早坂・阿部：1980）から、再調整を加えていないものより再調整を加えているものの方が、先行すとされている。このことから、ＢⅠ類、ＢⅡ（ⅱ）類、ＢⅢ類は、ＢⅡ（ⅱ）類より古い要素をもつと考えられる。

高台付坏は、2類に分類できたが、いずれも、製作に際し、ロクロを使用している。このことから、表杉ノ入式に比定できる。

土師器甕は、製作に際し、ロクロを使用しないもの（A類）と使用しているもの（B類）に分けられB類については、製作技法の特徴から明らかに表杉ノ入式に比定できる。

なお、表杉ノ入式期の甕には、ロクロを使用しているものと使用していないものとが出土する類例が多いことから、A類は、国分寺下層式、表杉ノ入式のいずれにも伴う可能性がある。

須恵器坏は、底部の切り離し技法の違いから、回転ヘラ切りによるもの（A類）、回転糸切りによるもの（B類）、再調整が加えられているため不明なもの（C類）の3類に分類できた。これらは、県内各地に類例があるが、各遺跡によって、土師器との共伴関係が異なり、明確な時期決定は難しい。そこで、本遺跡で土師器と共伴関係が明らかでないこと、出土土師器が国分寺下層式から表杉ノ入式であること、さらに、これまでの研究成果（岡田：桑原：1974）を踏まえると、須恵器坏は、国分寺下層式、表杉ノ入式のいずれかに伴うものと考えられる。須恵器壺は、1例あり、底部の切り離しが回転糸切り技法によるもので、再調整として体部下端に回転ヘラケズリが施されている。土師器との共伴関係が明らかでなく、しかも類例が少

ないことから、所属時期は不明である。

赤焼土器は、いずれも、小形の坏で6例認められる。このような小形の坏は、植田前遺跡(加藤：1972)に類例があり、所属時期は平安時代後半以降と考えられている。

なお、土師器の大半が表杉ノ入式に含まれているが、土師器と赤焼土器との関係は分からない。

2. その他の遺物について

石器

住居跡堆積土、1号～3号土壙、Ａトレンチの表土から出土している。縄文土器が出土していることから、おおまかに縄文時代に属すものと考えられる。

土錘

Ａトレンチの表土から土錘1例出土している。所属時期は、不明である。

鉄器

3号土壙から鉄鏃1例、2号土壙から鉄器1例、いずれの土壙に伴出したものなのか明らかではないが、土壙内から鉄器1例、Ａトレンチから鉄器1例出土している。共伴関係が明らかでないため、所属時期は不明である。

3. 墨書文字について

東北歴史資料館企画科長　平 川　南

墨書文字の記されたものは、土師器坏で住居跡にともなうものおよび住居跡堆積土から各2例、2号土壙から2例、須恵器坏で1号土壙および2号土壙から各1例の計8例出土している。

これらのうち、判読できるものは、「二万」「曹司」「曹?」の3例である。

ここでは、県内では出土例のみられない「曹司」「曹?」について検討する。

「曹司」について

「曹司」は、『色葉字類抄』（平安末成立）によれば、「サウシ」と読む。多義に用いられ、また時期的にもその用語の意味するところに変化があるようである。

古代の曹司について、まず、8～10世紀ぐらいの比較的古い用例からみてみよう。

『続日本紀』天平2年（730）6月庚辰条　神祇官曹司災。

『続日本紀』天平勝宝8歳(756)11月丁条　廃二新嘗会一。以 諒闇故也。検 神祇官記一。是年於二神祇官曹司一行二新嘗会之事一矣。

『三代実録』貞観7年(865)8月17日条　屈二六十僧於太政官曹司庁一。限以二三日一転二読大般若経一。

『本朝世紀』天慶元年（938）8月30日条　去元慶（879）八月八日木工頭藤原維邦於二寮曹司、頓

滅。

『日本紀略』天暦2年(948)12月10日条　今夜群盗入_左少弁好古曹司_。掠_取襍物_。

これらは、神祇官・太政官・木工寮・弁官など諸官庁内に設けられた執務のための正庁または執務のための部屋という意味で用いられている。また、「藤原の利基の朝臣の、右近中将にてすみ侍りけるざうしの、身まかりて後、人もすまずなりにけるに」（『古今和歌集』853）など、上級官吏や女官などの部屋の意味に使われることもある。さらに下っては、大学寮の教室も東曹・西曹と呼ばれた。

いずれにしても、曹司が本来は宮中または官庁の正庁または部屋を意味したもので、官庁の場合も、文献上の用例は中央官庁に限られているようである。

こうした曹司の用法が中央ばかりでなく、地方の官衛および寺社などにまで広がっていった可能性は十分に推測されるが、しかし、奈良時代はともかく、平安時代の数多くの文献にも、管見の限りではあまり見受けられない。

そこで、あえてあげるならば、例えば厳島神社文書中の大治2年(1127)の安芸国高田郡司解（『平安遺文』巻5、1810ページ所収）の中に風早郷内として「小曹司村」とある。これなどは地名ということで間接的史料ではあるが、曹司が地方においても用いられていたことを窺わせる史料といえるであろう。その点では、今回の墨書土器「曹司」は地方における曹司という呼称の使用を確実に示す資料とみなすことができるであろう。

「曹司」「曹?」の2点は同筆とはみえないが、両者とも筆跡はかなり勁抜で筆勢もたくましい。

熟達した筆法と曹司の内容とを併わせ考えるならば、これらの筆者は何らかの形で、地方の官衙または寺社等にかかわりをもった人物であろうと思われる。

4. 住居跡の年代について

本遺跡で発見された住居跡は一軒である。住居跡に伴う土師器坏から、表杉ノ入式期に属すると考えられる。

5. 土壙の性格と年代について

本遺跡で発見された土壙は3基である。これらは、不整楕円形あるいはほぼ円形を呈し、底面が平坦であること、互に切り合って検出され、切り合い関係から2号土壙が1号・3号土壙よりも古いことは、すでに述べた通りである。

はじめに、土壙内堆積土、出土遺物の状況から、土壙の性格を検討してみると、各土壙の第1層および第2層で木炭、灰、焼土が混じったブロックあるいは焼土ブロックが多くみられ

ること、2号・3号土壙の第1層および第2層で多量の河原石が認められること、出土遺物は多いが完形のものはなく、破片が大半を占め、しかも、不規則に入っていることなどが分かり、これらの特徴から、土壙は塵捨穴と考えられる。

次に、土壙の年代について考えてみると、出土遺物の中に赤焼土器が含まれていることから平安時代後半以降と考えられる。

なお、切り合い関係から2号土壙が他の土壙より古いことがわかっている。したがって、１号土壙や3号土壙の年代は、2号土壙と同じかそれ以降と考えられる。

V. ま と め

1. 明神脇遺跡は、奥羽山地から派生し東方に張り出す高館丘陵の前方、すなわち、白石川によって形成された白石低地の河岸段丘上に立地する。
2. 遺構として竪穴住居跡1軒、土壙3基が発見され、出土遺物から平安時代に属するものと考えられる。土壙は、堆積土の状況、出土土器の状況から塵捨穴のような施設と考えられる。
3. 出土遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器などがある。これらは、国分寺下層式（奈良時代）、表杉ノ入式(平安時代)に属するものである。
4. 竪穴住居跡内およびその堆積土から墨書土器が出土している。墨書文字の中でも、「曹司[?]」の筆者は、地方の官衙または寺社等に関連する人物であると考えられる。この事を踏まえて、本遺跡周辺の寺社および官衙に関する遺跡を調べてみると奈良時代末には存在していたと推定される刈田嶺神社(亘理：1979)、瓦を出土する堂田廃寺跡、前山遺跡、岩ノ上遺跡、兀山遺跡、鹿島山遺跡（白石市史編纂委：1976）がある。これらの中でも、「曹司」「[?]」の筆者は、本遺跡から北東へ約1.7㎞の近距離にある刈田嶺神社か刈田郡衙の所在が推測(亘理：1979)される白石市郡山地区の鹿島山遺跡などにかかわる人物の可能性がある。

〈引用・参考文献〉

氏家和典：1957「土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯　東北史学会

1967「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって」山形県の考古と歴史　柏倉亮吉教授還暦記念論文集刊行会

岡田茂弘・桑原滋郎：1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」城県多賀城調査研究所　研究紀要Ⅰ

小笠原好彦：1976「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」東北考古学の諸問題

加藤道男：1972「一植田前遺跡－東北自動車道関係遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第25集

桑原滋郎：1969「ロクロ土師器坏について」史第39輯　東北史学会

小井川和夫・手塚均：1978「糠塚遺跡」城県文化財調査報告書第53集

小井川和夫・高橋守克：1977「宮城県対馬遺跡出土の土器」宮城史学5号　宮城教育大学歴史研究会

白鳥良一：1972「明神脇遺跡－東北自動車道関係遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書第25集

白石市史編纂委員会：1976　白石市史　別巻　考古資料編

亘理梧郎：1979　白石市史Ⅰ　通史編

第6表　土器破片集計表（図示遺物は除く）

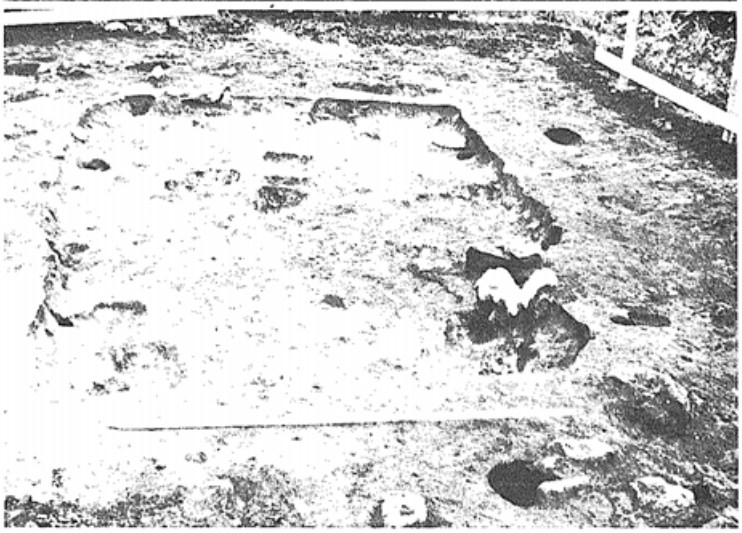
種別	器形	部位	器面調整 外面 ― 内面	住居跡 堆積土	住居跡 P8	住居跡 P20	住居跡 P29	1号土壙 2層	1号土壙 3層	1号土壙 不明	2号土壙 2層	2号土壙 不明	3号土壙 2層	3号土壙 不明	1～3号土壙 2層	1～3号土壙 3層	1～3号土壙 不明	Aトレンチ 1層	A～11 E～17 1層	不明	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ ―ミガキ(黒)								2				1			1			4
			ロクロ(黒) ―ミガキ(黒)																1		1
			ロクロ ―ミガキ(黒)	6				1			31	5			25		2	70	17	18	175
		体部	ミガキ ―ミガキ(黒)									1						1			2
			手持ちヘラケズリ―ミガキ(黒)												7			4	3	2	16
			ロクロ ―ミガキ(黒)	12			1			3	20	3			19	1	1	69	20	52	201
			不明 ―ミガキ(黒)															1			1
		底部	回転糸切	2	1					1	1	2			8		1	10	2	3	31
			手持ちヘラケズリ						1		3	1			3			9	5		22
			回転ヘラケズリ									1			3		1	3			8
			不明		1						3							6	1	4	15
	高台付坏	底部	回転糸切	1														2	1		4
			不明									1						2			3
	甕	口縁部	ロクロ ―刷毛目											2				13			15
			ロクロ ―ロクロ	2					1	14	12	18			16			18		3	84
			不明 ―ナデ						1	3		6			1		1	1			13
			不明 ―不明									1									1
		体部	刷毛目 ―刷毛目							17	7	27		2	12		1	41	1	7	115
			―ナデ	1						7	1	9		1	7	1		13		3	43
			―不明							2	2	2								1	7
			手持ちヘラケズリ―刷毛目	1						14	3	11			17			19		3	68
			―ミガキ(黒)															1			1
			―ナデ	7						19	13	43	1	8	78	2		160	9	25	365
			―ヘラナデ							5	1	5			2			2			15
			―ロクロ	1						1	5	9			2	1		2	1		22
			―不明							6	2	4			3			7			22
			ロクロ ―刷毛目							2	3	1			11			10		1	28
			―ナデ	1						2	7	8	1	2	19	1		26	1		68
			―ロクロ	5	1					21	11	17		1	60	1		58	1	4	178
			―不明									2									2
			不明 ―刷毛目							4	1	2			5			1		1	14
			―ナデ							7	1	3			46	5		98	5	22	187
			―ヘラナデ							1											1
			―ロクロ							1		2				3					6
			―不明	1						37	8	13			14			35	2	10	120
		底部	回転糸切							3		1			2			2			8
			手持ちヘラケズリ	1						2		3		2	9			6		1	24
			刷毛目							2		1			1			1			5
			ミガキ	1								1									2
			不明							1	3	4		1	5			6			20
須恵器	坏	口縁部	ロクロ ―ロクロ	6				2		8	6	21		2	23			53	8	17	146
		体部	ロクロ ―ロクロ	4	1					2	3	15		1	20			30	5	8	89
		底部	回転糸切			1		1		6	2	6		1	6			4	2	2	31
			手持ちヘラケズリ								1	3			2			13			19
			回転ヘラケズリ							1		2							2		5
			不明												1			4			5
	高台付坏	底部																		2	2
	甕	口縁部	ロクロ ―ロクロ	1						1								4	1	4	11
		体部	平行タタキ目―アテ目(青海波)									1			1			1			3
			―ナデ								1				2						3
			―不明												1			3			4
			手持ちヘラケズリ―ナデ	1						1							2	2			6
			―ロクロ												1						1
			ロクロ ―ロクロ	6								4	1		2			14	3	3	33
			―不明															2			2
			不明 ―不明									1									1
		底部	不明	1						1											2
	壺	口縁部	ロクロ ―ロクロ												1						1
		頸部	ロクロ ―ロクロ									1									1
赤焼土器		底部	不明												1			1		1	3
	坏	口縁部								2		9		2	4			8	8		33
		体部										2						3			5
		底部										2						1	1		4
総計				61	3	1	1	4	3	197	153	274	3	25	441	15	7	843	101	197	2329

種別	部位	区・層位 / 器面調整	住居 P18	2号土壙 2層	2号土壙 不明	Aトレンチ	A～11 E～17	不明	総計
縄文土器	体部	単節斜行縄文LR		3		1		2	6
		RL	1		2			2	5
		沈線＋単斜縄LR				1			1
		＋ RL					1	1	2
		＋縄文不明				1			1
		撚糸文R						1	1
総計			1	3	2	3	1	6	16

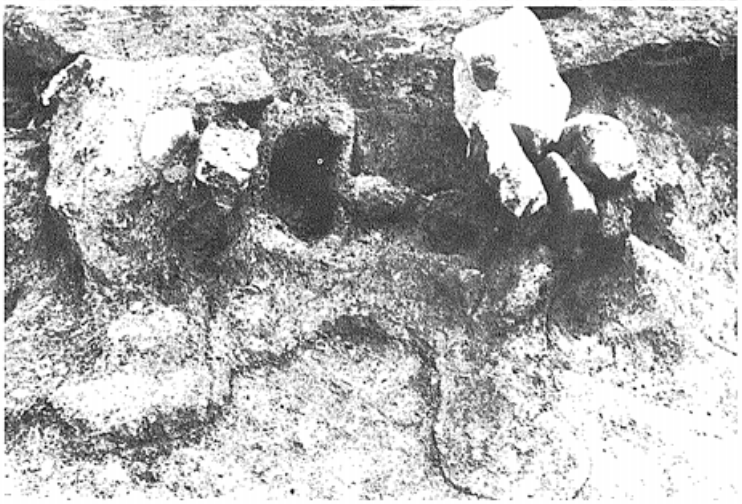
写　真　図　版

1．遺跡全景（南より）

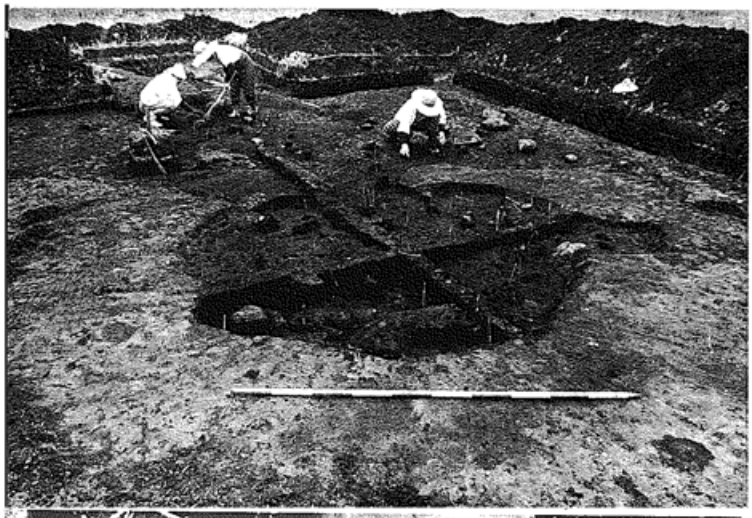
2．竪穴住居跡



3．カマド付近



図版１　遺跡全景、竪穴住居跡

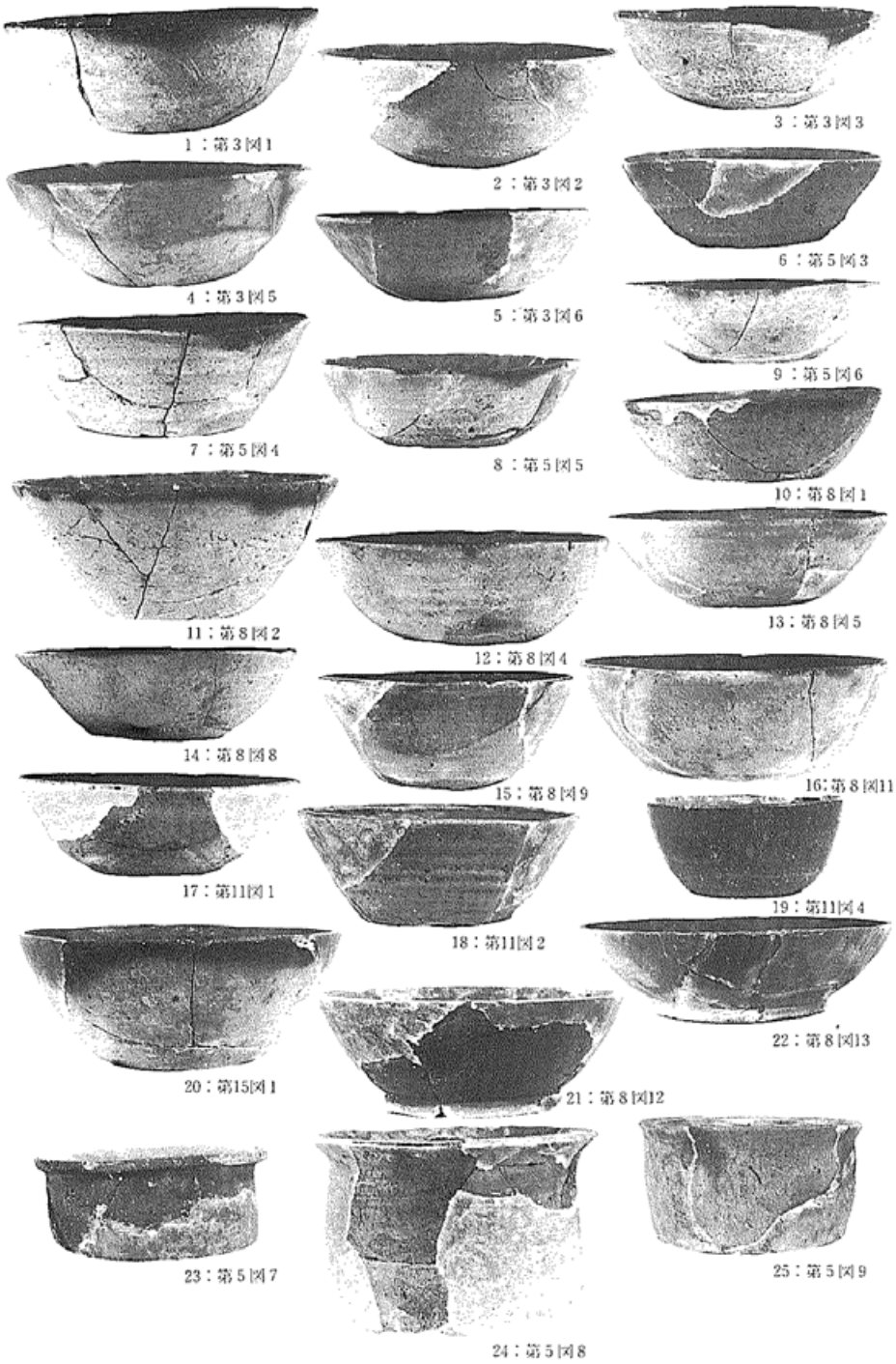


1．土壙検出状況

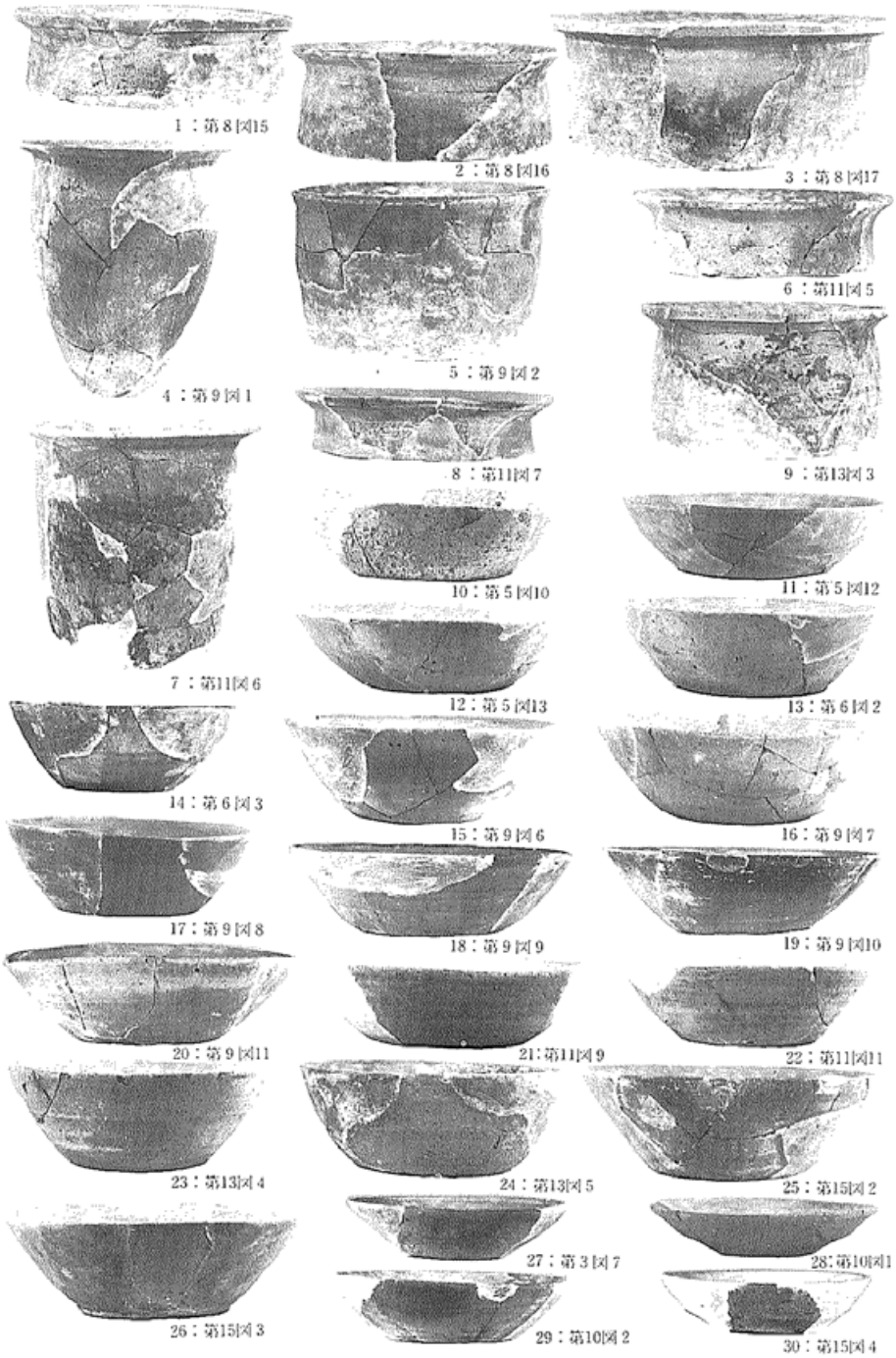
2．土壙内遺物、礫出土状況

3．土壙完掘状況

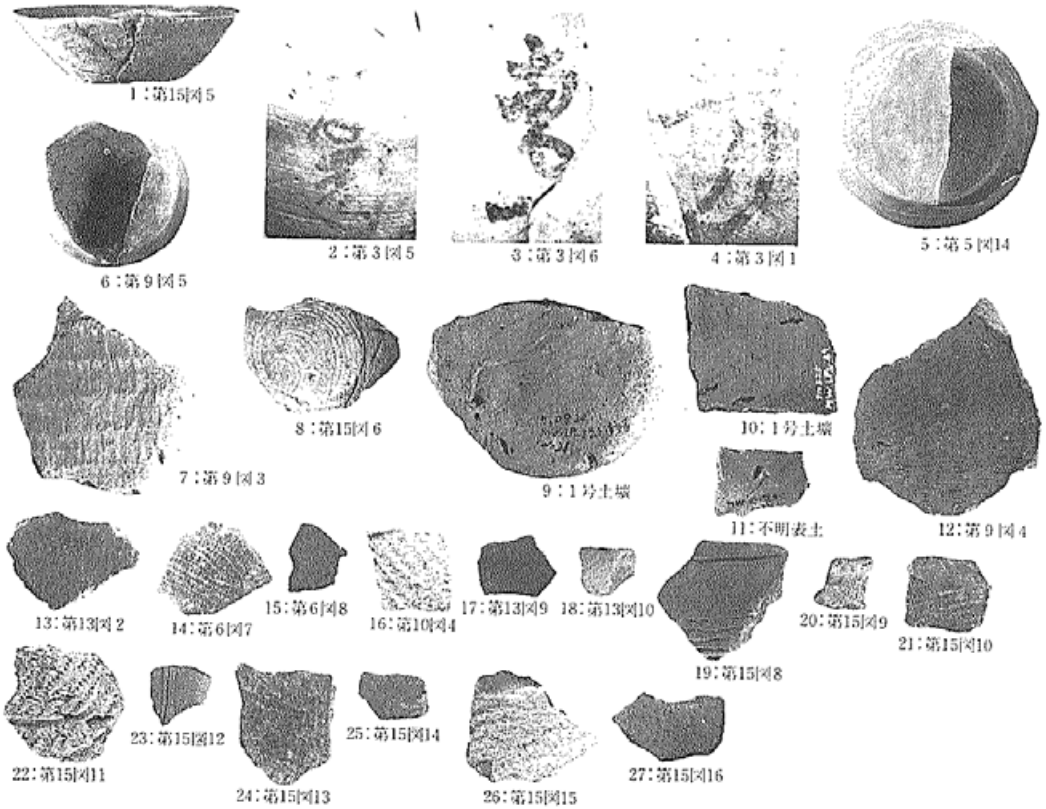
図版2　土　　壙


1：第3図1
2：第3図2
3：第3図3
4：第3図5
5：第3図6
6：第5図3
7：第5図4
8：第5図5
9：第5図6
10：第8図1
11：第8図2
12：第8図4
13：第8図5
14：第8図8
15：第8図9
16：第8図11
17：第11図1
18：第11図2
19：第11図4
20：第15図1
21：第8図12
22：第8図13
23：第5図7
24：第5図8
25：第5図9

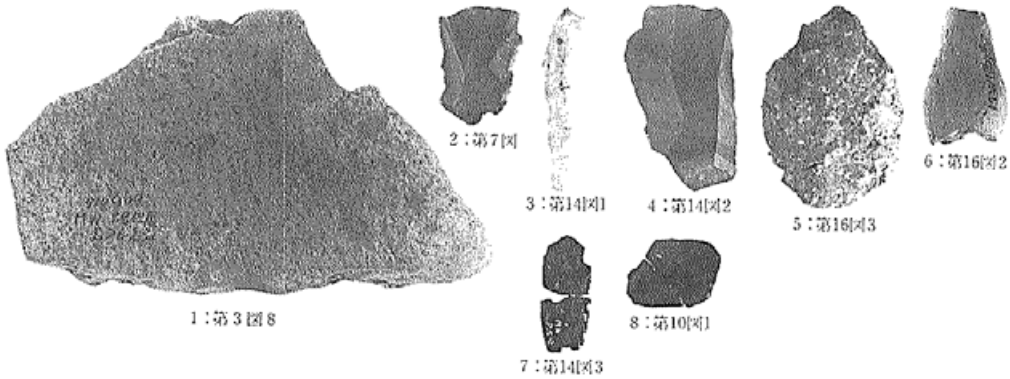
図版3　土　師　器



図版4　土師器、須恵器、赤焼土器



図版５　須恵器、土師器、赤焼土器、縄文土器



図版６　石器、土錘、鉄製品

⑸ 欠（かけ）　遺　跡

⑹ 持長地（もっちょうじ）遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と歴史的環境 228

Ⅱ．調査の方法と経過 230

1．欠 遺 跡 230
2．持長地遺跡 230

Ⅲ．報告にあたって 233

Ⅳ．欠　遺　跡 234

1．基本層序 234
2．発見された遺構と出土遺物 234
(1) 溝およびピットとその出土遺物 234
(2) 表土および堆積層出土の遺物 235
3．考　察 240
(1) 出土遺物の年代 240
(2) 遺構の年代 241

Ⅴ．持 長 地 遺 跡 242

1．基本層序 242
2．発見された遺構と出土遺物 242
(1) 掘立柱建物跡とその出土遺物 242
(2) 組み合わないピット群とその出土遺物 248
(3) 土 壙 250
(4) および堆積層出土の遺物 251
3．考　察 267
(1) 遺構の年代 267
(2) 遺跡の性格 267

Ⅳ．ま　と　め 271

(附)持長地遺跡出土の人骨について 274

調 査 要 項

欠 遺 跡

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵王町宮字欠
遺 跡 記 号：ＫＫ宮城県遺跡地名表登載番号：05029)
調 査 期 間：昭和45年4月20日～4月25日
調 査 面 積：約540m^2
発 掘 面 積：約117m^2
調　査　員：宮城県教育庁社会教育課
　　志間泰治・藤沼邦彦・白鳥良一
調査参加者：東北大学考古学研究室　　岩本圭輔・加藤道男

持 長 地 遺 跡

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵主町宮字持長地
遺 跡 記 号：ＭＴ(宮城県遺跡地名表登載番号：05028)
調 査 期 間：昭和45年3月 2日～3月11日(第1次)
　　昭和45年4月25日～5月17日(第2次)

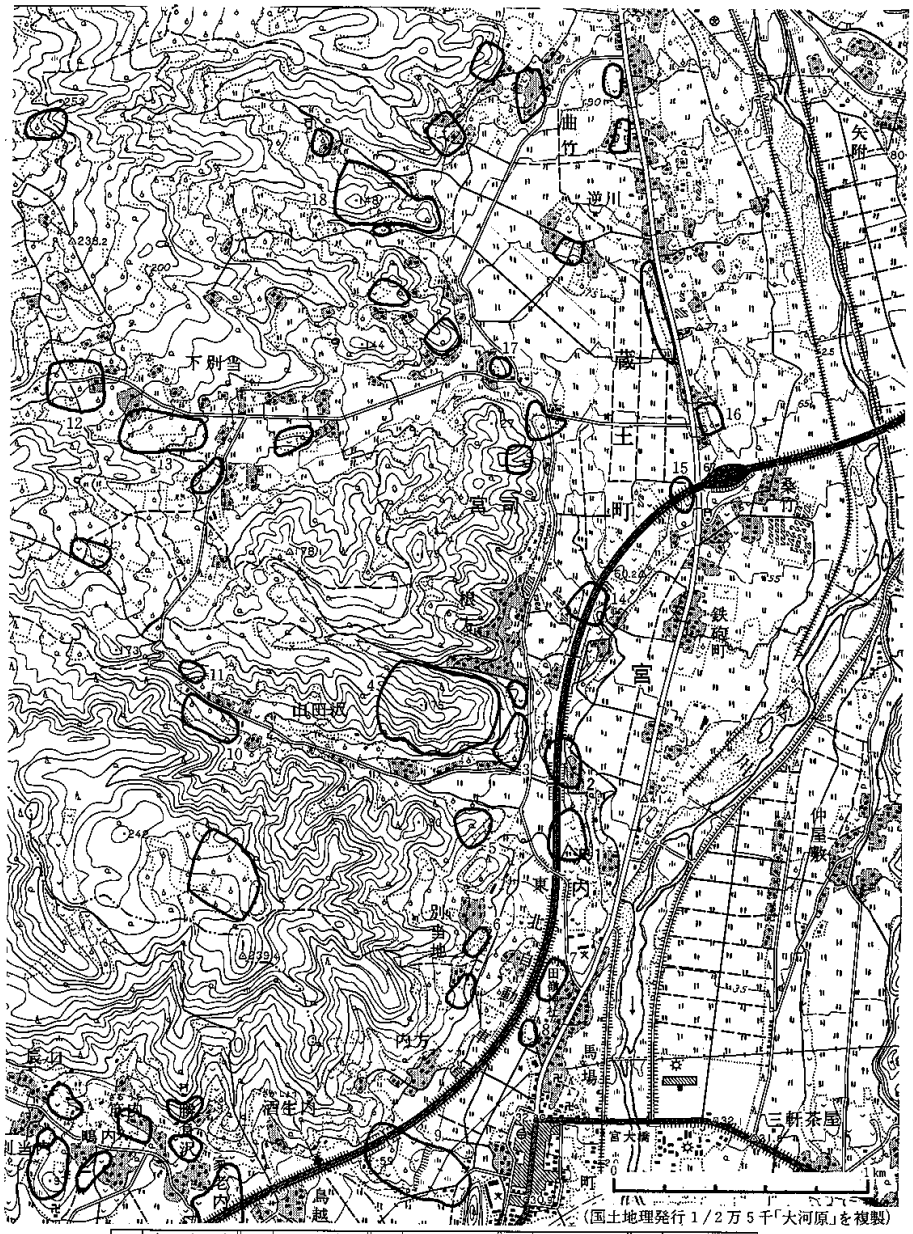
調 査 面 積：約2,500m^2
発 掘 面 積：約　901m^2
調　査　員：宮城県塩釜女子高校教諭　後藤勝彦
　　丸森町立館矢間小学校教諭　斎藤良治
　　宮城県教育庁社会教育課　志間泰治・藤沼邦彦・白鳥良一
調査協力者：東北大学講師　坂田泉
調査参加者：宮城教育大学考古学研究会　　鈴木惣之助･小井川和夫･高橋守克･遊佐五郎･
　　土岐山武･千葉宗久･佐藤好一･太田昭夫･七戸貞子･結城紀子･佐藤真理子･
　　跡辺節子･板橋とし子･後藤福子･福永喜美子･石塚恒子･宇田川鈴枝
　　東北学院大学　堀野宗俊
　　立正大学　阿部恵

Ⅰ．遺跡の位置と歴史的環境

欠遺跡は宮城県刈田郡蔵王町宮字欠に所在する。また、持長地遺跡は欠遺跡の200m北側に所在する。

蔵王町は蔵王山の東麓にあり、その大部分は奥羽山地とそこから派生した高館丘陵とによって占められ、沖積地は白石川の支流である松川流域（宮地区）と藪川流域（円田地区）とに限られる。高館丘陵は町の中央を貫流する松川によって大きく南北に二分され、南側の丘陵地帯は蔵王山麓に聳える青麻山（標高800m）から延びる長い裾野が次第に高さを減じながら宮地区の背後にまで迫っている。両遺跡は青麻山から延びる丘陵と松川によって形成された河岸段丘とが接する地点の段丘基部に立地する。欠遺跡は西に面した斜面にあり、標高は52～55mである。持長地遺跡は段丘平担地にあり、標高は約57mである。持長地遺跡と沖積面との比高は約20mである。両遺跡の地目は畑地および果樹園であった。

両遺跡の周辺には多くの遺跡が確認されている（白石市：1976、宮城県教委：1976a）。最古の旧石器時代の遺物としては彫刻刀形石器が鉄砲町の付近で採集されている。次の縄文時代になると遺跡数は激増し、著名な遺跡だけでも明神裏遺跡（早期）、上原田遺跡（早期）、八幡平遺跡（前・中期）、二屋敷遺跡（中・後期）、下別当遺跡（後・晩期）、山田沢遺跡（後・晩期）など宮地区の段丘や丘陵地に数多く確認されている。弥生時代の遺跡としては沢北遺跡、明神裏遺跡、下別当遺跡などがある。古墳時代の遺跡としては箱式石棺が確認された明神裏遺跡が有名である。奈良・平安時代では代表的な遺跡として二屋敷遺跡、小山田遺跡、下原田遺跡、馬場北遺跡、荒子遺跡、御安寺遺跡などがあげられる。また、宮地区にある刈田嶺神社は刈田郡唯一の式内社であり、現在でも信仰をあつめている。中世になると、宮城跡、山家館跡、竹小屋館跡などの城館跡や中世寺院跡である願行寺遺跡などがあり、丘頂の頂部や斜面に立地している。特に、山家館跡は持長地遺跡の西約600mの丘陵突端頂部にあって近接しており、後述するように両遺跡の間に何らかの関連があったのではないかと考えられる。中世城館跡が数多く分布していることから当時の集落跡が存在することは当然予想されるところであるが、その実態は皆目不明である。



1	欠　遺　跡	5	小山田遺跡	9	宮城館跡	13	下別当遺跡	17	御安寺遺跡
2	持長地遺跡	6	荒子遺跡	10	山田沢遺跡	14	二屋敷遺跡	18	曲竹小屋館跡
3	八幡平遺跡	7	明神裏遺跡	11	沢北遺跡	15	下原田遺跡		
4	山家館跡	8	馬場北遺跡	12	願行寺遺跡	16	上原田遺跡		

第1図　周　辺　の　遺　跡

Ⅱ．調査の方法と経過

1．欠 遺 跡

段丘と丘陵との間に南から延びる小さな沢があり、自動車道は沢と段丘の西斜面とにまたがって通過する。路線敷の中央線から西側の沢の部分は水田となっているが、東側の段丘斜面の部分は畑地や果樹園になっておりそこに遺物の散布がみとめられた。そのため、段丘斜面の部分に地形の傾斜にあわせて、東西9m、南北60mの範囲に一辺3mのグリッドを基本とした調査区を設定した。グリッド名は南北方向に南からアルファベット（A～T）と東西方向に西かアラビア字(1～3)とを組み合わせて表わした。

調査は昭和45年4月20日から4月25日まで行なった。遺構の有無と包含層の状況を確認するために、西側を1グリッドおきもしくは2グリッドおきに発掘した。その結果、中央部から北側にかけて南北に走る溝と若干のピットを確認したが、全体的に深耕による撹乱が顕著であった。発掘面積は13区117m^{2}である。

2．持長地遺跡

遺跡の南側は水田となっている小さな沢に面しており、また北側は一段低い段丘への段丘崖として急斜面になっている。沢と急斜面とに挾まれた部分は東西80m、南北100mほどの狭い平坦地となっており、自動車道はその平坦地の中央部を南北に縦断する。

調査区は路線敷中心杭のＳＴA19＋60とＳＴA20とを結ぶ直線を基準線にして、一辺3mのグリッドを最小単位として設定した。基準線から1m東側の東西15m、南北60mの範囲を調査区とし、基準線沿いに南から北No1からNo20まで、その東の列を同じく南から北へNo21からNo40までと順次に命名して、100区を設定した。基準線の1m西側にも東西21m、南北60mの範囲を調査区として、基準線沿いに南から北へNo101からNo120まで、その西側の列を同じく南から北へNo121からNo140までと順に命名して、No101からNo240まで140区を設定した。

第一次調査は昭和45年3月2日に開始した。まず、基準線の東側部分について層序と遺構の有無を確認するために調査区中央部を計13区発掘して、地山面で若干のピットと落ち込みを検出した。続いて基準線の西側部分の発掘に着手したところ、ピット群を発見することができむ第一次調査では計25区225m^{2}を調査したがピット群の性格を明らかにすることができず、3月11日に終了した。

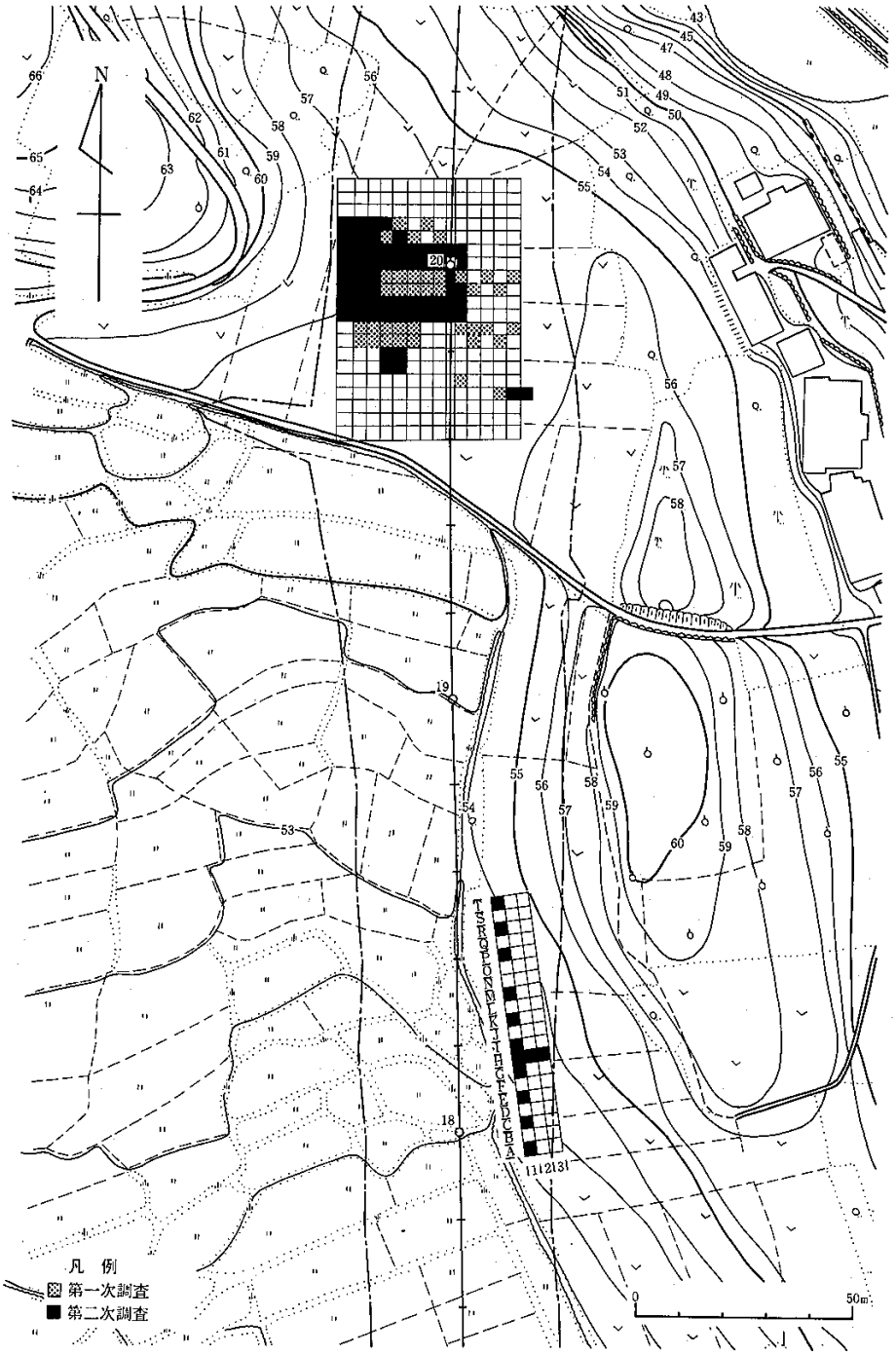
第二次調査ではピット群のひろがりと性格とを追求するために、第一次調査の際のグリッドを数グリッドまとめて一調査単位とすることにした。グリッドとの混乱を避けるためにローマ数学で表記することとし、簾一次調査においてピット群の発見された発掘区をＩＧとⅡＧにし

た。

第二次調査は昭和45年4月26日に開始した。まず、ＩＧの西側をＩＧ拡張部、ＩＧとⅡＧの間をⅢＧと命名して、そこから発掘調査を行なった。順次発掘区をひろげていったところ、ピット群はさらに西側にひろがっているために、4m幅のグリッドを西側に1列拡張して第一次調査のグリッド番号の付け方では南から北へNo241からNo260までとすることにした。ピット群の検出をある程度確認した5月7日からはそれらの精査と併行して遺り方設定を行ない平面図を作成し、5月16日に第二次調査を終了した。第一・二次調査を合わせた発掘面積は901m²である。

なお、第二次調査の発掘区と第一次調査のグリッドとの対照表は次のとおりである。

第二次調査区	第一次調査グリッド
Ⅰ G	No112、113、132、133、152、153、172、173、192、193
Ⅱ G	No148、149、168、169、188、189、208、209、228、229
ＩＧ拡張部	No212、213
Ⅲ G	No110、111、130、131、150、151、170、171、190、191、210、211、230、231
Ⅳ G	No114、134、154、174、194、214
Ⅴ G	No115、135、155、175、195、215
Ⅵ G	No13、14、15、西側グリッドとの連結部
Ⅶ G	No166、167、186、187
Ⅷ G	No232、233、234、235
Ⅸ G	No252、253、254、255
Ⅹ G	No176、177、196、197、216、217、236、237、256、257
Ⅺ G	No250、251
Ⅻ G	No64、84、264



第2図　グリッド配置図

Ⅲ．報告にあたって

両遺跡の発掘調査がおこなわれてから現在まで10年余の歳月が過ぎている。そのために今回の遺構・遺物の整理に際していくつかの問題点があった。

遺構については、①遺構が発見された部分や遺物が多量に出土した部分を中心に発掘しており、全面発掘がなされていないので遺構の分布状況が全面的に明らかになったとは言いがたい。②ピットを発掘する場合に柱痕跡の意識的な確認がなされていないので、掘立柱建物跡の柱穴として組み合うのかどうか不確実なものが多い。③遺構を記録する場合に平面図と若干のレベルが記録されてはいるものの断面図等の作成はなされていない。④図面等の整理・保管が不備であり紛失してしまったものがある。また、遺物については、⑤出土した層位の記録が不充分であり共伴関係を明確にできないものが多い。⑥収蔵・保管が不備であり紛失してしまったものがある。

以上のような問題点があり整理に際して多くの不明な点を生じたが、その場合にはすでに発表してある概報（後藤：1970、白鳥：1971ａ・ｂ）に依拠したり、調査者への質問に対する回答や調査者の個人的な記録を参考にしたりした。

次に、記述に際しては以下の点に留意した。①概報の明らかな誤りについては混乱を避けるために誤認である旨を記述することにした。②掘立柱建物跡の柱間寸法については、柱痕跡がみとめられた場合にはその中心で、柱痕跡がみとめられない場合には柱穴掘り方の中心でそれぞれ計測することにした。③持長地遺跡の第一次調査において第2層上面で検出されたピット状のもの（概報では第一次柱穴遺構となっている）については、第二次調査において耕作上の撹乱によるものと判断されており、今回の報告では省くことにした。

なお、両遺跡の調査内容に関して概報と今回の報告との間に相違がある場合には、本報告書の記載内容が優先するものである。

Ⅳ. 欠　遺　跡

1. 基本層序

遺跡は段丘の西向きの斜面に位置しているが、北側がやや高く南側が低くなっているために北側で薄く南側で厚いという傾向がみとめられた。表土から地山までの堆積層は3層みとめられる。3層とも発掘区全域に分布している。

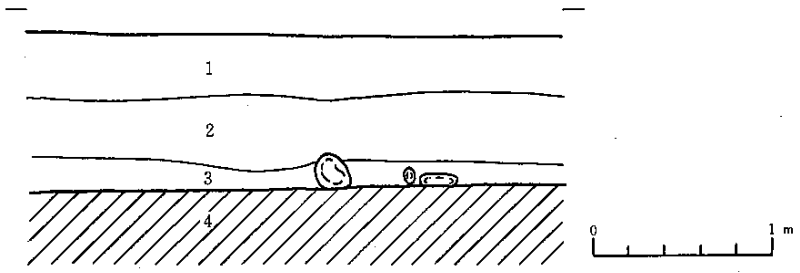
第1層　表土である。層の厚さは約35cmである。

第2属　しまりのない黒色土層である。土質が一定しておらず、耕作による撹乱をうけているものと思われる。層の厚さは約30cmである。

第3層　黒褐色粘土層である。幼児頭大の段丘礫を含んでいる。この層も土質が一定しておらず、深耕による撹乱をうけているものと思われる。層の厚さは約15cmである。

第4層　黄褐色粘土層で地山である。

遺物は第1層から第3層にかけて出土している。



第３図　欠遺跡セクション(P1東壁)

2. 発見された遺構と出土遺物

(1) 溝およびピットとその出土遺物

今回の調査で発見された遺構は溝とピットである(第4図)。

溝はG1、H1、Ｉ1、K1、Ｐ1、R1の各区で部分的に検出された。確認面は地山である。ほぼ南北方向に縦走しており、幅30～40cm、深さ10～20cmである。溝内の堆積土は基本層序の第2層の土質に近似している。

ピットは溝の付近から少数検出された。確認面は地山である。ピット内の堆積土は溝と同様に基本層序の第2層の土質に似ているが、溝との関係は不明である。またピットの配置に規則性はみとめられない。

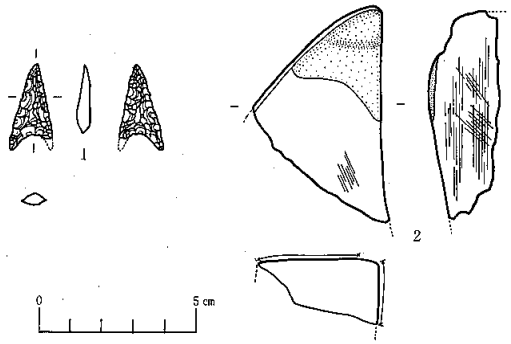
溝から縄文土器・土師器の細片と石器が出土している(第5図)。ピットからの出土遺物はない。

縄文土器：14片出土している。いずれも胎土に繊維の混入がみとめられる。

土師器：22片出土している。製作にロクロを使用しているものが多い。

石鉄：1点出土している(1)。基部中央にえぐりがはいって凹状になってあり、両側縁は直線的である。基部の一方を破損している。

砥石：欠損品が1点出土している(2)。使用面が2面残っており、擦痕がみとめられる。



第5図 溝 出 土 遺 物

(2) 表土および堆積層出土の遺物

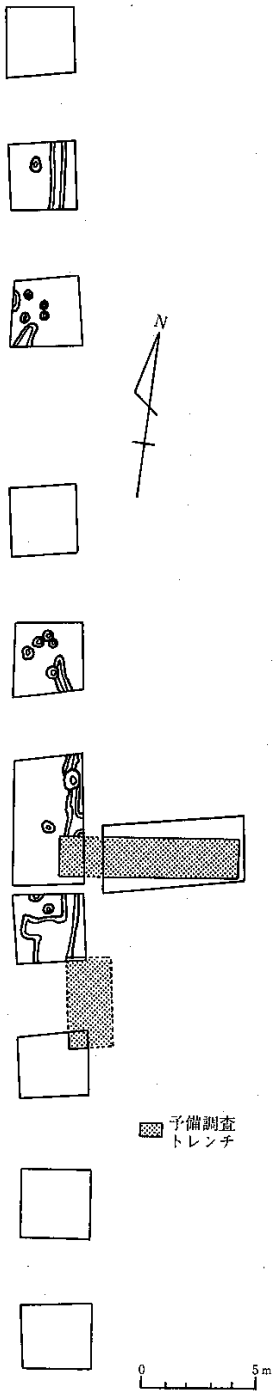
出土遺物は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器である。弥生土器はG1区からだけ出土しているが、その他の遺物は各区の第1層から第3層にかけて混在して出土している。

縄文土器(第6図1～22)

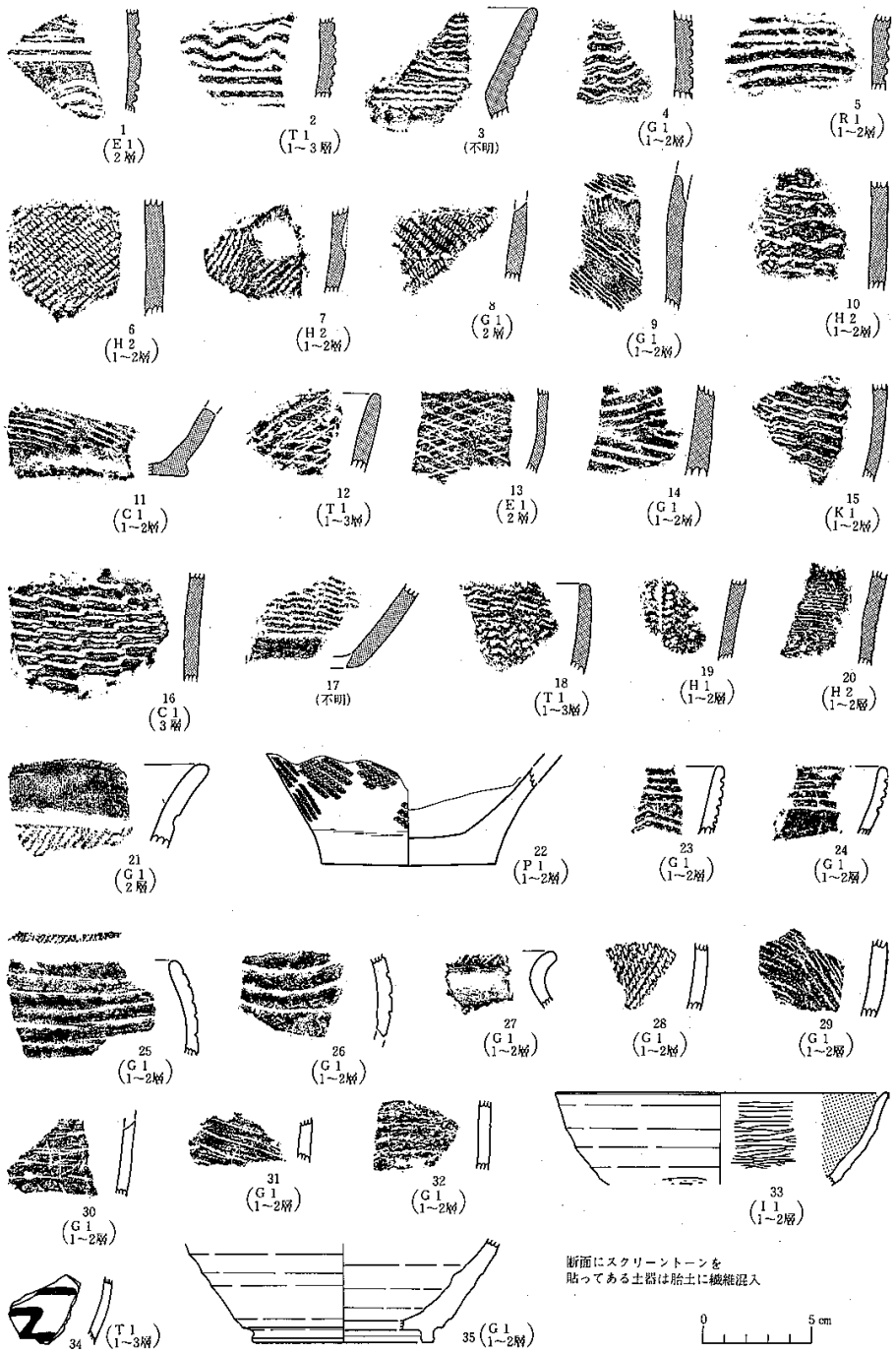
出土量は最も多い。すべて破片であり、器形や文様構成のわかるものはほとんどない。

1～20には胎土に繊維の混入がみられるが、21・22には混入されていない。

1～4は半截竹管によって施文されている。1は平行沈線文と連弧文とが、2はコンパス文と平行沈線文とがそれぞれえがかれている。3は6段の波状文が、4は4段の波状文がそれぞれ横位にめぐっている。



第4図 遺 構 配 図


1 (E 1 2層)
2 (T 1 1～3層)
3 (不明)
4 (G 1 1～2層)
5 (R 1 1～2層)
6 (H 2 1～2層)
7 (H 2 1～2層)
8 (G 1 2層)
9 (G 1 1～2層)
10 (H 2 1～2層)
11 (C 1 1～2層)
12 (T 1 1～3層)
13 (E 1 2層)
14 (G 1 1～2層)
15 (K 1 1～2層)
16 (C 1 3層)
17 (不明)
18 (T 1 1～3層)
19 (H 1 1～2層)
20 (H 2 1～2層)
21 (G 1 2層)
22 (P 1 1～2層)
23 (G 1 1～2層)
24 (G 1 1～2層)
25 (G 1 1～2層)
26 (G 1 1～2層)
27 (G 1 1～2層)
28 (G 1 1～2層)
29 (G 1 1～2層)
30 (G 1 1～2層)
31 (G 1 1～2層)
32 (G 1 1～2層)
33 (I 1 1～2層)
34 (T 1 1～3層)
35 (G 1 1～2層)
断面にスクリーントーンを
貼ってある土器は胎土に繊維混入
0
5 cm

第6図　出　土　土　器

5は棒状の施文具の押引きによる沈線と平行沈線が5条めぐっている。

6は単節のＬＲ縄文が、7は無節のＬ縄文が横位に回転施文されている。8はＲＬ縄文とＬＲ縄文が結束されずに別個に回転施文されて羽状縄文になっている。

9～17は撚糸文をもつものである。9～11はＬの撚糸文が回転されている。なお、9は成形時の粘土の積み上げ面にも施文されており、これは粘土の接合をよくするためのものであろう。また11は底部破片であるが底部外縁が張り出している。12・13はＬの網目状撚糸文が施されている。14はＬの木目状撚糸文である。15～17はＬの葺瓦状撚糸文が横位に回転されている。

18・19は縄の束（山内：1979）が回転施文されている。18はＲＬ1本とＬＲ2本の計3本の束の末端にＲの綾絡文が4条めぐっている。19はＬ（?）とＲＬの計2本の縄の束である。

20は櫛歯状施文具によって横位に施文されている。

胎土に繊維の混入がみられるものには、この他に結束されない複節の羽状縄文やループ文がある。

21は磨消縄文手法によって文様がえがかれているが、どのような文様の展開になるのかは不明である。地文としてのＲＬ縄文が縦位に回転施文されている。22は胴部外面にＬＲ縄文が縦位に回転施文されている底部破片である。底部外面は無文である。

弥生土器（第6図23～32）

比較的まとまった量が出土しているが、すべて小破片である。

23～26は一本工具により細く鋭い沈線がえがかれている。25は口唇部にＬＲ縄文が施されている。また、沈線間の帯状の部分はミガキとナデが交互に施されており、ナデの部分は赤彩されている。器形と部位は23～25が鉢の口縁部であり、26が壺の胴部である。

27は口唇部にＬＲ縄文が施文されている。器形は甕である。

28はＬＲ縄文が、29～31はＬＲ＋Ｒの附加縄文が、32はＲの撚糸文がそれぞれ回転施文されている。

土師器（第右図33・34）

縄文土器に次いで出土量が多い。小破片のために器形のわかるものは少ない。

33は製作にロクロを使用した坏である。外面の体部下端は手持ちヘラケズリされ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。34は坏の体部破片で墨書されている。小破片で墨痕もうすいために文字は判読できない。

この他に、大部分の坏は外面がロクロ調整され、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。坏の底部には回転糸切り痕をもつものが多い。甕は外面が手持ちヘラケズリ・刷毛目・ロクロ調整されたものが多く、内面はナデ・ロクロ調整されたものが多い。

須恵器（第6図35）

器形の種類としては、坏・甕・壺の三種類みとめられたが、すべて小破片のために全体の形状を知ることができるものはない。

35は高台を有する底部破片である。器形は壺であると思われる。内外面ともロクロ調整が施されている。

石器（第7・8図）

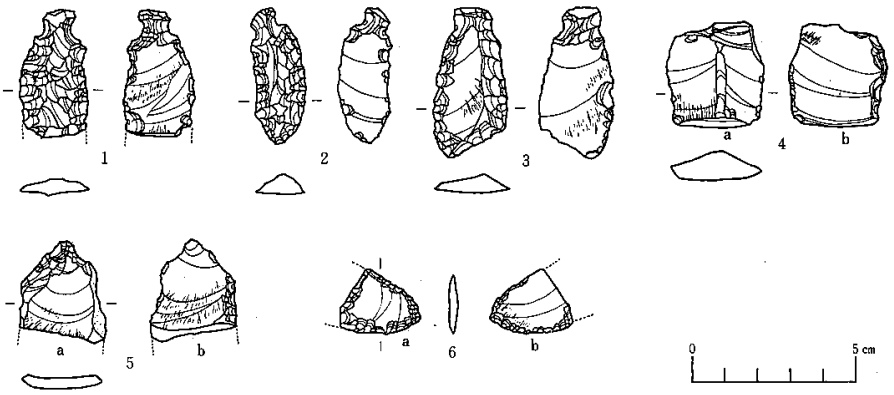
石匙：3点出土している。いずれも縦型のものであり、刃部は片面加工されている。第7図1は刃部の先端を欠損している。2は刃部が両側につくりだされている。3は刃部が三つの縁辺からなっている。

刃部を有する不定形石器：3点出土している。第7図4は蝶番（ちょうつがい）剥離の縦長剥片を素材としている。b面の右側縁に二次加工が加えられ、左側縁には使用によると思われる微細な剥離面がみとめられる。5は欠損品である。副面では先端部を尖頭状に調整し、b面では右側縁が二次加工され、錯向剥離がなされている。6も欠損品である。両面加工であるが、a 面では欠損後にも二次加工を加えている。

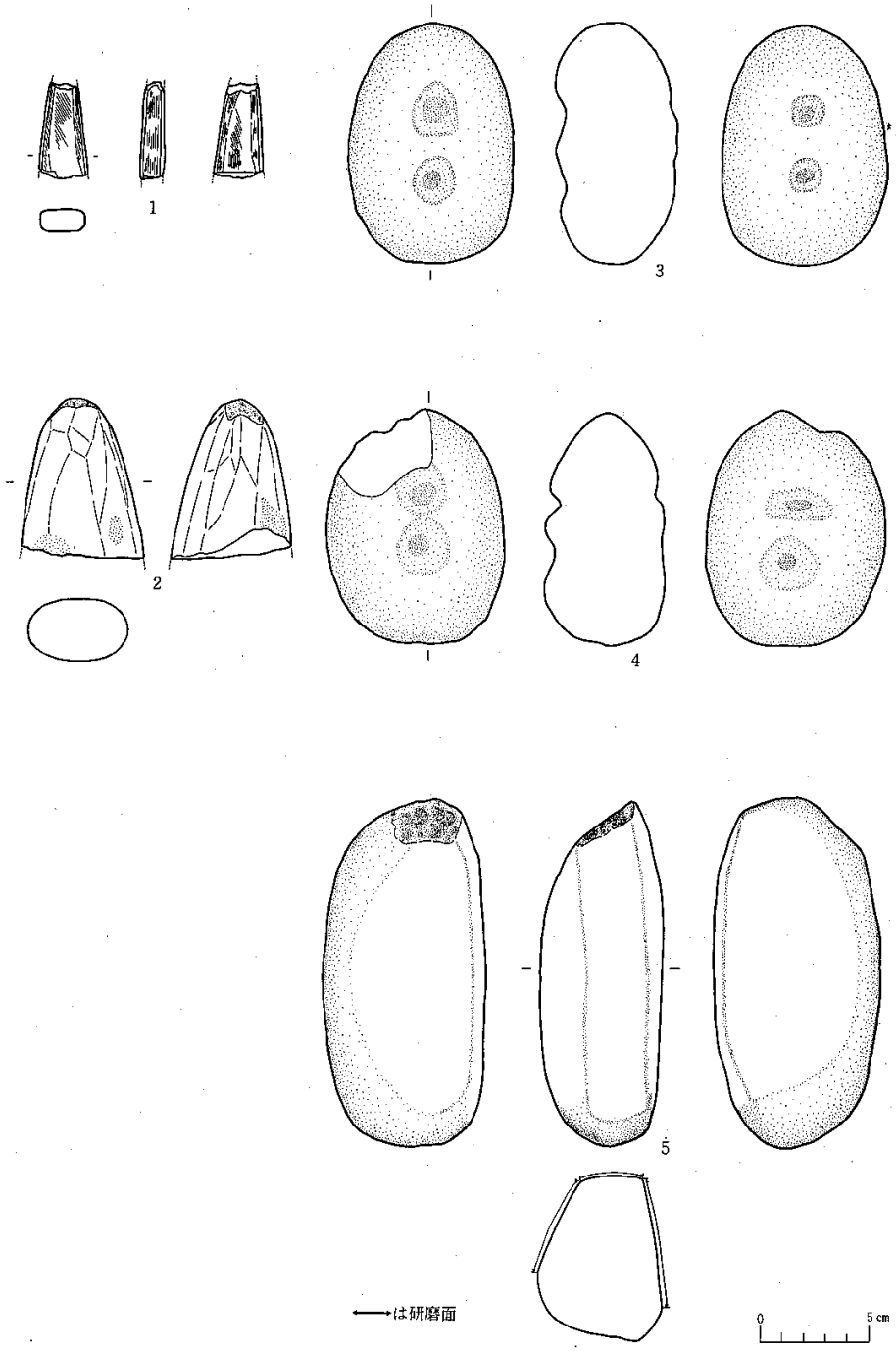
磨製石斧：2点出土しているが、両者とも欠損品である。第8図1には製作時のものと思われる擦痕が全面にみとめられる。2は部分的に自然面を残しており、また斧頭部には敲打痕が観察される。

凹石：2点出土している（第8図3･4）。両者とも平面形が楕円形で、上下両面に2個ずつ凹部がみとめられる。

磨石：1点出土している（第8図5）。平面形は長楕円形であり、3面が研磨されている。
一方の先端部に敲打痕がみとめられ、敲石としても使用されたものと思われる。
剥片・石核：図示しなかったが、剥片が14点、石核が1点出土している。



第7図　出　土　石　器



第8図　出　土　石　器

3. 考　　察

(1) 出土遺物の年代

今回の調査において出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器である。前述したように3層とも耕作による撹乱をうけており、遺物は層位的に混在して発見されたので、ここでは一括して扱うことにする。

縄文土器

胎土に繊維混入の有無によって二群に大別できる。

繊維の混入されているものには、文様をもつものとして半截竹管による文様、棒状施文具による文様、櫛歯状施文具による文様があり、地文のみのものとしては斜行縄文、羽状縄文、斜行撚糸文、網目状撚糸文、木目状撚糸文、葺瓦状撚糸文、縄の束の回転文がある。このうち、文様をもつ土器と網目状撚糸文、木目状撚糸文、葺瓦状撚糸文の土器は、仙台市三神峯遺跡(白鳥：1974)、七ヶ浜町大木囲貝塚(興野：1968)、鳴瀬町金山貝塚(宮城県教委：1977ｂ)、矢本町平田原貝塚（宮城県塩釜女子高校社会部：1969）から出土しており、大木2ａ式に位置づけられている。斜行縄文、羽状縄文、斜行撚糸文のものは上川名Ⅱ式から大木2式までの間にまたがるものであり、所属時期は限定できない。縄の束の回転文については山内清男氏が「大木1式と室浜式との中間の型式に稀に」発見されると述べている(山内：1979)が、発掘調査による報告例はない。本遺跡ではわずかに2点の出土であり、ここでは所属型式を限定しないで前期初頭のものとしておく。

胎土に繊維を混入しないものは、磨消縄文手法によって文様をえがくものと地文のみのものとがある。両者とも縄文が縦位に回転施文されている。大衡村上深沢遺跡（宮城県教委：1978）からの出土土器に類似しているが、どのような文様構成になるのか不明であるため、ここでは大きく中期末葉として位置づけておく。

弥生土器

文様はすべて一本工具によりえがかれており、地文は斜行縄文、附加縄文、撚糸文である。このような特徴の土器は、蔵王町西裏遺跡出土の長頸壺を標式とする円田式であるとされている(伊東:1957)。

土師器

坏は器面調整にロクロを使用しているものが多い。このような土師器は平安時代の表杉ノ入式であるとされている(氏家：1957)。甕は器面調整にロクロを使用したものとそうでないものとがある。前者は表杉ノ入式に属するが、後者も前者とそう変わらない時期のものである。

須恵器

すべて小破片であるために形態上の特徴から年代を与えることはできないが、出土した土師

器から考えて平安時代のものであろうと考えられる。

石器

層位的に共伴する土器が不明であるために、個々の石器に正確な年代を与えることはできない。しかし、出土した土器の時期と量から考えて、多くの石器が縄文時代前期前半のものであろうと考えられる。

(2) 遺構の年代

溝からの出土遺物は縄文土器、土師器、石器であるが、年代を直接に示すものはない。しかし、土師器の多くは製作にロクロを使用しており、平安時代の表杉ノ入式とされている(氏家：1957)ので、平安時代以降の溝であろうと考えられる。

ピットからの出土遺物はなく年代は不明である。

欠遺跡出土石器計測表

(　)は欠損品

図面番号	種別	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	地区	層	備考
第5図－1	石鏃	(27)	(14)	(4.5)	(1.0)	珪質頁岩	G1	溝	
－2	砥石	(68)	(43)	(21)	(59)	頁岩	G1	溝	
第7図－1	石匙	(38)	(21)	(5.5)	(4)	珪質頁岩	H1	1	
－2	石匙	41	15	7	4	珪質頁岩	M1	1・2	
－3	石匙	46	22	7	6	珪質頁岩	A1	1・2	
－4	不定形石器	31	29	9	9	珪質頁岩	G1	1～3	
－5	不定形石器	(26)	(30)	(5)	(4)	珪質頁岩	G1	2	
－6	不定形石器	(20)	(24)	(3)	(1.2)	珪質頁岩	T1	1～3	
第8図－1	磨製石斧	(43)	(22)	(10)	(18)	緑泥片岩	P1	1・2	
－2	磨製石斧	(72)	(56)	(30)	(169)	石英安山岩質凝灰岩	不明	不明	
－3	凹石	110	76	56	480	安山岩	A1	1・2	
－4	凹石	(108)	(82)	(52)	(570)	石英安山岩	G1	1・2	
－5	磨石	160	76	77	1,005	安山岩	E1	1・2	

V. 持 長 地 遺 跡

1. 基本層序

表土から地山までの堆積層には3枚の層が確認されたが、北西方向から南東方向にかけてわずかに傾斜しているために、北側で薄く南側で厚くなる傾向がみとめられた。特に、調査区の北西隅付近では表土の下がすぐに地山となっており、第2層と第3層を欠いでいる。

ここでは、調査区の中央にあたるＳＴＡ20付近の基本層序を述べることにする。

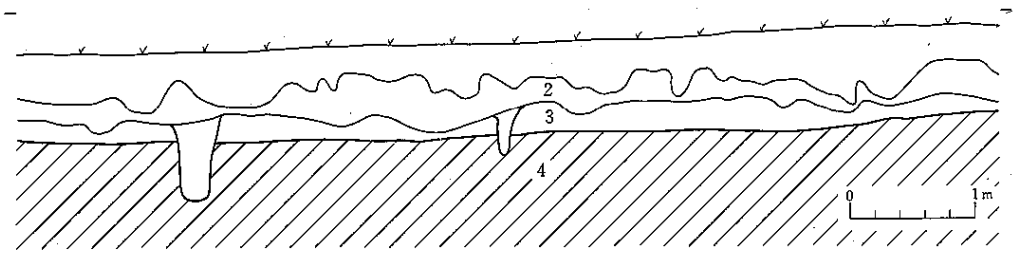
第1層　表土である。層の厚さは約30～40cmであり、下面の凹凸が著しい。

第2層　黒褐色土層である。下半部に木炭片を含んでいる。上層からの撹乱が多く、層の厚さは10～30cmと一定していない。

第3層　暗褐色土層である。比較的しまりがあり堅い。層の厚さは20～30cmである。

第4層　黄濁色粘土層で地山である。

遺物は第1層から第3層にかけて出土している。



第９図　持長地遺跡セクション（ⅣＧ南壁）

2. 発見された遺構と出土遺物

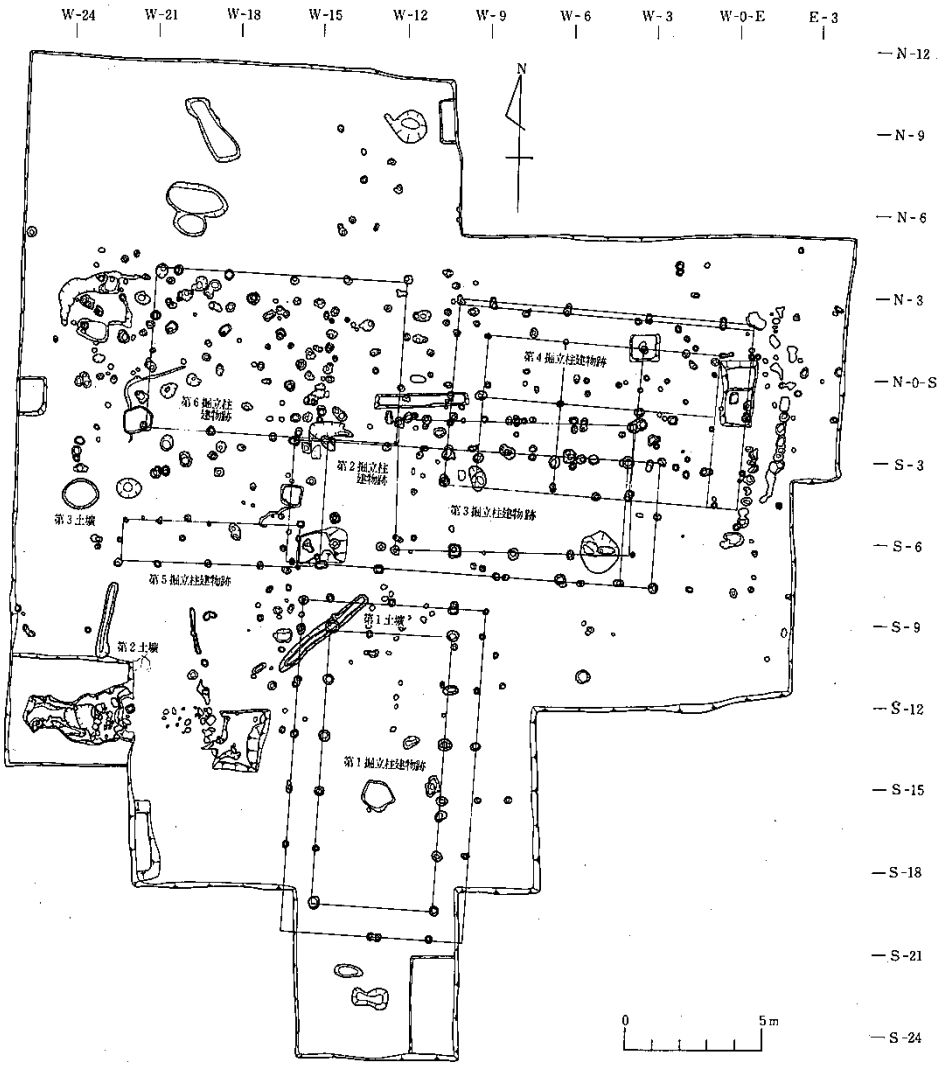
二次にわたる調査で検出された遺構は多数のピット群と土壙3基であり、これらの遺構は路線敷中央線西側の約25m四方の範囲に集中して発見された（第10図）。なお、ピット群は第3層上面において検出されたがピット内堆積土の土質が第3層の土質に近似しており平面形の認定が困難であったために、大部分のピットを第4層（地山）上面で確認している。したがって検出面は第3層上面である。

(1) 掘立柱建物跡とその出土遺物

ピット群を検討した結果、あるものは柱痕跡がみとめられ、ピットの配置に規則性のあることがわかった。このことから掘立柱建物跡の柱穴と考えられ、6棟が確認された。

第1掘立柱建物跡

発掘区の南側で検出された。柱穴と第1土壙とが切り合っており、柱穴の方が新しい。桁


W-24
W-21
W-18
W-15
W-12
W-9
W-6
W-3
W-0-E
E-3
N-12
N-9
N-6
N-3
N-0-S
S-3
S-6
S-9
S-12
S-15
S-18
S-21
S-24
N
第4掘立柱建物跡
第6掘立柱建物跡
第2掘立柱建物跡
第3掘立柱建物跡
第3土壙
第5掘立柱建物跡
第1土壙
第2土壙
第1掘立柱建物跡
0
5m

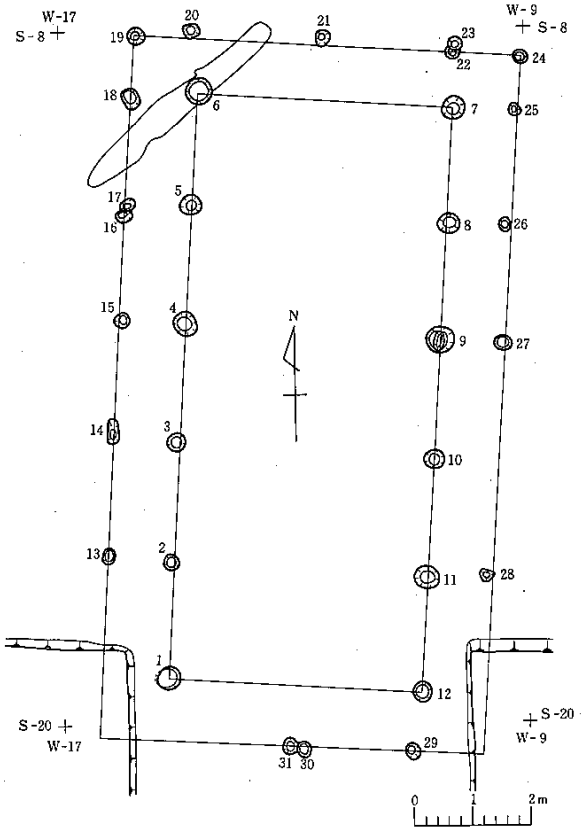
第10図　遺　構　配　図

行5間、梁行1間の建物で四面に廂がつく。主軸方位は身舎西側柱列でN3°　Eである。柱間寸法は桁行が西側柱列で南から2.0m＋2.1m＋2.0m＋2.0m＋2.0m＝10.1m、東側柱列で南から2.0m＋2.0m＋2.0m＋2.1m＋2.0m＝10.1m、梁行は南側で4.3m、北側で4.4mである。廂の出は西側で1.1m、東側で1.0～1.1m、南側で1.0m、北側で1.0～1.1mである。東側の廂の南から4番目の柱穴と身舎の西側柱列に対応すべき南側廂の柱穴は検出されなかった。

また、廂の4本の柱穴は発掘区外にあるものと考えられる。廂部分では南北両側で身舎の梁間を二等分するような位置に柱穴が確認されている。柱穴掘り方の平面形は径20～40cmの円形が多い。柱穴掘り方からの出土遺物はない。

第2掘立柱建物跡

第1掘立柱建物跡の北側に近接し、第3・4・5掘立柱建物跡と重複している。北西側で第6掘立柱建物跡と接しているが、柱穴2が第6掘立柱建物跡の柱穴を切っていることから、第2掘立柱建物跡の方が新しい。桁行5間、梁行1間の建物で、西側と東側に廂がつく。主軸方



柱穴深さ一覧表

柱穴No	深さ(cm)		
1	(30)	16	16
2	11	17	8
3	9	18	19
4	19	19	29
5	18	20	28
6	25	21	22
7	22	22	12
8	10	23	21
9	17	24	12
10	9	25	13
11	36	26	10
12	(22)	27	18
13	7	28	11
14	4	29	(14)
15	16	30	(9)
		31	(10)

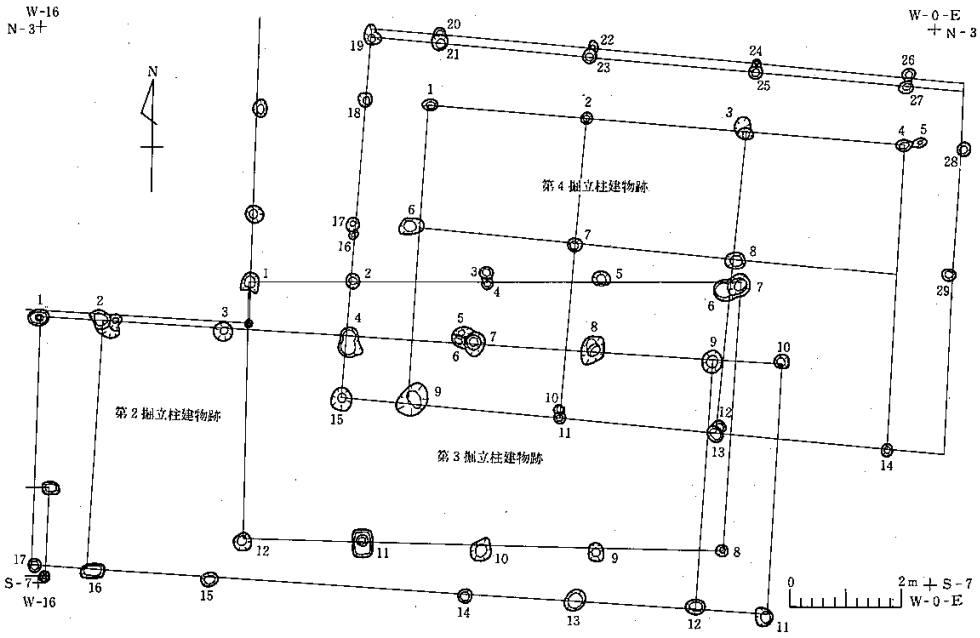
（　）内の数字は第3層上面からの深さ

第11図　第1掘立柱建物跡

位は北側柱列でN87°Wである。柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から2.2m＋2.2m＋2.2m＋2.2m＋2.1m＝10.9m、南側柱列で西から2.2m＋4.5m(2間分)＋2.0m＋2.2m＝10.9m、梁行が西側で4.4m、東側で4.5mである。廂の出は西側で1.0m～1.1m、東側で1.3mであり、東側の廂がやや長い。北側柱列の柱穴4に対応すべき南側柱列の柱穴は検出されなかった。柱穴掘り方の平面形は径20～40cmの円形を基調とするものが多い。柱穴掘り方からの出土遺物はない。

第3掘立柱建物跡

第2・4掘立柱建物跡と重複している。桁行4間、梁行1間の建物で、主軸方位は北側柱列でN89°Eである。柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から1.8m＋2.4m＋2.1m＋2.5m＝8.8m、南側柱列で西から2.1m＋2.1m＋2.1m＋2.3m＝8.6m、梁行が西側で4.5m、東側で4.8mで



柱穴深さ一覧表　　( ) 内の数字は第3層上面からの深さ

2建物	柱穴No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	深さ(cm)	20	34	41	28	21	34	53	51	52	—	24	28	56	23	13	13	30
3建物	柱穴No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12					
	深さ(cm)	50	17	17	21	15	22	43	13	23	18	22	32					
第4建物跡	柱穴No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
	深さ(cm)	41	54	(59)	29	—	30	31	19	40	29	36	26	29	26	38	(86)	(89)
	柱穴No	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29					
	深さ(cm)	70	64	56	68	60	67	30	47	29	43	33	35					

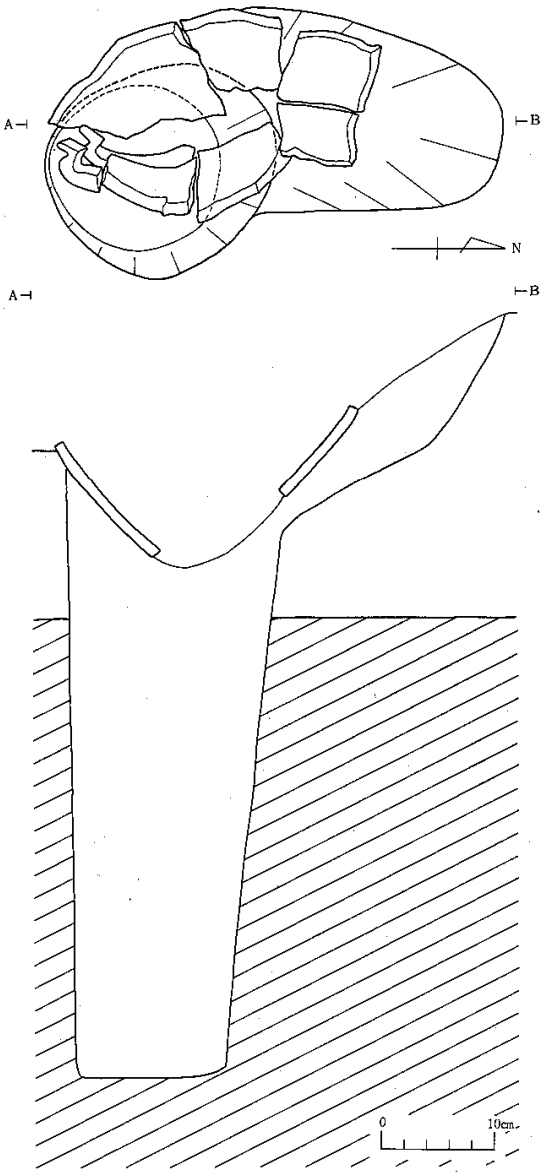
第12図　第2・3・4掘立柱建物跡

あり、柱間寸法には比較的ばらつきがみられる。柱穴掘り方の平面形は径30cm前後の円形が多い。柱穴掘り方からの出土遺物はない。

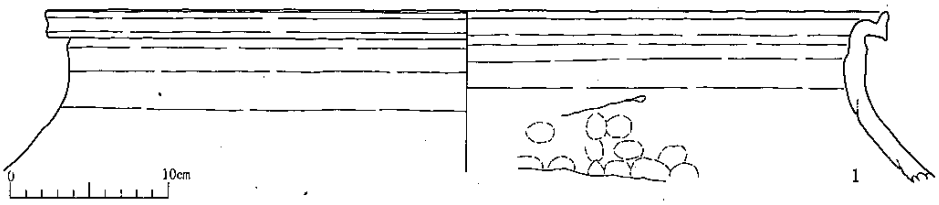
第4掘立柱建物跡

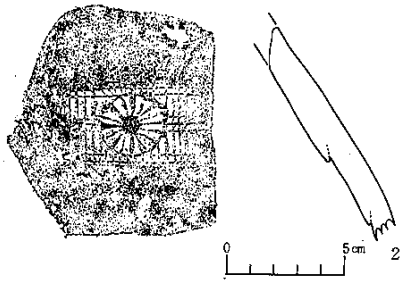
南側で第2・3掘立柱建物跡と重複している。桁行3間、梁行2間で総柱の建物である。西側、北側、東側の3面に廂がつく。主軸方位は棟通りの柱列でN85°Wである。柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から2.8m＋2.9m＋2.8m＝8.5m、南側柱例で西から2.7m＋2.8m＋3.1m＝8.6m、棟通りの柱列が西から2.8m＋2.9m＋2.9m(?)＝8.6m、梁行が西側柱列で北から2.2m＋3.2m＝5.4m、東側柱列で北から2.3(?)＋3.2m(?)＝5.5mである。廂の出は、西側で1.1～1.2m、北側で1.1m、東側で1.0mである。棟通りの柱列の東端の柱穴と東側廂の南北両検出されなかった。北側廂の柱穴20・21、柱穴22・23、柱穴24・25、柱穴26・27には切り合いがみとめられ、それぞれ柱穴21・23・25・27の方が新しい。このことから、廂部分を若干狭くした可能性がある。柱穴掘り方の平面形は径20～30cmの円形が多い。

出土遺物には柱穴3に横倒しに落ち込むような状況で発見された中世陶器がある(第13・14図)。器形は甕で口縁部から体部にかけての破片が8片ある。接合しなかったが、色調・器面調整などから考えてすべて同一個体であると思われる。口縁部は水平に短く外折し、その先端は垂直に



第13図　中世陶器出土状況





第14図　第４掘立柱建物跡出土陶器

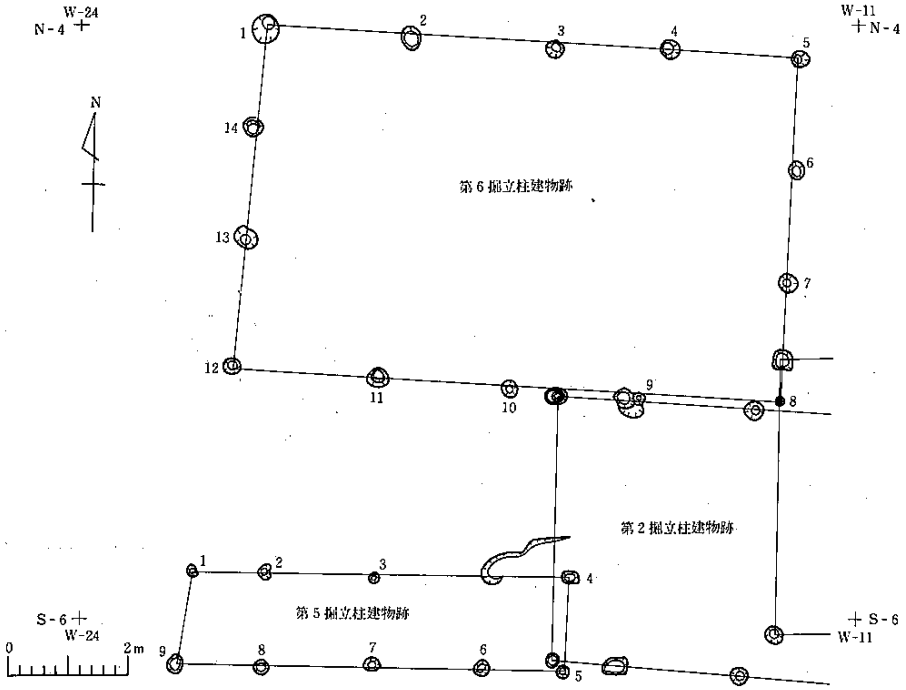
上方に折り曲げられて外側に幅約1.8cmの口縁帯がめぐっており、全体として「L」の字形になっている。口縁帯の下端はわずかに下方に鈍く突き出ている。口唇部は丸みをおびている。内側には幅約0.8cmの広い沈線がめぐり、いわゆる受口状の口縁部となっている。頸部は比較的短く直立している。頸部と肩部の境は明瞭ではなく、肩部の張り出しは強くない。体部の形状は接合できなかったので不明である。

外面の色調は灰色を呈している。器面調整は外面が口縁部から肩部にかけて横ナデ調整がなされ体部はケズリののち部分的にナデ調整が施されている。内面は口縁部から頸部にかけて横ナデ調整が施され、肩部には指頭によるオサエの痕跡がみとめられる。体部内面はオサエののち横方向にナデツケがなされている。また、内面には3～5cmの幅で粘土紐の接合部分がみとめられる。第14図2は肩部破片で、簾状文の中央部に菊花文のある押印が捺されている。

この陶器については、藤沼邦彦氏によって生産地は愛知県常滑地方で時期は13世紀（中葉以降）であるとされている（藤沼：1977）。口縁帯を形成してその下端がわずかに突き出ているといった特徴は、赤羽一郎氏の編年によれば第Ⅲ期として13世紀後半から14世紀前半に位置づけられている（赤羽：1977）。これらの見解から、ここでは所属時期を鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての13世紀末から14世紀前半であるとしておきたい。

第5掘立柱建物跡

東側で第2掘立柱建物跡と重複している。桁行4間、梁行1間の建物で、主軸方位は北側柱列でN90°Eである。柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から1.2m＋1.8m＋3.3m（2間分）＝6.3m、南側柱列で西から1.4m＋1.8m＋1.9m＋1.4m＝6.5m、梁行が東西両側とも1.6mである。他の5棟に比べて柱間寸法がやや短い。柱穴6に対応する北側柱列の柱穴は検出されなかった。柱穴掘り方の平面形は径20cm前後の円形が多い。柱穴掘り方からの出土遺物はない。



柱穴深さ一覧表

5建物	柱穴 No	1	2	3	4	5	6	7	8	9					
	深さ(cm)	7	17	10	26	9	22	23	44	35					
6建物	柱穴 No	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
	深さ(cm)	90	66	49	62	29	24	30	5	12	31	17	84	65	32

第15図　第５・６掘立柱建物跡

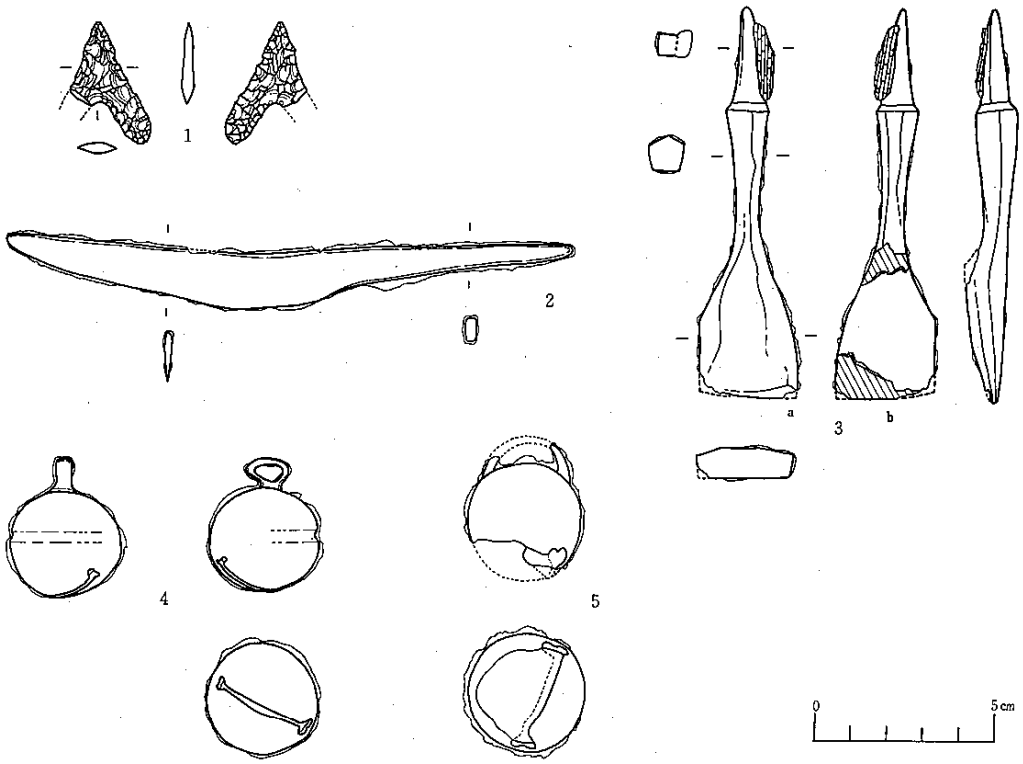
第6掘立柱建物跡

南東隅で第3掘立柱建物跡と隣接している。また、柱穴9が第2掘立柱建物跡の柱穴に切られており、第5掘立柱建物跡の方が古いことがわかる。桁行4間、梁行3間の建物で、主軸方位は北側柱列でN87°Wである。柱間寸法は、桁行が北側柱列で西から2.4m＋2.4m＋1.9m＋2.2m＝8.9m、南側柱列で西から2.4m＋2.2m＋2.2m＋2.3m＝9.1m、梁行が西側柱列で北から1.8m＋1.8m＋2.2m＝5.8m、東側柱列で北から1.9m＋1.9m＋2.0＝5.8mである。柱穴掘り方の平面形は径30～40cmの円形が多い。柱穴掘り方からの出土遺物はない。

(2) 組み合わないピット群とその出土遺物

掘立柱建物跡として組み合わないピット群の中にも柱痕跡のみとめられるピットがいくつか確認された。また、直線的に並ぶピット列もいくつかみとめられた。このことから、さらに掘立柱建物跡として組み合う可能性がある。

出土遺物は縄文土器と土師器の細片、石鏃、刀子、鑿(のみ)、鉄鈴、植物遺存体である(第16図)。



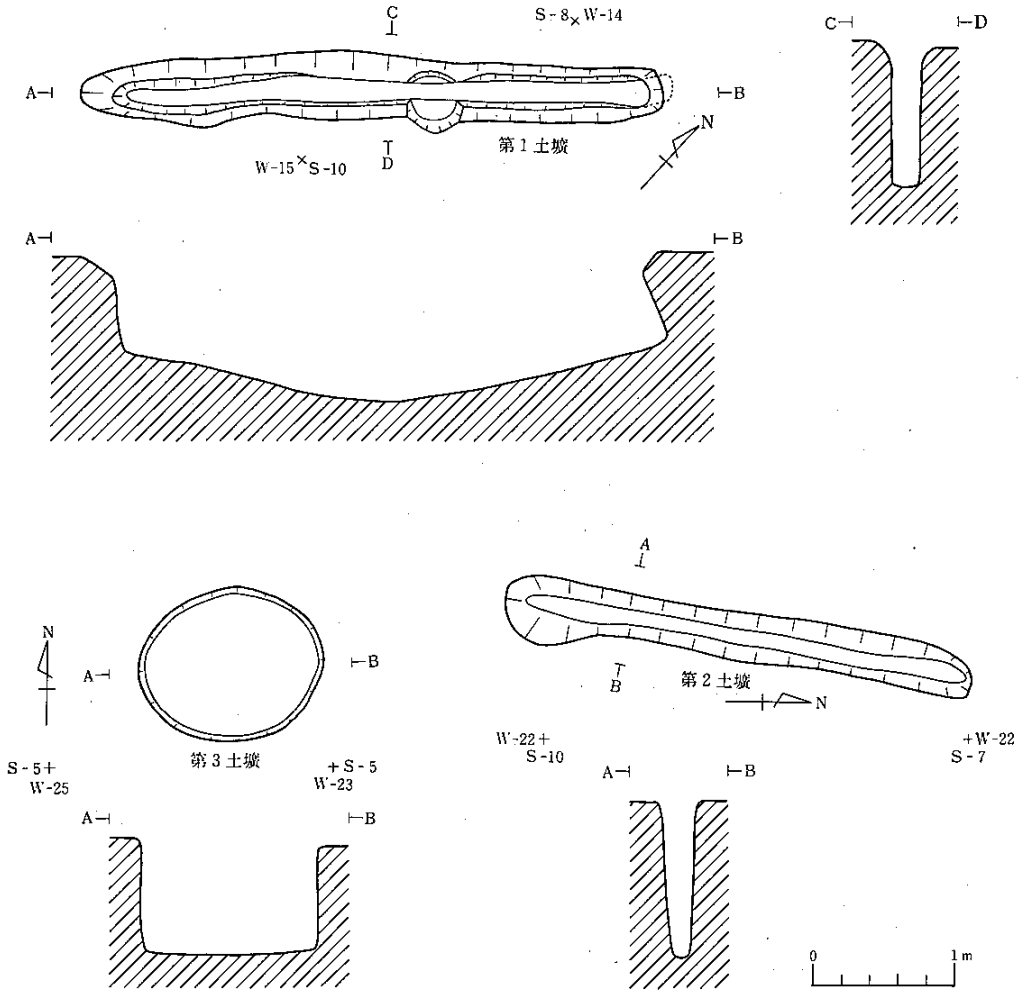
第16図　組み合わないピット群出土の遺物

石鏃：1 点出土している (1)。基部の中央に大きなえぐりがあり、尖頭部両側縁は直線的である。脚部の一方を欠損している。

刀子：2点出土したが、うち1点は収蔵中に紛失してしまった。現存のものは完形品である(2)。棟はやや弯曲しながら茎と連続している。刃関（はまち）には段がつかない。刀身は平造りである。

鑿：片刃の平鑿が1点出土している(3)。銹化のためにｂ面に一部板状に剥落した部分もみとめられるがほぼ完形品である。刃部は軸線に対して直角にはなっていない。使用して摩耗した結果によるものであろう。ａ面でみると刃部の左側縁は強く肩が張っているのに対して、右側縁は肩の張りが弱く左右非対称である。刃部と茎の中間部は断面形が五角形の棒状になっている。茎には木質のものが附着しており、柄の一部が残存したものと考えられる。

鉄鈴：2点出土している。4は完形品である。頂部に逆三角形状の鈕がついている。球形の胴部中央に浅い沈線が1条横方向にめぐる部分がみられるので全周する可能性がある。しかし銹化のため不明でる。胴部下面には半周ほどの長さに一文字形の透し穴があいている。中には5㎜前後の鉄の丸が2個入っており、いまでも振ると音を発する。5は銹化がはげしく全体



第17図　土　　壙

的に脆くなっている。胴部の4分の1ほどを欠損しているが、一文字形の透し穴の片側縁が残っている。鈕は残存部分から考えて半環状であろうと考えられる。

植物遺存体：炭化したエゴマ(荏) Perilla frutescens ＢＲＩＴＴＯＮの種子である(註)。百数十粒の種子が約2cm大の塊状になっており、種子の内部は空洞化している。

註：東北大学農学部作物学教室助教授星川清親氏の鑑定による。なお、概報では粟と同定されてるが誤認である。

(3) 土 壙

第1土壙

地山面で確認した。第1掘立柱建物跡の柱穴6と切り合っており、柱穴よりも古い。平面形

は直線的な溝形を呈する。規模は上端で長さ4.2m、幅0.4～0.5m、深さ103cmである。壁は底面から垂直に立ち上がり、上端でわずかに開く。北東隅は奥に約15cmえぐりこんでいる。
底面は平坦で、中央部が最も深く両端がわずかに浅い舟底状である。出土遺物はない。

第2土壙

地山面で確認した。平面形は第1土壙と同様である。規模は上端で長さ3.3m、幅0.3～0.4m、深さ110cmである。壁は垂直に立ち上がっている。底面は凹凸が多く、舟底状である。出土遺物はない。

第3土壙

地山面で確認した。規模および平面形は長軸1.3m、短軸1.1mの楕円形で、深さ90cmである。壁は底面から垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。出土遺物はない。

(4) および堆積層出土の遺物

第1～3層から縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、中世陶器、青磁、土製品、石器・石製品、鉄製品・鉄滓、古銭および人骨が出土している。これらの遺物はいずれも各層にわたって出土しており、層によるまとまりはみられないので以下では一括して扱いたい。

縄文土器(第18・19図)

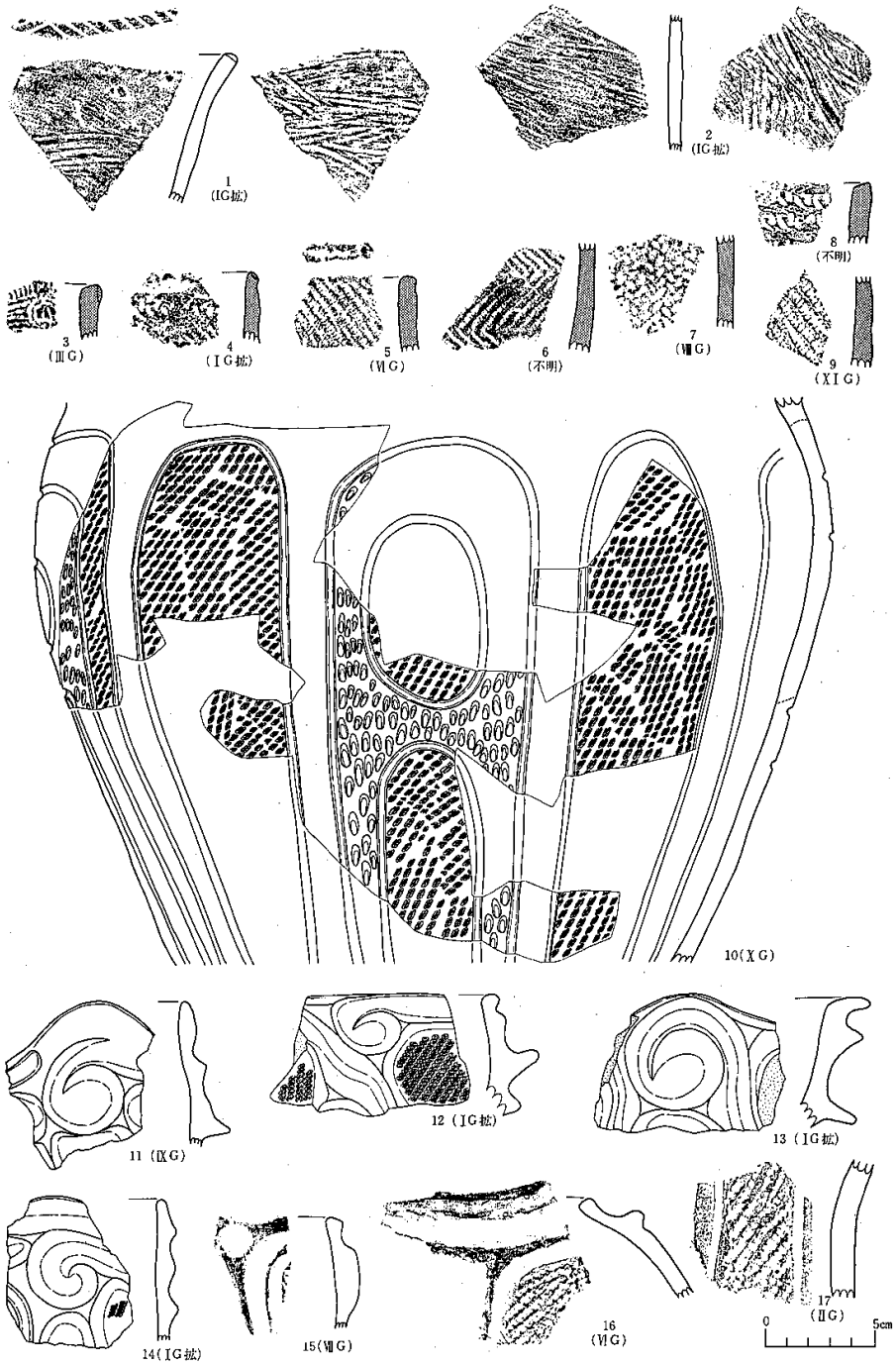
出土量は最も多い。器形は深鉢形土器が多いと思われるが、ほとんどが破片であるために詳細は不明である。

第18図1は内外面に条痕文を有する口縁部破片である。波状口縁の口唇部には斜行する刻目がみられ、波頂部で刻目の方向が変化している。2も内外面条痕文の胴部破片である。胎土、色調などから考えて同一個体であろうと思われる。いずれも胎土に繊維の混入はみられない。このような特徴の土器は小牛田町素山貝塚(伊東：1940)から出土しており、早期末の素山2式に位置づけられている(伊東：1957)。

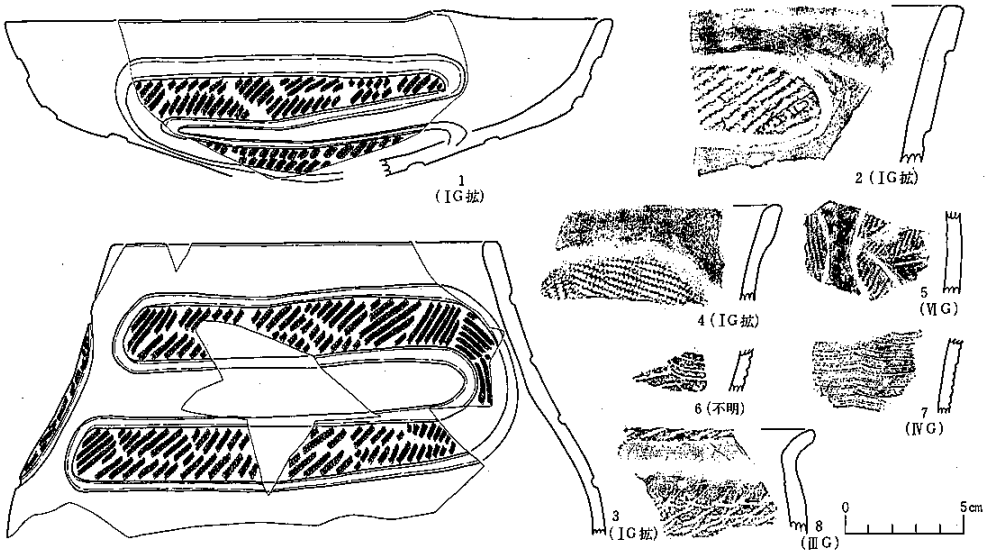
第18図3は口縁部上端に縦位の刻目がめぐり、その下にRの撚糸圧痕文が施文されている。
4も口縁部上端に刻目がめぐり、その下にＲＬ縄文が回転施文されている。5は口唇部にＲＬの撚糸圧痕をもち、外面に同じＲＬ縄文を回転施文させている。これらはいずれも胎土に繊維を含んでいる。このような特徴の土器は柴田町上川名貝塚(加藤：1951)から出土しており、前期初頭の上川名Ⅱ式とされている(林：1965)。

第18図6～9も胎土に繊維の混入がみられる。6はＲＬとＬＲとによる結節のない羽状縄文である。7は組紐回転文、8はＲＬのループ文、9はＲＬ縄文が施文されている。このような地文のみの土器は上川名Ⅱ式から大木2式までの前期初頭の土器である。

第18図10は胴部に膨らみを有し、頸部でくびれたのちに口縁部が外反する深鉢形土器である。磨消縄文手法によって縦位の楕円文がえがかれている。地文は縦位に回転施文されたＲＬＲ縄


1
(IG拡)
2
(IG拡)
8
(不明)
3
(ⅢG)
4
(ⅠG拡)
5
(ⅥG)
6
(不明)
7
(ⅦG)
9
(ⅩⅠG)
10(ⅩG)
11 (ⅨG)
12 (ⅠG拡)
13 (ⅠG拡)
14(ⅠG拡)
15(ⅦG)
16
(ⅥG)
17
(ⅡG)
0
5cm

第18図　出　土　土　器



第19図　出　土　土　器

文と底部方向からの刺突である。11～16は隆起線と沈線とが結合した隆沈文によって渦巻文がえがかれている。11・13～15は波状口縁をなす。縄文原体がわかるものはすべてＲＬ縄文を縦位に回転施文させている。17は縦位に区画された範囲内に磨消縄文手法によって縦位のＲＬ縄文が回転施文されている。このような特徴の土器は大衡村上深沢遺跡から出土しており、中期の大木9式であるとされている（宮城県教委：1978ａ）。

第19図1は口縁部がやや外傾し胴部中央で屈曲したのち胴部下半で大きく外傾する浅鉢形土器である。磨消縄文手法によってＣ字形の区画内にＬＲ縄文が横位に回転施文されている。Ｃ字形の文様の構成単位は3単位であると思われる。2は深鉢形土器であるが、文様は1と類似するであろう。3は口縁部が内傾して胴部に最大径を有する深鉢形土器である。磨消縄文手法による逆Ｃ字形の文様が3単位めぐる。地文としてのＬＲ縄文の回転方向は文様の区画に沿って変化している。4も3と同様にＬＲ縄文の回転方向が文様の区画に沿って変化している。このような特徴の土器は白石市菅生田遺跡(宮城県教委：1973)から出土しており、中期末の大木10式であるとされている。

第19図5は胴部破片であるが、器形は鉢形土器であると思われる。磨消縄文手法によるレンズ状の文様がえがかれている。このような特徴の土器は後期後半のものであろうと思われる。

弥生土器(第19図)

わずかに3点だけ出土している。

第19図6・7はともに鉢の胴部破片である。両者とも幅が狭く鋭い弧状の沈線が横位にめぐっており、沈線は2本単位の平行施文具によってえがかれている。このような特徴の土器は弥

生時代の十三塚式(桜井氏)であるとされている(伊東：1957)。

第19図8は甕の口縁部破片である。口唇部にＬＲ＋Ｒの附加縄文が施され、頸部は無文帯となっている。肩書にはＬＲ＋Ｒの附加縄文にさらにＲの綾絡文が回転施文されている。この土器の所属時期を限定することは困難である。

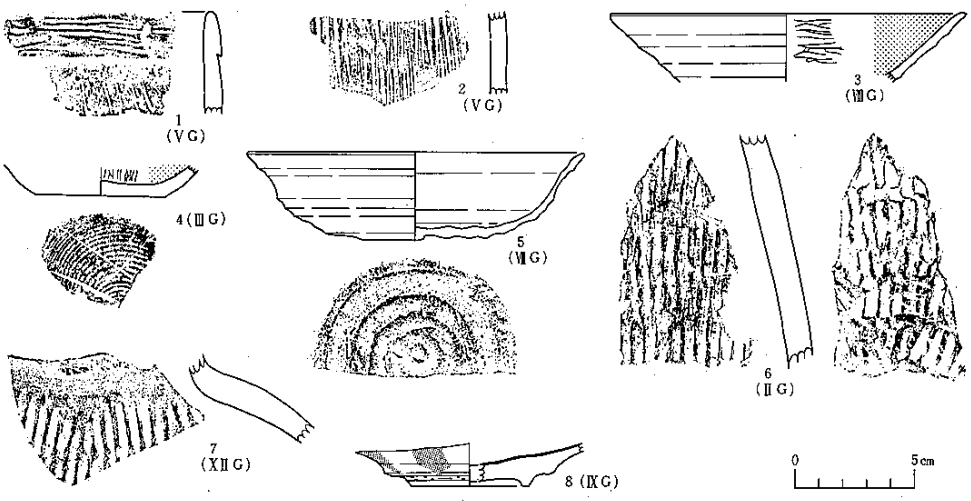
土師器(第20図)

縄文土器に次いで出土量が多い。坏と甕があるが、図示できるものは少ない。

第20図1は体部から口縁部にかけて直立する甕である。口縁部は外側に折れ曲って段のついた複合口縁になっている。器面調整として、口縁部には棒状工具によると思われる一本単位のナデが横方向になされており、体部には口縁部の場合よりも鋭い数本単位の棒状工具によると思われるナデが縦方向になされている。内面は横方向にヘラミガキされている。2も器面調整が1と類似しており、同一個体であると思われる。これらは口縁部の特徴から古墳時代前期の塩釜式に比定されると考えられる(氏家：1957)が、器面調整についてはあまり類例がないので今後他遺跡との比較が必要である。

第20図3は直線的に大きく外傾する坏である。外面にロクロ調整痕がみとめられ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。4は坏の底部破片である。回転糸切り技法によって底部を切り離したのちに三本の直線が箆描きされている。このほか、大部分の坏が外面にロクロ調整痕を残し、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。このような特徴の土師器は平安時代の表杉ノ入式に比定することができる(氏家：1957)。

復元図化できなかったが、甕の大部分は外面がヘラケズリ・刷毛目・ロクロ調整されており、内面はナデ・ロクロ調整されている。器面調整にロクロが使用されているものは表杉ノ入式であるとされている(氏家：1957)。



第20図　出　土　土　器

須恵器（第20図）

器形の種類としては、坏・甕・壺・𤮋の四種類ある。出土量は甕が多く、坏は少ない。全体の形状を知りうるものは坏1点だけである。

第20図5は体部から口縁部にかけてゆるやかに外反しており、底部と体部との境界が丸みをおびている坏である。底部切り離しは回転ヘラ切り技法によっており再調整は施されていない。このような器形および底部切り離し技法を有する坏は岡田茂弘・桑原滋郎両氏によって6・b類と分類されて8世紀末から9世紀にかけての時期に位置づけられている（岡田・桑原：1974）。

第20図6は甕の体部破片で、外面に平行タタキ目、内面に平行アテ目がみとめられる。7は壺の肩部破片であり、外面に平行タタキ目がみとめられる。このほか、小破片のために図示できなかったが、𤮋の注口部が1点出土している。これらの須恵器甕・壺・𤮋については所属時期は不明であるが、出土した土師器の時期や出土量から考えて、おそらく平安時代のものであろうと考えられる。

灰釉陶器（第20図）

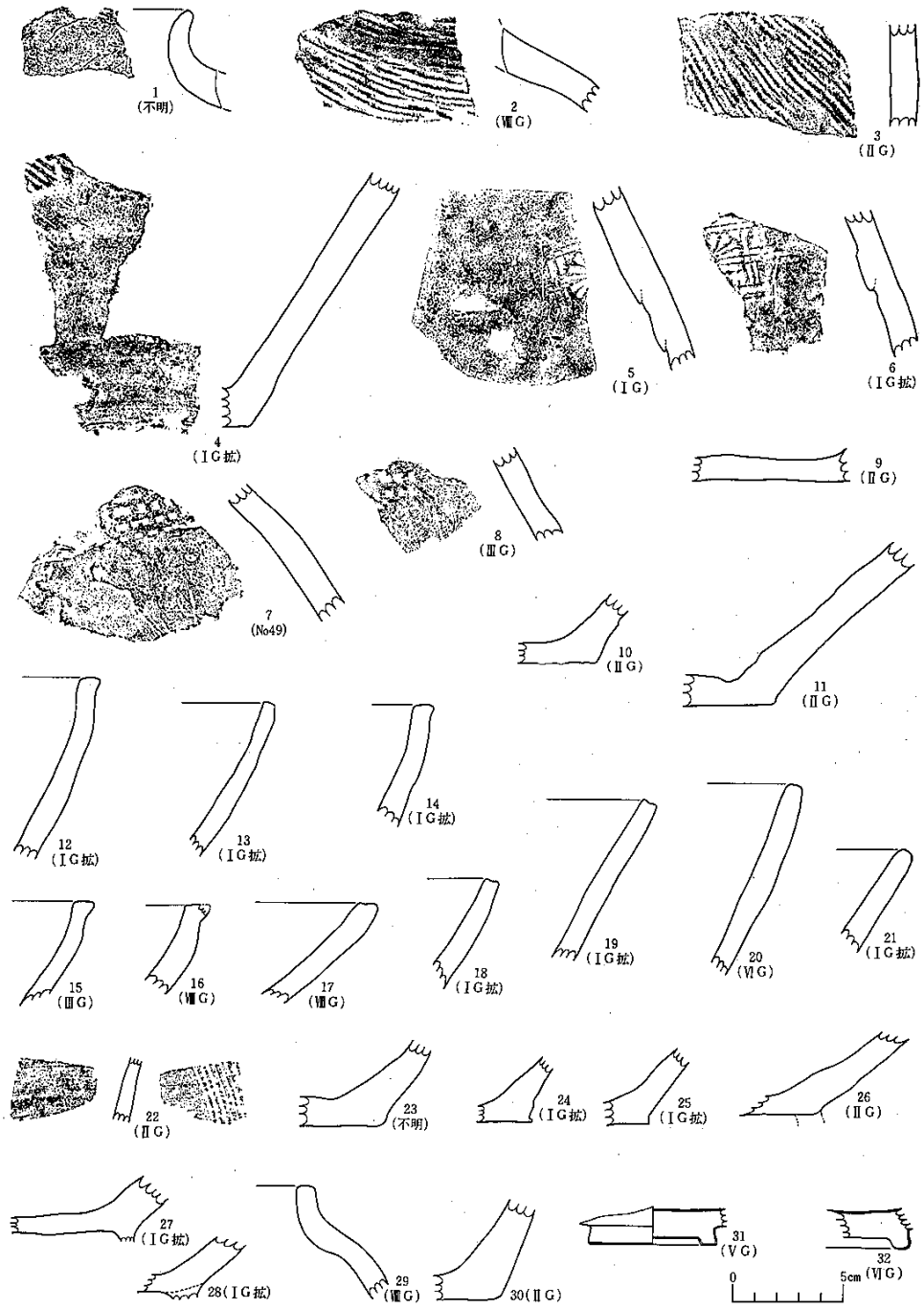
1点だけ出土している。第20図8は碗の底部破片である。削出し高台を有し、高台部と体部との境界外面は回転ヘラケズリされており、高台部内面にはロクロ調整痕がみとめられる。内面全体に黄灰色の釉がかけられているが、外面は2条の釉が上部から流下しているだけである。
時期は小破片あるために不明である。

中世陶器（第21・22図）

出土量は少ない。器形は甕、擂鉢、壺の三種類である。個体数は、甕が口縁部で1点、底部で5点（口縁部破片と同一個体と考えられるものを含む）、擂鉢が口縁部で10点、底部で6点、壺が口縁部と底部で各1点である。口縁部・底部資料についてはすべて拓影もしくは断面図で図示している。

第21図1は甕の口縁部破片である。肩部から丸味をもって大きく外反しながら短い口縁部にいたっている。そのため、肩部から口縁部に直接移行するような感じを与える器形である。調整は内外面とも横ナデである。色調は光沢のある黒灰色を呈し、胎土は砂粒を多く含み小さな気泡が目立つ。2～4は色調・胎土から考えて1と同一個体であると思われる。2は肩部破片で、3は体部破片である。両名とも外面に線状の長い平行タタキ目がみられ、内面はナデ調整されている。4は体部下半から底部にかけての破片である。上部に平行タタキ目がみられる。
体部下半は内外面ともナデ調整が施されている。底部は残っている部分がわずかであるために調整技法は不明である。

第21図5・6は押印の捺されている甕の肩部破片である。押印は簾状文の中央に菊花文のある文様である。両者とも色調は灰色を呈し、器面調整は外面がナデ、内面がナデツケである。


1
(不明)
2
(Ⅶ G)
3
(Ⅱ G)
4
(Ⅰ G拡)
5
(Ⅰ G)
6
(Ⅰ G拡)
7
(No49)
8
(Ⅲ G)
9
(Ⅱ G)
10
(Ⅱ G)
11
(Ⅱ G)
12
(Ⅰ G拡)
13
(Ⅰ G拡)
14
(Ⅰ G拡)
15
(Ⅲ G)
16
(Ⅶ G)
17
(Ⅶ G)
18
(Ⅰ G拡)
19
(Ⅰ G拡)
20
(Ⅵ G)
21
(Ⅰ G拡)
22
(Ⅱ G)
23
(不明)
24
(Ⅰ G拡)
25
(Ⅰ G拡)
26
(Ⅱ G)
27
(Ⅰ G拡)
28(Ⅰ G拡)
29
(Ⅶ G)
30(Ⅱ G)
31
(Ⅴ G)
32
(Ⅵ G)
0
5cm

第21図　出　土　陶　磁　器

第22図　出　土　陶　器

同一の押印であり色調や器面調整が共通することから、両者は同一個体であるとしてあやまりないものと思われる。さらに、第4掘立柱建物跡の柱穴3から出土した甕とも、色調・器面調整・押印が一致することからこれとも同一個体であろうと考えられる。7・8は格子状文の押印がある破片であるが、色調・器面調整・押印から考えて両者は同一個体であると思われる。

このほか、甕の体部破片は50点出土しているが、大半のものは外面ナデ、内面ナデツケ調整が施されている。このうち、暗赤褐色の斑点が内部から噴き出しているようにみえる特色ある破片が1点出土している。

第21図9～11および第22図は甕の底部である。底部外面は器面調整としての特徴的な痕跡がみとめられない。内面は9・11・第22図がナデ、10が体部との境界をオサエののちナデツケている。

第21図12～21は擂鉢の口縁部破片である。12～16は体部から口縁部にかけてやや内弯するが、17～21は直線的に外傾する。12～16は口唇部が平坦であるが、17～19は沈線状の浅い凹みがめぐっている。20・21は口唇部が丸味をおびている。器面調整は、口縁部外面が自然釉のかかっている14を除いてすべて横ナデであり、体部外面は5・12～14にナデ調整がなされている。内面は自然釉のかかっている12を除いてすべて横ナデである。

擂鉢の体部破片は6点出土している。筋目のないものが5点で、筋目のあるものは第21図22の1点だけである。7条以上の筋目を一単位としている。胎土は緻密で精良であり器壁も薄く、筋目のない破片とは異なった特徴を有している。6点ともすべて内面が使用のため摩滅している。

第21図23～28は擂鉢の底部である。いずれも筋目はみとめられない。23～25は平底で、26～28は高台が付いている。26は高台部が剥落しており、また28は高台部の接合痕が観察されることから両者は付け高台であることがわかる。平底のものの底部外面は器面調整としての痕跡が見られない。高台付きの底部は26・28がナデ調整、27がナデとケズリ調整がなされている。内面はすべて使用により摩滅している。

第21図29は壺の口縁部である。頸部が短く直立する短頸壺である。内外面とも頸部は横ナデ、肩部はナデ調整がおこなわれている。口唇部は自然釉がかかっている。

第21図30は底部から体部への立ち上りが急角度であることから壺であろうと考えられる。体部は内外面ともナデが施されており、ススに似た炭化物が両面に付着している。底部外面は特徴的な痕跡がない。

次に、これらの中世陶器の生産地と生産時期について述べる。

口縁部から底部まで同一個体と考えられる甕(第21図1～4)は、光沢のある黒灰色を呈し焼成も堅緻である。この陶器について、藤沼邦彦氏によって福島市毘沙門平窯で生産された燻焼環元炎焼成の須恵器系陶器であるとされており、同窯の年代は平安時代末期から鎌倉時代前半と考えられている。(藤沼：1977)。しかし、地元における編年は不充分であり、また第4掘立柱建物跡出土の中世陶器が鎌倉時代後期から南北朝時代にかけての年代であることから、本例の年代が下る可能性も考えられる。

その他の甕については体部破片や底部破片であるために、生産地・生産時期は不明である。ただし、内部から噴き出るような暗赤褐色の斑点のある破片は白石市東北窯のものと考えられている(藤沼：1976)。

擂鉢は編年が不充分である現在、時期は不明である。ただし、1点だけ筋目のある破片が出土したが、胎土や器形から考えて筋目のないものよりは下るものであろう。

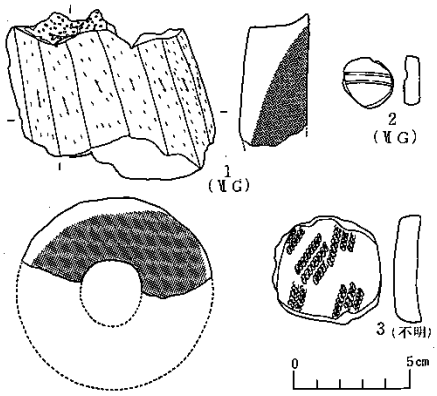
壺は短頭壺であり、その編年も不充分であるために時期は不明である。

青磁(第21図31・32)

高台付き碗の底部が2点出土している。31は内外全面に黄茶色の釉がかかっている。32は高台部内面と底部外面は無釉で、釉のかかっている部分はにぶい黄緑色の色調を呈しており貫入がみとめられる。無釉部分には回転ヘラケズリの調整がみとめられ、削り出し高台であろうと思われる。年代については2点とも破片のために不明であるが中世陶器と同時期の可能性が考えられる。

土製品(第23図)

フイゴの羽口：4点出土している。第23図1は羽口の端部である。残存部分から推定して内径2.6cm、外径8.6cmである。外面はケズリの痕跡がみとめられ、内面は火熱により赤変している。端部は斜めにそがれており、表面には自然釉状の物資が付着している。



第23図　出　土　土　製　品

円板状土製品：2点出土している。いずれも平面形は円形であり、縄文土器の胴部破片を素材としている。周縁は敲打によって加工されており、部分的に研磨もなされている。第23図2には1条の沈線が見られる。3はＬＲ縄文が回転されている。2点とも胎土に繊維の混入はみられない。出土した縄文土器の時期と出土量から考えて、縄文時代中期末葉のものと思われる。

石器・石製品（第24・25図）

ナイフ形石器：1点出土している（第24図1）。石刃を素材としている。先端部がわずかに破損しているが、ほぼ完形である。打面は除去されている。基部の両側縁に主要剥離面側からだけ刃潰し加工がなされ、鋭くとがっている。刃部には使用による刃こぼれと思われる微細な剥離面が部分的に観察される。第3層下部からの出土ではあるが、東京都茂呂遺跡出土のナイフ形石器（杉原・吉田・芹沢：1959）に類似しており、後期旧石器時代に属する可能性がある。

石鏃：3点出土している。第24図2は基部にわずかにえぐりをいれて凹状にしている。側縁は直線的である。尖頭部は欠損している。3はｂ面にまだ主要剥離面を残している。4は尖頭部と基部とを欠損している。側縁は左右非対称である。またａ面の右側縁の二次加工は入念になされているのに対して左側縁は粗い二次加工である。

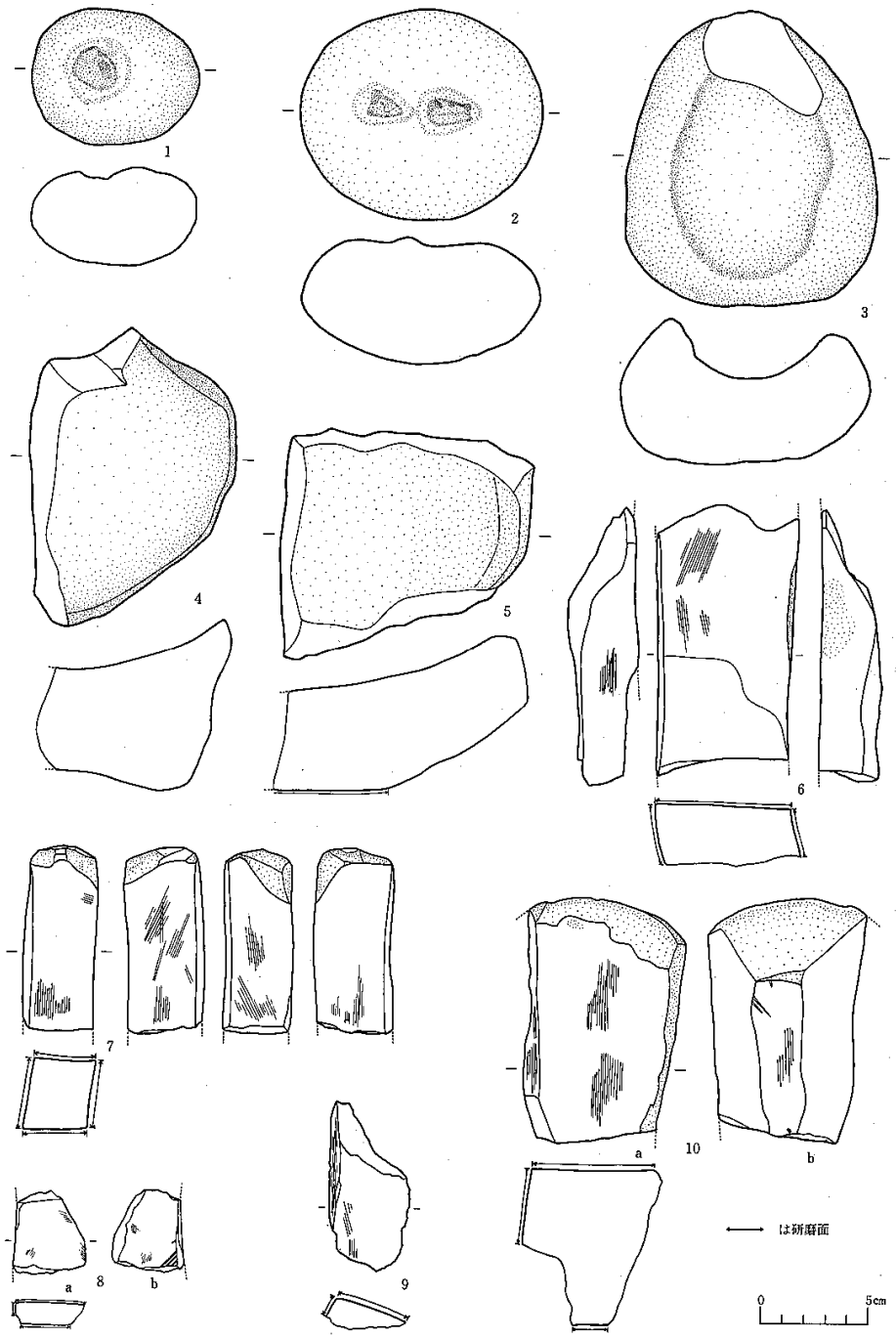
石匙：2点出土している。第24図5は縦型石匙である。ａ面の右側縁と先端部に片面加工の刃部がつくりだされている。6は欠損品であるが、素材となった剥片の全周に丁寧な半両面加工がなされていることから石匙と推定される。

刃部を有する不定形石器：4点出土している。第24図7は縦長の剥片を素材としている。画面の右側縁が片面加工されており、左側縁は使用による刃こぼれか二次加工か不明である微細な剥離が連続している。8は横長の分厚い剥片の末端に両面加工がなされている。9はａ面の側縁先端にわずかに二次加工を施したものである。10は小さな縦長剥片の全周が二次加工されている。

玦状耳飾：完形品が1点出土している（第24図11）。平面形は円形で、断面は分厚く「かまぼこ形」を呈している。石材は滑石片岩であり、乳白色を呈している。全面に丁寧な研磨がなされ光沢がある。表面には不定方向の擦痕が観察されるが、製作時のものか使用時のものか不明である。切り込み部は擦り切り手法によって製作されている。中央孔には製作時のものと思われる方向の擦痕と線状痕が見られる。江坂輝弥氏の編年によれば、縄文時代前期初頭のものは肉厚で断面が円形に近く、前期後半のものは肉薄となり、さらに中期のものは平面形が円盤形をなさず下半部が下方にのびるようになるとされている（江坂：1964）。この編年から考えれば、本遺跡出土のものは前期初頭に属するものと思われる。

垂飾品：1点出土している（第24図12）。欠損品である。平面形は残存部分から考えて円形であろうと思われる。断面形は中央部が薄く周辺部がやや厚い扁平な三角形である。貫通孔が上

第24図　出土石器・石製品



第25図　出　土　石　器

部に偏っている。全体的に摩滅が著しく、製作時や使用時の痕跡がみとめられない。

紡錘車：1点出土している（第24図13）。一部分破損している。断面形は円錐台形であるが、側面はややくびれており底面に近い部分は底面に対してほぼ垂直になっている。上面と底面には擦痕が見られ、側面には研磨の面が残っているも中央孔の断面形は底面近くてやや開くが、中心部では垂直である。中央孔内部には縦方向と横方向の擦痕が観察される。

磨製石斧：完形品が1点出土している（第24図14）。偏平な両刃の石斧である。部分的に擦痕がみとめられる。このうち刃部の擦痕は使用痕と思われる。斧頭部には敲打痕がみとめられる。

凹石：2点出土している。いずれも完形品で、平面形・断面形ともに楕円形である。また、両者とも上面にのみ凹部がみとめられる。第25図1は断面形U字状の凹部が1個あり、2は断面形皿状の凹部が2個ある。製作時や使用時の痕跡は観察されなかった。

石皿：3点出土している。第25図3は一部を破損しているが、平面形は下膨れの楕円形であることがわかる。周縁部の断面形は丸縁で、下面には脚がつかない。4・5は欠損品のため平面形は不明である。4は周縁部の断面形が三角縁で、下面に低い円形の脚が1個みとめられる。
5は周縁部の断面形が平縁であり、下面は無脚であるが安定させるために研磨されている。

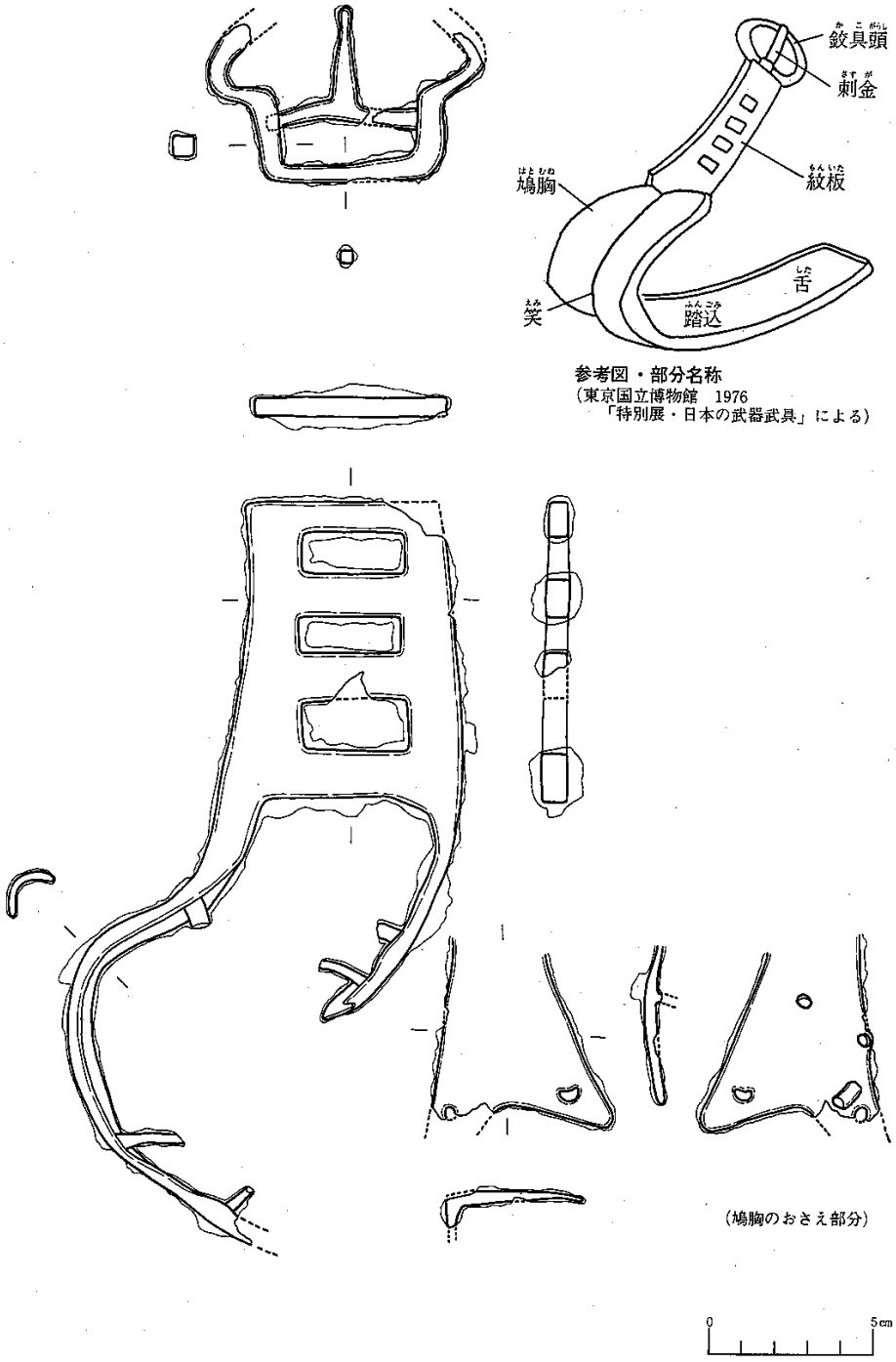
砥石：5点出土している。いずれも欠損品である。第25図6は上面と両側面が使用されている。
7は四角柱形を呈し、4面とも使用されているが、先端部には自然面が残っている。8は板状の扁平な砥石である。3面使用されている。部分的に擦痕がみとめられ、さらに出面には線状痕も残っている。9は小破片のため全体の形状は不明であるが、2面が使用されている。
10は上下両面と一方の側面が使用されているが、もう一方の側面は自然面となっている。b面には擦痕の他に線状痕がみとめられる。

剥片・石核：図示しなかったが、剥片が14点、石核が2点出土している。

これらの石器・石製品の編年的位置づけについては、すでに述べたナイフ形石器と玦状耳飾を除けば伴出土器が不明であるために所属時期を決定することは困難である。ここでは一応縄文時代以降とのみしておく。

鉄製品・鉄滓（第26・27図）

鐙：舌長（したなが）鐙が1点出土している（第26図）。笑（えみ）が中途から欠損しているが、鐙の前面部分はほぼ完形である。銹化が著しいが、脆くなってはいない。長方形の紋板（もんいた）には3個の方形の透しがあり、紋板の両端は笑と鳩胸のおさえ部分に連続している。笑は大きく外弯して踏込（とうごみ）の部分へとのびている。笑の断面はU字状になっている。鳩胸のおさえ部分はやや弯曲しており、先端は扇形に開き中央部でえぐれている。先端の両脇には径約5㎜の貫通孔がある。釘か鋲か不明である断面円形の突出物が、笑と鳩胸のおさえ部分とにそれぞれ3本ずつついている。おそ


鉸具頭
刺金
鳩胸
紋板
舌
笑
踏込
参考図・部分名称
（東京国立博物館　1976
「特別展・日本の武器武具」による）
（鳩胸のおさえ部分）
0
5cm

第26図　出土鉄製品（鐙）

らく鳩胸や舌の部分には刳り抜きの一枚板を使用した鉄芯板張の鐙であろうと考えられる。

なお、鐙の出土した付近から鉸具が1点発見されている。鉸具の幅が紋板の幅とほぼ一致することからも、鐙の鉸具頭（かこがしら）であると考えてよいであろう。皮革や鉄板のようなものを紋板の透しと鉸具とに巻きつけて使用されたものと推測される。この鐙の年代については、東京国立博物館所蔵資料の鎌倉時代とされる鐙の中に紋板の透しがまだ意匠化されていない点で類似したものがある。（東京国立博物館：1976、写真図版7を参照）ことから、これも同時期の鎌倉時代（13世紀）と考えられる。

刀子：1点出土している（第27図1）。刃部の先端を欠損している。両刃であり刃部の断面形がレンズ形であることから、両面とも中央に鎬を有するのかもしれないが銹化のために不明である。刀身は直線的であり、両側の刃関によって茎と区別される。茎の断面形は方形である。
ここでは一応刀子に分類したが、これまで両刃の刀子の報告例はなく、今後の類例の増加を待ちたい。

鎌：1点出土している（第27図2）。刃部の先端と着柄部の一部を欠損している。全体に薄手である。刃部の平面形は着柄部からほぼ直角に曲がっており、内弯刃になっている。刃部には細かい破損が連続しているが、使用による刃こぼれなのか銹化による腐蝕なのかは不明である。

鉄斧：1点出土している（第27図3）。斧頭部を欠損している。平面形はほぼ長方形であるが、刃部の方がやや幅広になっている。刃縁は直刃に近い外弯刃である。側面形をみると、一面が平坦で、もう一面が丸味をもつ片刃である。貫通孔と思われる着柄部が一部分残っており、刃縁に直交していることから「手斧」型の鉄斧であったことがわかる。なお、着柄部に木質のものが付着しているが、柄の一部であるかどうかは不明である。

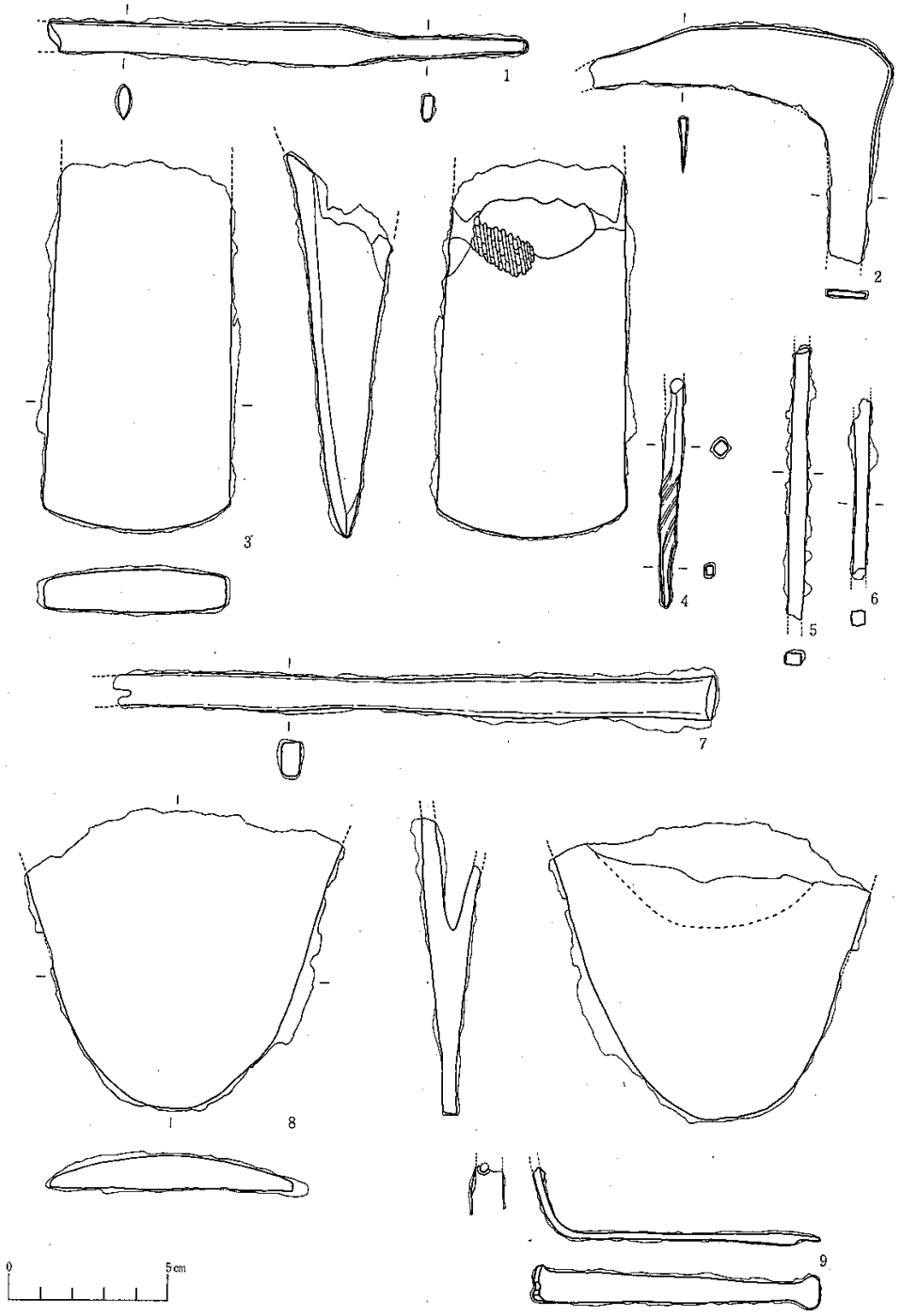
錐：1点出土している（第27図4）。着柄部を欠損している。断面形は正方形であり、先端部と基部とでは45°捻れている。先端部と基部の約3cmの間を4本の稜が螺旋状に8分の7周している。先端部は丸味をおびており、使用による摩滅のためと思われる。

不明鉄製品：第27図5・6は両端を欠損する棒状鉄製品である。いずれも断面形が方形であり、角釘であろうと思われる。

第27図7は一端を欠損する太い棒状の鉄製品である。残存している端部は円形の平坦面をなしており、断面形は方形である。用途は不明である。

第27図9は平面形が半截された楕円形である。側面形はａ面がふくらんでいるのに対してｂ面は平坦である。内部は袋状になっている。鋤先かもしれないが、刃部の弯曲が急であることと刃先が鋭利でないことから、鋤先の可能性は少ない。

第27図9は中途から直角に近い角度で折れ曲がった細長い鉄製品である。先端は平たい三角



第27図　出　土　鉄　製　品

形で厚さもそこだけ薄くなっている。欠損部分には径3㎜の貫通孔が1個ある。用途は不明である。

この他に鉄製品の破片が数点あるが、いずれも小破片で銹化が著しいために図化できなかった。

鉄滓：26点出土している。

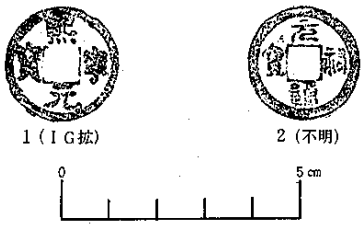
これらの鉄製品・鉄滓の年代については、鐙を除いて不明である。出土した土器の種類と出土量から考えて平安時代以降であると思われる。

古銭(第28図)

25枚出土している。第28図1は「熙寧天宝」(初鋳年1068年)で、2は「元祐通宝」(1086年)である。この他に銭名を判読できたものには、「至道元宝」(995年)、「祥符通宝」(1008年)、「天聖元宝」(1023年)、「皇宋通宝」(1039年)、「至和元宝」(1054年)、「嘉祐天宝」(1056年)、「元豊通宝」(1078年)があり、すべて北宋銭である。おそらく中世陶器に伴うものであろう。また、「寛永通宝」(1636年)が1枚出土している。

人骨

ⅣGから火葬人骨の小破片が出土している。径約1.2mの範囲に焼土が分布しており、その中から発見された。しかし、土壙などの遺構は発見されなかった。なお、人骨については「(附)持長地遺跡出土の人骨について」において詳述する。



第28図　出　土　古　銭

3. 考　　察

(1) 遺構の年代

掘立柱建物跡

6棟確認されたが、そのうち遺物が出土したのは第4掘立柱建物跡だけである。中世陶器の甕が柱穴に落ち込むような状況で出土していることから、第4掘立柱建物跡が廃絶された後の遺物である。しかし、柱穴が完全に埋まりきらないうちに落ち込んだ遺物であるので、掘立柱建物使用期間の下1眼に近接する時期であると考えられる。すでに述べたように、出土した中世陶器は年代を13世紀末から14世紀中葉に求めることができる。このことから、第4掘立柱建物跡の年代は13世紀後半から14世紀前半頃であると考えてよいであろう。第1・2・3・5・6掘立柱建物跡は出土遺物がない。しかし、柱穴の検出面が第4掘立柱建物跡と同じく第3層上面であり、また柱穴掘り方の平面形や柱間寸法が6棟とも近似しているので、第4掘立柱建物跡とほぼ同年代であろうと考えられる。なお、第2・3・4・5・6掘立柱建物跡の重複関係と第4掘立柱建物跡の建て替えから、少なくとも四期に分けることができる。

組み合わないピット群

ピット群から出土した遺物としては、縄文土器、土師器、石鏃、刀子、鑿、鉄鈴、植物遺存体であるが、年代を直接に示す遺物はない。しかし、多くのピットが第3層上面で検出されており、掘立柱建物跡の柱穴と平面形が類似している。このことから、ピット群の多くは掘立柱建物跡とほぼ同年代のものであろうと思われる。

土壙

3基発見されたが、いずれも出土遺物はなく年代は不明である。このうち、第1・2土壙は平面形が細長い溝状であり、壙底が深く壁が垂直に立ち上がるという共通する特徴を有している。このような特徴の土壙は、「Ｔピット」（千代：1974）とか「溝状土壙」（岩手県教委：1979）と呼ばれ、その性格については「陥穴」が想定されている（霧ヶ丘遺跡調査団：1973）。宮城県内では、本遺跡のほかに亘理町宮前遺跡（宮城県教委：1975）、志波姫町宇南遺跡（宮城県教委：1979）で発見されているが、いずれの例も「陥穴」とする根拠は見当たらない。本遺跡の場合も同様であり、ここでは性格不明としておく。

(2) 遺跡の性格

中世の掘立柱建物跡が6棟確認された本遺跡の性格について、調査によって明らかになった事実をまとめながら考察してみたい。

① 遺跡は河岸段丘上の東西約80m、南北約100mの狭い平坦面に立地しており、松川流域の沖積地面との比高は約20mである。地表からの観察では調査区外の路線敷の東約10mのところに高さ約1.5m、長さ約100mの南北にのびる土塁状のたかまりがみとめられた。これが

調査区を中心とする一帯を囲んでいた証拠はなく、また空堀などの施設はみとめられなかった(註)。

宮城県内の一般的な城館跡は、自然の地形に守られたもの以外は土塁や空堀・水堀などの施設をもつのが普通であり、軍事的・防禦的性格が強いとされている(紫桃：1972他)。本遺跡は立地条件や堀・土塁などの施設がないことから、城館跡と比較してきわめて防禦性が弱いといえよう。この点で本遺跡は城館跡とは考えにくい。

② 6棟の掘立柱建物跡が確認されたのは調査区内でも約25m四方の範囲に集中しており、建物跡の重複がみとめられる。掘立柱建物跡には廂を有するものが多く、四面廂のもの(第1掘立柱建物跡)もある。掘立柱建物跡の年代は出土した陶器から考えて13世紀後半から14世紀前半頃である。

掘立柱建物跡が一定範囲に集中して確認されたことは、土地の使われ方が一定しており、そのために同一の場所に何度も建て替えがなされたことをうかがわせるものである。建物群が一定範囲に限られるというような様相は、広い範囲に掘立柱建物跡や井戸・土壙などがみとめられ集落跡と考えられている高清水町観音沢遺跡(宮城県教委：1977ａ、1978ｂ)や秋田市下夕野遺跡(秋田城跡発掘調査事務所：1979)とは異なっており、むしろ屋敷地であったろうと考えられる。たとえば、本遺跡よりも時期は下るが、中世末の堀の内として代表的な山形県犬川村の平家の古絵図によると、水堀と土塁によって方形に囲まれた屋敷地内に母屋・馬屋・蔵などが整然と配置されていた様子がわかる(長井：1952)。このことから、今回の調査は建物群のあった地域のみを発掘したのであり、廂のつく掘立柱建物跡が多いことからこれを屋敷地の母屋付近と想定してもよいであろう。

③ 出土遺物は陶磁器・鉄製品などである。陶磁器には甕・擂鉢・壺の日常雑器のほかに、2点ではあるが青磁が含まれている。また、鉄製品には鐙・鈴の特殊な遺物がある。

青磁については、藤沼邦彦氏の集成した宮城県中世陶磁器出土地名表（藤沼：1977）によれば、青磁を出土している遺跡は本遺跡も含めて85遺跡中19遺跡(約22％)であり少ないといえる。また、楢崎彰一氏は「古瀬戸は中国陶磁を満足に入手し得なかった東日本の上層階級を主要な需給対象としているのである」と述べており(楢崎：1977)、この見解にしたがえば本遺跡の青磁所有者は一般農民ではなく上層の人間であったろうと思われる。

鐙については、「絵巻物による日本常民生活絵引」(渋沢：1965他)によると中世の鐙には舌長鐙と輪鐙の二種類あったことがわかる。さらに、同書で見るかぎり、舌長鐙の使用は武士に多く、輪鐙は一般に庶民が使用していたことがわかる。

このようなことから、本遺跡には武士階層が生活していた可能性が考えられる。これは、四面廂の掘立柱建物跡があることからも暗示される。四面廂の掘立柱建物跡は宮城県内では

本遺跡の他に大衡村駒場小屋館（宮城県教委：1975ｂ）と志波姫町字南遺跡（遊佐：1980）とで確認されており、宇南遺跡については館跡の可能性が指摘されている（宮城県教委：1979）からである。

以上の三点から結論を出すとするならば、中世の本遺跡は13世紀後半から14世紀前半頃の屋敷地でありその居住者は武士階層であったと考えられる。

最後に周辺の遺跡との関連についてふれる。問題になるのは本遺跡西側の丘陵突端項部にある山家館跡である。直線距離にして約600ｍの至近距離にあることから、本遺跡と何らかの有機的な関連をもっていたことも想定される。このように仮定した場合、本遺跡が日常的の場であり、山家館跡が軍事活動の場であったことも考えられる。しかし、発掘調査が行われていないので年代が不明であり、ここでは山家館跡と関係があったかもしれないという可能性を指摘しておくにとどめる。

註：仙南仙塩広域水道の送水管埋設に伴って、昭和54年9・10月に欠遺跡と持長地遺跡を宮城県文化財保護課が調査担当者となって事前調査を行なった。東北自助車道の東側に隣接する部分を自動車道とほぼ平行に幅6ｍで長さ300ｍにわたって発掘調査した。この発掘調査でも堀や土塁などの遺構は確認されなかった。なお、調査の成果については近く正式報告書として公刊される予定である。

持長地遺跡出土石器・石製品計測表

（　）は欠損品

図面番号	種別	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	地区	備考
第16図－1	石鏃	(38)		(4.0)	(1.0)	珪質頁岩	Ⅳ G	
第24図－1	ナイフ形石器	45	18	5	5	珪質頁岩	Ⅷ G	
－2	石鏃	(38)	(13)	(4.0)	(1.5)	珪質頁岩	Ⅰ G	
－3	石鏃	25	14	(4.0)	(1.1)	珪質頁岩	Ⅰ G	
－4	石鏃	(20)	(13)	(5.0)	(0.4)	珪質頁岩	Ⅱ G	
－5	石匙	45	15	7	4.6	珪質頁岩	Ⅱ G	
－6	石匙	(22)	(50)	(7)	(7.3)	珪質頁岩	Ⅴ G	
－7	不定形石器	44	26	9	8	珪質頁岩	Ⅴ G	
－8	不定形石器	34	56	10	16	珪質頁岩	ⅩⅠ G	
－9	不定形石器	20	38	10	8	玉ずい	Ⅶ G	
－10	不定形石器	28	11	4.2	0.7	珪質頁岩	表採	
－11	玦状耳飾	36	36	12	20.8	滑石片岩	Ⅵ G	中央孔径11.5mm
－12	垂飾品	(48)	(30)	(10)	(9)	石英安山岩質凝灰岩	Ⅷ G	
－13	紡錘車	40	40	15	33	緑泥片岩	Ⅰ G	中央孔径 5.9mm
－14	磨製石斧	85	49	18	108	細粒凝灰岩	不明	
第25図－1	凹石	76	64	44	260	安山岩	ⅠG拡	
－2	凹石	111	98	58	750	安山岩	Ⅴ G	
－3	石皿	(134)	(119)	(66)		安山岩	表採	
－4	石皿	(96)	(140)	(50)	(540)	安山岩	Ⅲ G	
－5	石皿	(118)	(104)	(91)	(570)	安山岩	Ⅵ G	
－6	砥石	(130)	(68)	(26)	(310)	シルト岩	ⅠG拡	
－7	砥石	(87)	(31)	(35)	(166)	石英安山岩質凝灰岩	Ⅲ G	
－8	砥石	(37)	(34)	(12)	(18)	細粒凝灰岩	不明	
－9	砥石	(78)	(34)	(18)	(39)	細粒凝灰岩	Ⅷ G	
－10	砥石	(112)	(75)	(79)	(730)	砂岩	ⅠG拡	

持長地遺跡出土鉄製品計測表

（　）は欠損品

図版番号	種別	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	地区	備考
第16図－2	刀子	158	15		Ⅰ G	刀身棟厚2mm　茎厚5mm
－3	鑿	110	28		不明	
－4	鉄鈴	38	32		Ⅳ G	透し穴長31mm
－5	鉄鈴	(34)	(35)		Ⅷ G	
第26図	舌長鐙	(268)			Ⅰ G	紋板幅73mm　笑幅19mm　鉸具幅85mm
第27図－1	刀子	(151)	(14)	(6)	Ⅰ G	
－2	鎌	(74)	(95)		Ⅹ G	
－3	鉄斧	(121)	(59)	(34)	ⅠG拡	
－4	錐	(67)		(7)	不明	
－5	不明鉄製品	(87)		(7)	Ⅲ G	
－6	不明鉄製品	(57)		(4)	不明	
－7	不明鉄製品	(189)	(20)	(13)	不明	
－8	不明鉄製品	(94)	(99)	(22)	Ⅰ G	
－9	不明鉄製品	(106)	(10)	(4)	ⅠG拡	

Ⅳ. ま　と　め

1. 欠遺跡・持長地遺跡は松川によって形成された河岸段丘上に立地している。
2. 欠遺跡からは遺構として平安時代以降の溝とピットが検出された。遺物としては縄文土器（前・中期）、弥生土器、土師器、須恵器（平安時代）、石器が出土した。
3. 持長地遺跡からは遺構として中世の掘立柱建物跡6棟、ピット群と時期不明の土壙3基が検出された。遺物としては縄文土器(早・前・中・後期)、弥生土器、土師器(古墳時代前期・平安時代)、須恵器(平安時代)、灰釉陶器、中世陶器、青磁、土製品、石器・石製品、鉄製品･鉄滓、古銭、人骨、植物遺存体が出土した。時期は旧石器時代から中世までの各時期にわたる。
4. 中世の持長地遺跡は遺構のあり方や遺物の性格から考えて武士階層の屋敷地であったろうと推定され、その年代は13世紀後半から14世紀前半頃である。

〈引用・参考文献〉　（五十音順）

赤羽一郎：1977「常滑」『世界陶磁全集』第3巻
秋田城跡発掘調査事務所：1979　『下タ野遺跡発掘調査報告書』
伊東信雄：1940『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』東北帝国大学法文学部奥羽史料調査部研究報告第二
1957　「古代史」『宮城県史』第1巻
岩手県教育委員会：1979『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」岩手県文化財調査報告書第31集
民家和典：1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
江坂輝弥：1964　「装身具」『日本原始美術』第2巻
岡田茂弘・桑原滋郎：1974　「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要』Ⅰ
加藤　孝：1951「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大学研究論集』Ⅰ
興野義一：1968「大木式土器理解のために（Ⅱ）」『考古学ジャーナル』No. 16
霧ヶ丘遺跡調査団：1973　『霧ヶ丘』
後藤勝彦：1970「持長地遺跡調査概報」『東北自動車道関係遺跡調査概報』宮城県文化財調査報告書第23集
紫桃正隆：1972他『仙台領内古城・館』第1～4巻
渋沢敬三：1965他『絵巻物による日本常民生活絵引』第1～5巻
白鳥良一：1971ａ「欠遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査概報」宮城県文化財調査報告書24集
1971ｂ「持長地遺跡」『東北自動車道関係遺跡発掘調査概報』宮城県文化財調査報告書第24集
1974　「仙台市三神峰遺跡の調査」『東北の考古・歴史論集』
白石市：1976『白石市史』別巻　（考古資料篇）
杉原荘介・吉田格・芹沢長介：1959「東京都茂呂における関東ローム層中の石器文化」「験台史学」第9号
千代　肇：1974『西桔梗』
東京国立博物館：1976『日本の武器武具』
長井政太郎：1952　「散村の発達」『山形大学紀要(人文科学)』第2巻第1号
楢崎彰一：1977　「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集』第3巻
林　謙作：1965　「東北」『日本の考古学』第2巻
藤沼邦彦：1976　「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」『東北歴史資料館研究紀要』第2巻
1977　「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要』第3巻
宮城県教育委員会：1973　『菅生田遺跡調査概報』宮城県文化財調査報告書第29集
1975ａ『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第38集
1975ｂ「駒場小屋館跡」『宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)』宮城県文化財調査報告書第40集
1976ａ　『宮城県遺跡地名表』宮城県文化財調査報告書第46集

宮城県教育委員会：1976b　『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第47集

1977a　「観音沢遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和51年度分）』宮城県文化財調査報告書第8集

1977 b　『亀岡遺跡・金山貝塚』宮城県鳴瀬町文化財調査報告第1集

1978 a　『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ（上深沢遺跡）』宮城県文化財調査報告書第52集

1978 b　「観音沢遺跡（第2次調査）」『宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）』宮城県文化財調査報告書第53集

1979　『宇南遺跡』宮城県文化財調査報告書第59集

宮城県塩釜女子高等学校社会部：1969　「宮城県桃生郡矢本町平田原貝塚発掘調査報告」『貝輪』第5号

山内清男：1979　『日本先史土器の縄紋』

遊佐五郎：1980　「宇南遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

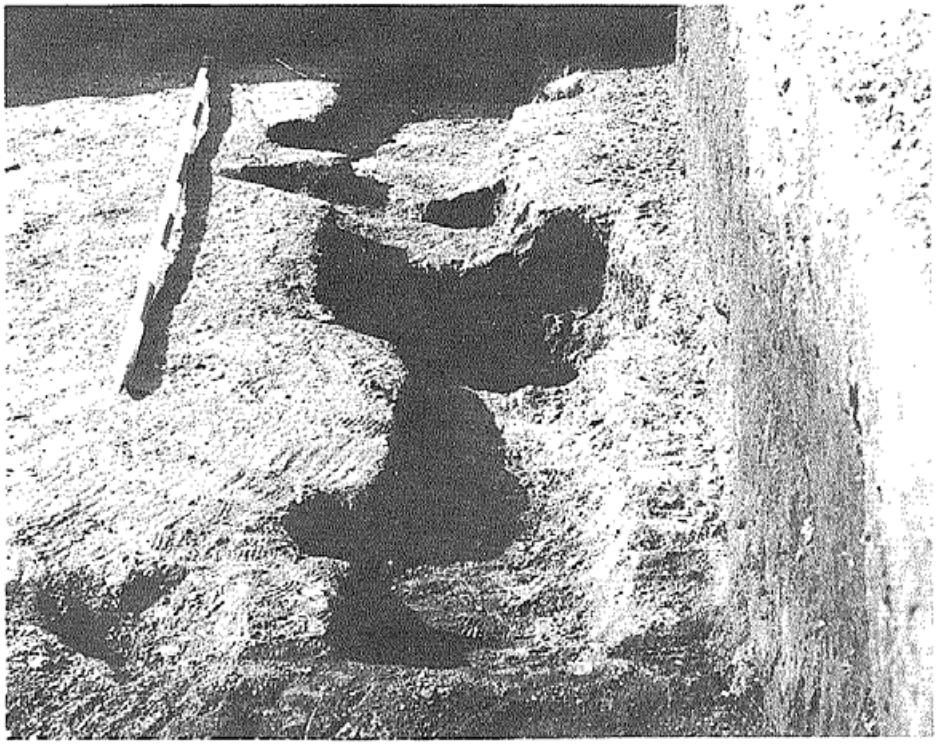
土器破片集計表①（図示遺物を除く）

種別	器形	胎土	部位	文様表現技法	地文		欠遺跡 C1 1/2	C1 3	E1 2	G1 1/2	G1 2	G1 溝	H1 1/2	H1 1	H2 1/2	I1 溝	K1 1/2	M1 1/2	P1 1/2	R1 1/2	T1 1/3	表採	計	持越遺跡 IG	IIG 拡	IIIG	IVG	VG	VIG	VIIG	VIIIG	IXG	XG	XIG	XIIG	地点不明	計
縄文土器	深鉢	繊維混入有	口縁部		斜	RL							1	1									2					1								1	2
					羽	RL・LR				1												1	2														
					爪	L											1		3				4														
					糸	木目状（不明）						1											1														
					文	不明						1			1								2														
				ミガキ						2													2														
				沈線文						1				1		1	1					1	6														
				〃	撚	L												1					1														
			胴部		斜	L							1										1														
					行	RL		2			1		2		2		1			3	1	2	14		2			1				1			1		2	7
					縄	LR		1					2							1		1	5					1										1
					文	LRL							1										1															
						不明		1	2	7	4		10			1	4			1	2	3	35													1	1
					羽	RL・LR	1			4		1			2		1	1				1	11	1			1		1								3
					状	LRL・RLR									1								1														
					撚糸文	R			1	1	2		2										6														
						L		1		7	1	1		1	9	1	3	2	1		1	4	32														
						瓦状L		1		2		1								2	1	1	8														
						網目状L		1	1	1							1						4														
						木目状R					1												1														
						不明		1		1	1	1	1		3					1		1	10														
						櫛目状沈線文					1		1		1						1		4														
				ミガキ				1	1	6	1	3	2		4		2					4	24											1			1
				沈線文					1	2	1	1		4		1				1	1	6	18														
				押引き沈線文											1							1	2														
		繊維	口縁部		斜	RL																												1			1
					行	LR																			2					1		2		1			6
					縄	RLR																						1									1
					文	不明																			1												1
				ミガキ																				9	3		3		1	7	5	6	1	1	3	1	2	42
				〃		条線文																												1			1
				沈線文																				4	1					2		1					8
				〃	斜	RL																					1				1						2
				隆沈文																				2							1						3
				〃	斜	LR																			1	1											2
				〃	行	不明																												1	1		2
				磨消縄文	斜	RL																		1													1
				〃		LR																		1	1									1		1	4
				〃	行	不明																			1									1			2
		繊維混入無	胴部		斜	R											1						1														
					行	L																			1					1		1		2			5
					縄	RL				1					1								2		11	19	4	1		6	1	8	1	1	5	1	2	60
					文	LR				1												1	2	29	22	1	5			10	11	5	1	5	10	1	5	105
						RLR																				1	1	1		4					2		1	10
						LRL																			1	1				1	2							5
						不明																		1	5	17	3	1	3	11	8	7	1	2	6		6	71
					撚糸文	ｦ														1			1														
						ノ																				1					1						2
						R																		1		1				3	1			1	1			8
						L																															
						櫛目状沈線文																			1					1			1		1			4
						条線文																					3			3			1				7
				ミガキ											1								1	1	15	23	6			17	14	11	2	8	13	4	3	117
				沈線文																					7	16	1			6	9	3	3	3	8	2	3	61
				〃	斜	L																				1									1			2
				〃	行	RL																			1	2				1		1		1	2			8
				〃	縄	LR																				4	1			1	3	2	1	1	3		3	19
				〃	文	RLR																					1				1							2
				〃		LRL																			1					1								2
				〃		不明																		1	1	4	2	1		1		2			4		2	18
				〃		櫛目状沈線文																		1														1
				沈線文＋刺突文	斜	RL																							1		1							2
				隆沈文																						7				1	2	2			1		1	14
				〃	斜	RL																			1								1					2
				〃	行	LR																				1						2						3
				〃	縄	RLR																			1													1
				〃	文	LRL																															
				〃		不明																				1					1				1			3
				〃		刺突文																														1		1
				磨消縄文	斜	L																				1								1				2
				〃	行	RL																		1	3	5	2		1	3	4	3	2	2		1	1	28
				〃	縄	LR																			4	17	2	1	1	5	7	7			10	1	3	58
				〃	文	RLR																				1				2					1			4
				〃		LRL																									1							1
				〃		不明																				2	2			4	1				3	1	3	16
			不明																						9	6	2			3	6	3		1	1	1		32
			底	ミガキ																				1	4	6			4	3	2	1		1	6			28
弥生土器	壺	繊維混入	口	ミガキ						1													1		1													1
			口	ミガキ						1													1															
			体	沈線文						6													6															
	甕		体部		斜	L R				5													5															
					附	LR＋R				11													11															
					加	不明＋R				7													7															
				ミガキ						2													2															

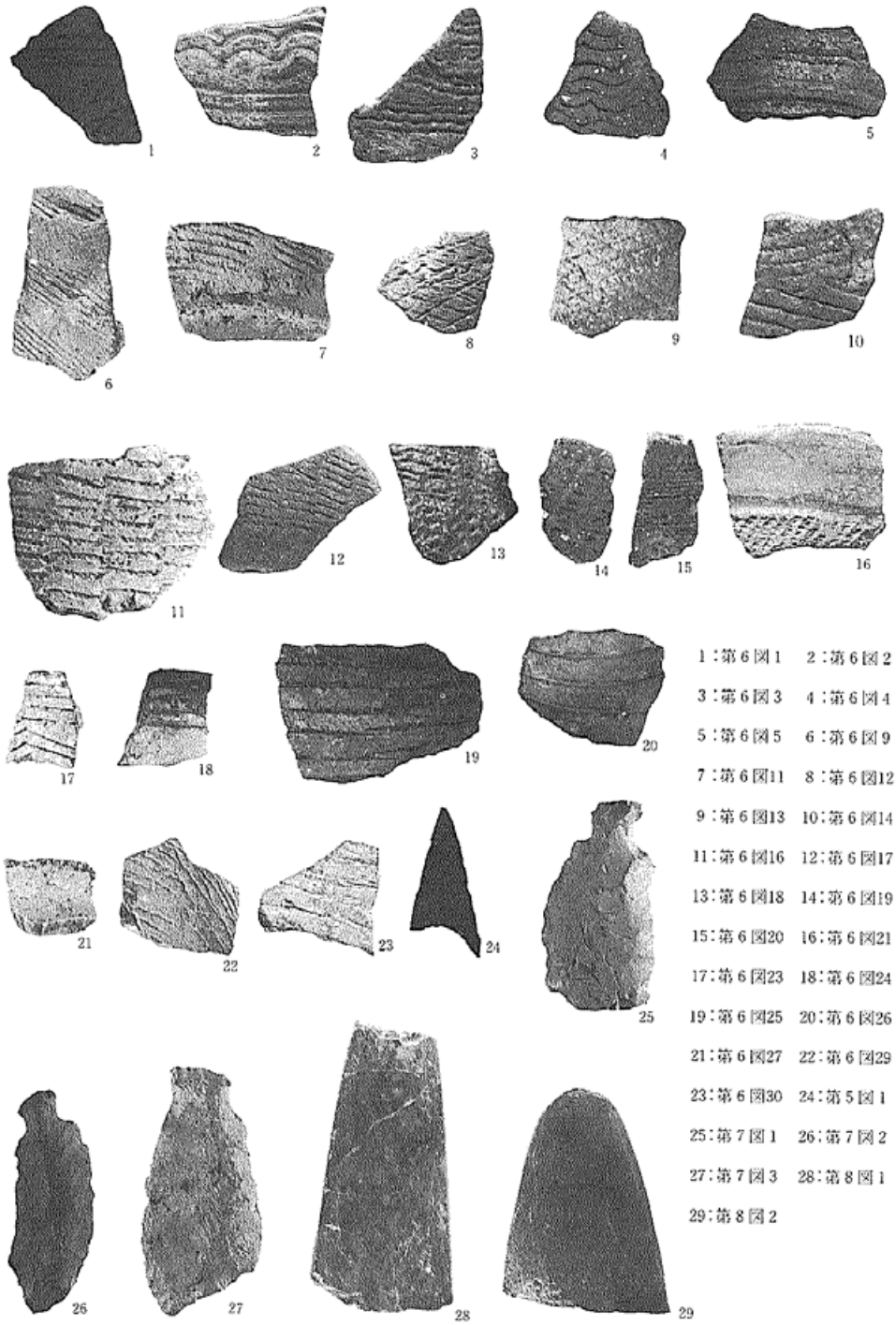
土器破片集計表②（図示遺物は除く）

種別	器形	部位	器面調整技法等 外面－内面	欠遺跡 C1 1～2	C1 3	E1 2	G1 1～2	G1 2	G1 溝	H1 1～2	H2 1～2	I1 1～2	I1 溝	K1 1～2	M1 1～2	P1 1～2	R1 1～2	T1 1～3	表採	計	持長地遺跡 64	I	II	I拡	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	地点不明	表採	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ－ミガキ																				1														1
			〃－ミガキ（黒）																			1	1									1					3
			ロクロ－ミガキ	1						2			1			1				5																	
			〃－ミガキ（黒）				7	2		1			1		1				2	14				6				1		1		1		1		2	12
			不明－ミガキ（黒）										1							1																	
		体部	ケズリ－ミガキ					2												2																	
			〃－ミガキ（黒）				2	2	2	1		2	2						2	13				2				3					1				6
			ロクロ－ミガキ																2	2																	
			〃－ミガキ（黒）			1	1	4					3		2			1	2	14		1	1	3	4		4	3	2			2	1	1			22
			〃－不明				1													1																	
			不明－ミガキ					1	1										1	3									1								1
			〃－ミガキ（黒）	1			4	2	1			1		1		2			5	17				1			1	1	1				1	2		1	8
			〃－不明				1													1				3			1		1		1		1		1	8
		底部	手持ヘラケズリ－ミガキ（黒）								1			1						2										1				1		2	4
			回転ヘラケズリ－ミガキ（黒）													1			2	3										1							1
			回転糸切り－ミガキ（黒）	2			4	1	1			1							1	12				3				2			1	1		1			8
			不明－ミガキ（黒）				2													2			2						1						1	1	5
			〃－不明						1											1				2													2
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ																				1						1								2
			不明－不明											1						1																	
		体部	ケズリ－ミガキ																					3				1									4
			〃－ナデ	1	1		3	1	1	4						1	3			15				1													1
			〃－ヘラナデ					4												4																	
			〃－刷毛目	1																1																	
			〃－ロクロ	1		1	5	7	1	1			1	1		1				19				3													3
			〃－不明				1	1	1	1					2			1		7																	
			刷毛目－ナデ													2				2									1								1
			〃－刷毛目					3			1							1		5								1		1							2
			〃－不明				1													1			1														1
			ロクロ－ナデ				1			1										2																	
			〃－刷毛目															1		1									1								1
			〃－ロクロ	1			2	3		2	3		2		3		1	1	1	19			1	4	1			1	2	3		1				1	14
			〃－不明					1					1			1				3																	
			不明－ミガキ															1		1			1														1
			〃－ナデ					1		1									1	3				1													1
			〃－刷毛目					1											1	2																	
			〃－ロクロ				1													1				1													1
			〃－不明				5	1	1	4	1	1			2	1			2	18			1	1	2				1						1	6
		底部	手持ヘラケズリ					1							1					2																	
			回転糸切り													1				1																	
			不明					1												1		1								1				1			3
須恵器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ				1	2		3		1								7			2	1	1	1	2		1			1	1				10
			〃－不明																				1														1
		体部	ロクロ－ロクロ				1	2			1									4							1		1			1				2	5
			不明－不明																								1										1
		底部	手持ヘラケズリ																			1		4													5
			回転糸切り					1												1	1				1				1	1			2			1	7
		口	ロクロ－ロクロ											2				1		3				1		1											2
	甕	体部	平行タタキ目－アテ目（平行）																				2		1		1										4
			〃－ナデ																				1	1				1									3
			〃－オサエ																				1	1						1							3
			〃－ロクロ																1	1			2							1	1		1				5
			格子状タタキ目－ナデ																											1	1						2
			回転ヘラケズリ－ロクロ					1		1										2				1													1
			手持ヘラケズリ－ナデ												1				1	2																	
			〃－ロクロ					1		1		1		1						4																	
			ロクロ－ナデ												1					1					1										1		2
			〃－ロクロ		1		1	1							1	1				5			2	2	2		1	1	2	3						1	14
			不明－アテ目（平行）																										1								1
	鉢	口縁部	ロクロ－ロクロ															1		1	1												1				2
		体部	平行タタキ－ナデ																															1			1
			回転ヘラケズリ－ロクロ																			1		1							1						3
			ロクロ－オサエ																										1								1
			〃－ロクロ																1	1							1								1		2
	瓶	体部	ロクロ－ロクロ																					1													1
中世陶器	甕	体部	ナデ－ナデ ツケ																			2	5	4	4	3	3	5	3	1					3		33
			〃－オサエ																											1							1
			〃－無調整																				1		1			1									3
			〃－不明																									1	1								2
			自然釉－オサエ																											1							1
			〃－ナデ ツケ																				1	1			1		1	1		1			1		7
			〃－無調整																					1													1
			無調整－ナデ																					1													1
	擂鉢	体部	ナデ－使用痕																						1			1			1						3
			ケズリ－〃																								1										1
			無調整－〃																				1														1
合計				8	2	2	44	47	10	25	7	7	12	7	14	12	4	8	25	234	2	7	29	54	19	5	18	23	24	19	5	10	8	9	7	13	282

写　真　図　版

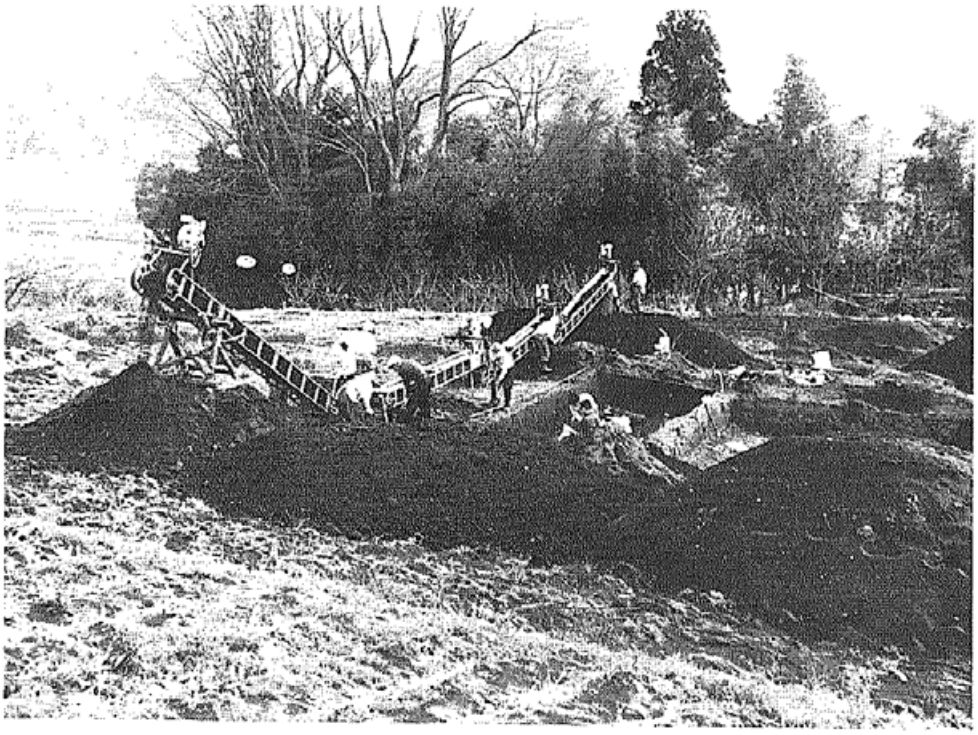


図版１　欠遺跡　上：遺跡全景
下：溝およびピット

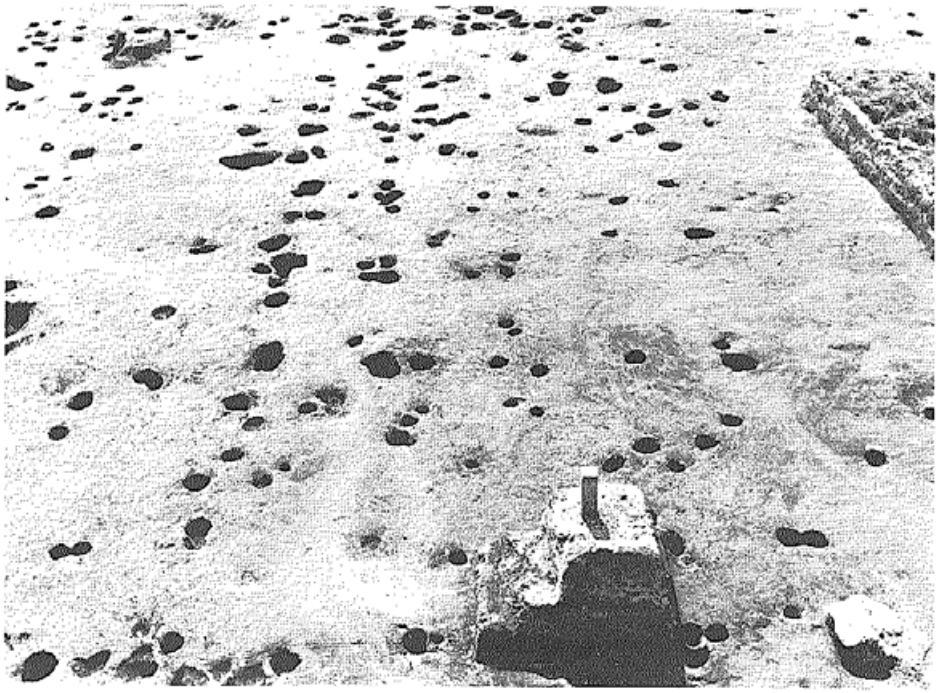


1：第6図1　2：第6図2
3：第6図3　4：第6図4
5：第6図5　6：第6図9
7：第6図11　8：第6図12
9：第6図13　10：第6図14
11：第6図16　12：第6図17
13：第6図18　14：第6図19
15：第6図20　16：第6図21
17：第6図23　18：第6図24
19：第6図25　20：第6図26
21：第6図27　22：第6図29
23：第6図30　24：第5図1
25：第7図1　26：第7図2
27：第7図3　28：第8図1
29：第8図2

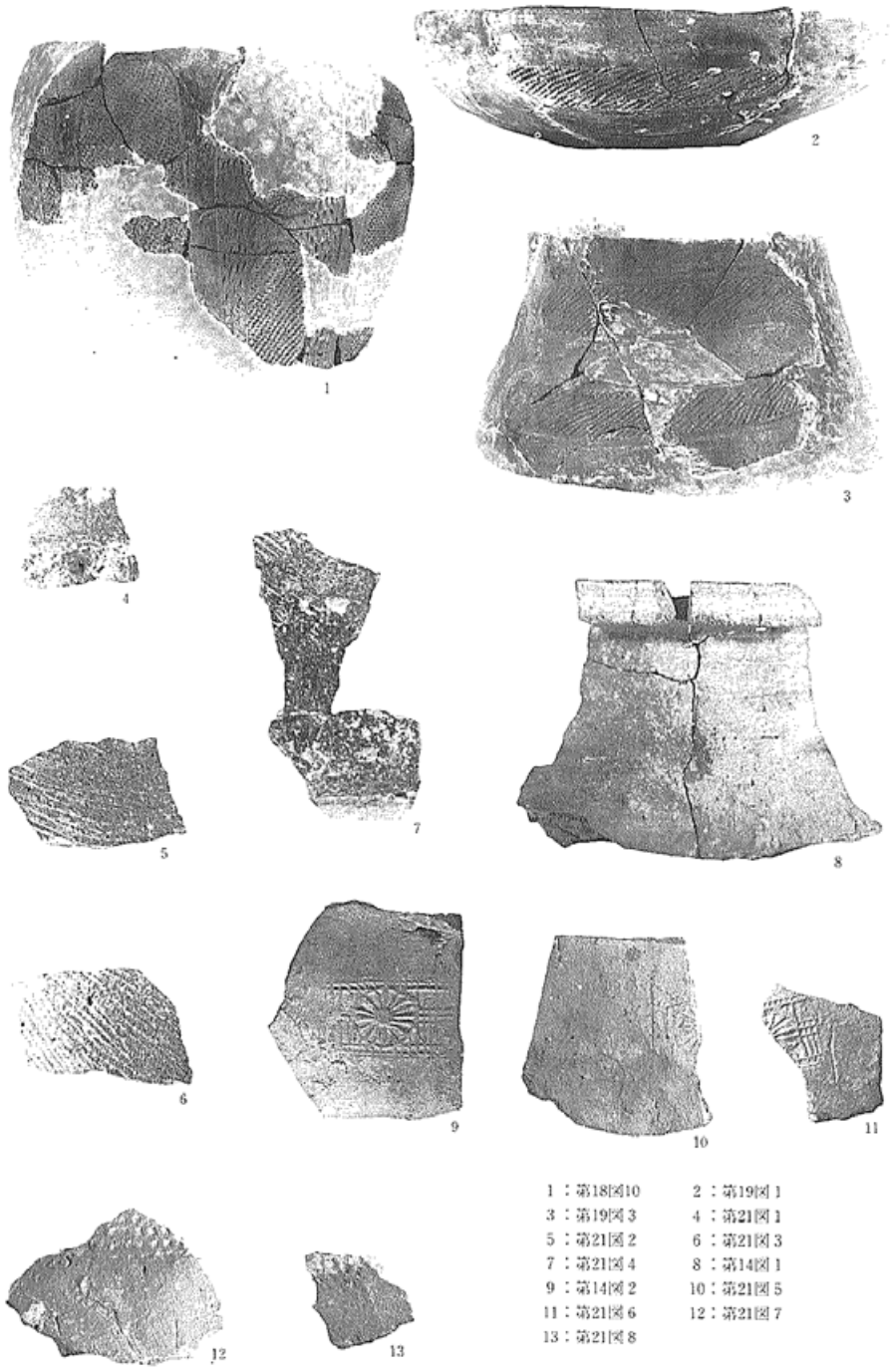
図版2　出土遺物（欠遺跡）



図版３　持長地遺跡　上：遺跡遠景　下：発掘風景

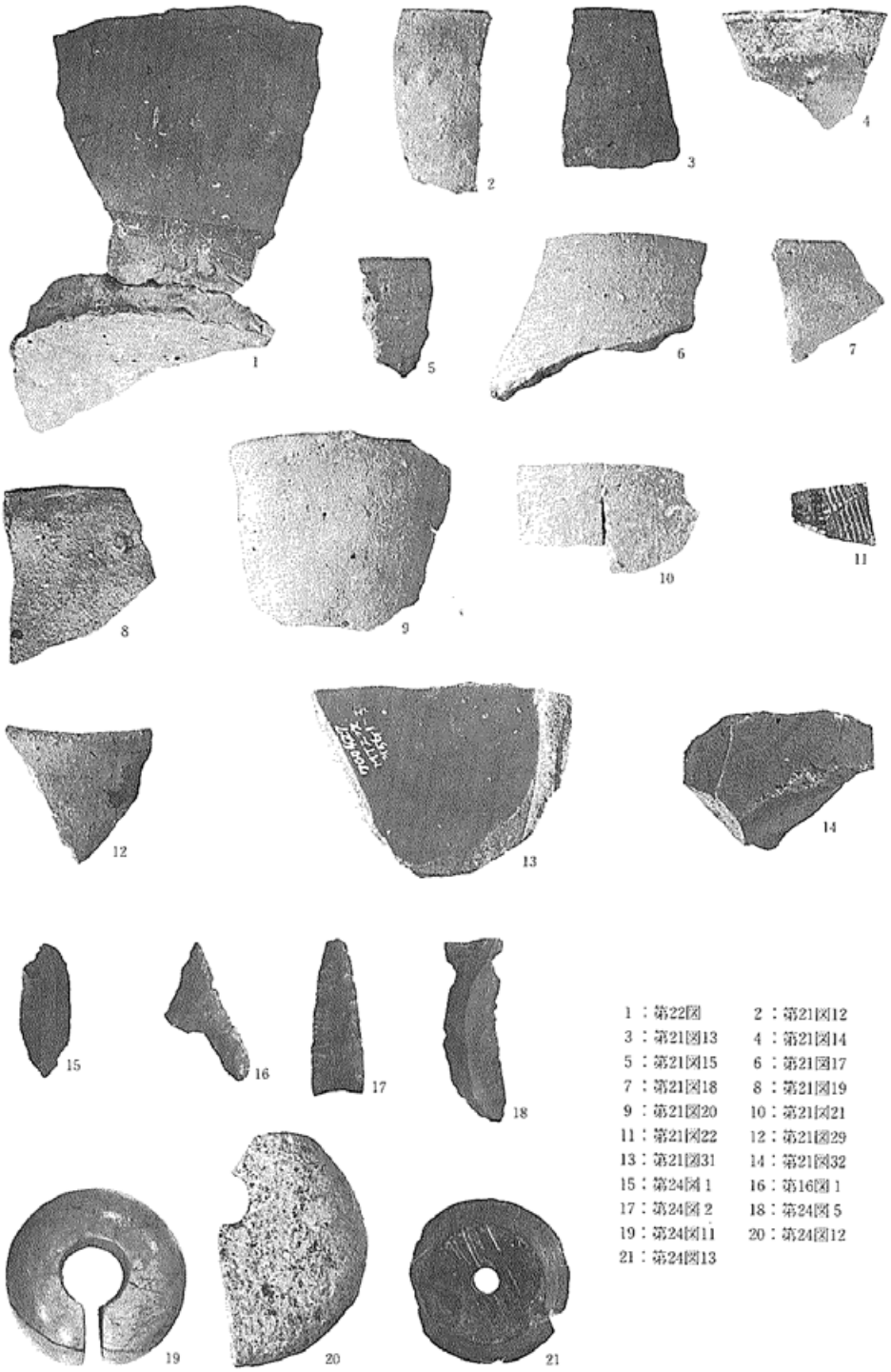


図版４　持長地遺跡　上：第１号建物跡
下：第２・３・４号建物跡



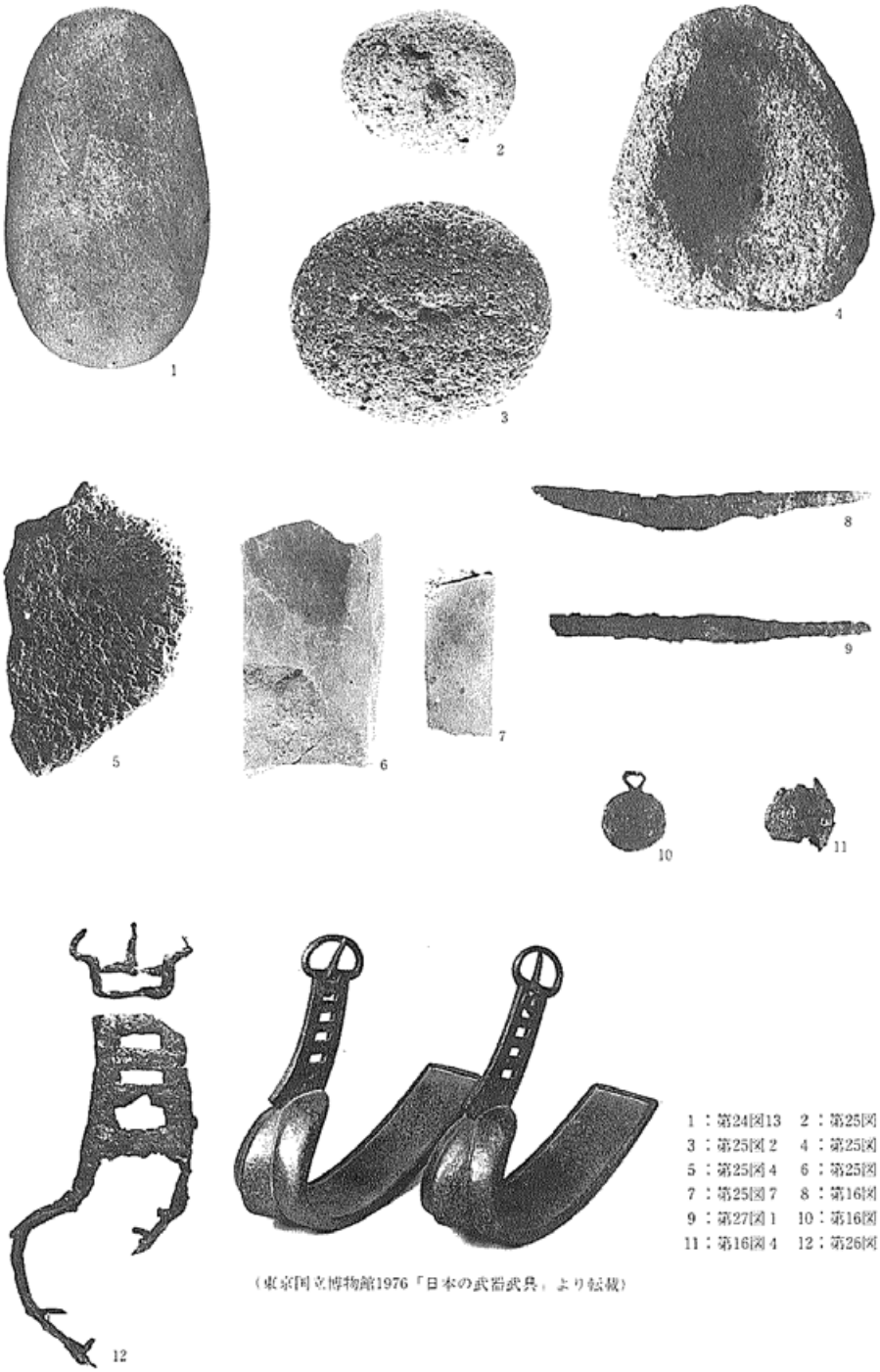
1：第18図10　2：第19図1
3：第19図3　4：第21図1
5：第21図2　6：第21図3
7：第21図4　8：第14図1
9：第14図2　10：第21図5
11：第21図6　12：第21図7
13：第21図8

図版5　出土遺物（持長地遺跡）



1：第22図　2：第21図12
3：第21図13　4：第21図14
5：第21図15　6：第21図17
7：第21図18　8：第21図19
9：第21図20　10：第21図21
11：第21図22　12：第21図29
13：第21図31　14：第21図32
15：第24図1　16：第16図1
17：第24図2　18：第24図5
19：第24図11　20：第24図12
21：第24図13

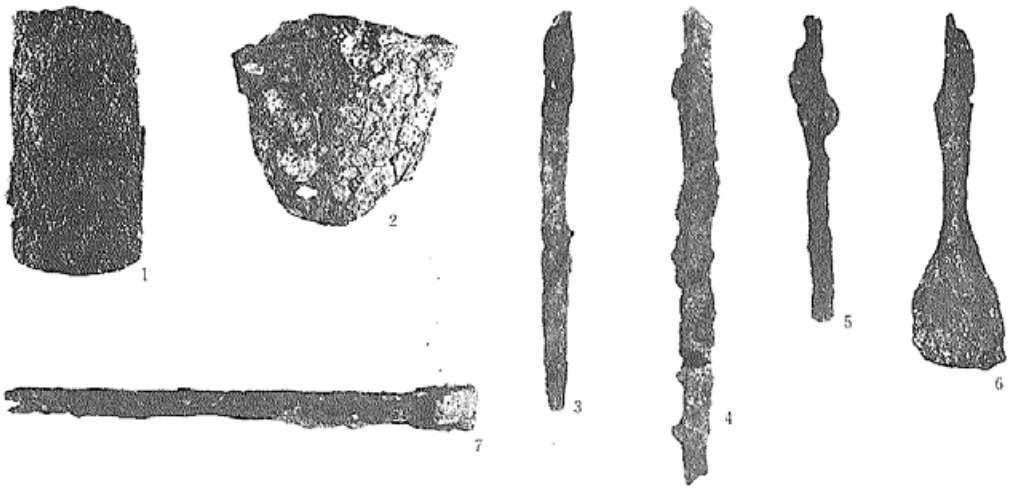
図版6　出土遺物（持長地遺跡）



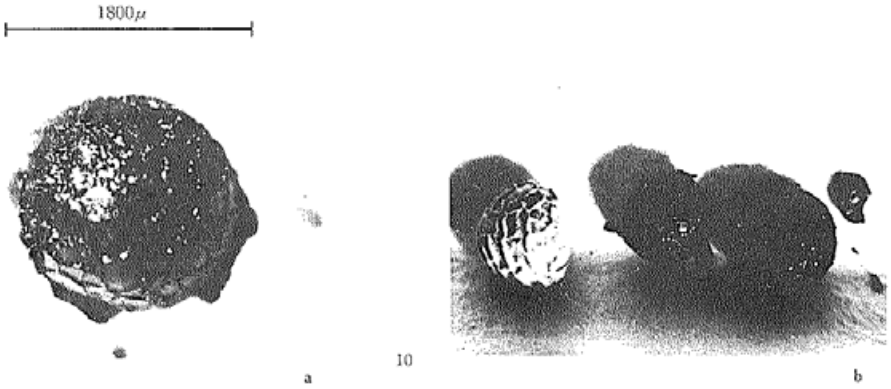
1：第24図13　2：第25図1
3：第25図2　4：第25図3
5：第25図4　6：第25図6
7：第25図7　8：第16図2
9：第27図1　10：第16図3
11：第16図4　12：第26図

（東京国立博物館1976「日本の武器武具」より転載）

図版7　出土遺物（持長地遺跡）



1：第27図3　　2：第27図8
3：第27図4　　4：第27図5
5：第27図6　　6：第16図3
7：第27図7　　8：第28図1
9：第28図2
10：植物遺存体
　a：拡大写真（×33）
　b：エゴマの種子（左、1979年栽培）と出土した植物遺存体（中、右）



（10－a・bは東北大学農学部助教授 星川清親氏の撮影による）

図版8　出土遺物（持長地遺跡）